

---

# 拝啓、魔王様

国高ユウチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

拝啓、魔王様

### 【Nコード】

N0001N

### 【作者名】

国高ユウチ

### 【あらすじ】

私は悪魔。魔と呼ばれる存在の中で、唯一の色彩を持った一人の存在。  
死に掛け薄汚れた私を拾ってくださいただ一人の方のためのみに存在する。

この髪もこの瞳もこの心もこの体も、全てがただあの方のために。

「ねえ、知ってるかしら。悪魔は誰より一途なものよ。天使と違い博愛は謳わず、人間と違い余所に眼も移らぬ。私達はただ一人と定

めた相手に捧げるの」

一途な悪魔とその悪魔に焦がれる男たちの逆ハーストリー。  
ツンツン悪魔の純愛が通るのか。それとも他の誰かが彼女を射止めるのか。

もてもて悪魔の恋物語です。注：主人公は魔王様以外との絡みがあります。

## 拝啓、魔王様【登場人物】＊随時更新します。

伽羅 きやろ

職業：悪魔。魔王の側近

性別：女

年齢：921

一人称：私

魔王であり、養い親である白檀に崇拜と恋愛をあわせた感情を向ける一途な悪魔。

魔と呼ばれる存在でただ一人金色の髪と碧の瞳を持つ。緩やかに波打つ癖のある髪をサイドでまとめ垂らしている。

性格はきつく、自己の主張もきつちりとする。悪魔として絶世の魅力を持ち、美しい容姿で幾人もの天使を墮天させた。

白檀 びゃくたん

職業：魔王

性別：男

年齢：2026

一人称：俺

黒髪に黒目。魔界で最強と歌われる黒の瞳を持つ数少ない存在。幾人が存在する魔王の中の一人。

魔力が強く、怠惰でありながら退屈を嫌う。女も男も好みに合えば手を出す、飽きれば消滅させることもしばしば。

子供の頃から面倒を見ている養い子の伽羅に関しては過保護な一面もあるが、基本的に素直ではない。

自身の住む世界で公爵の地位を得ており、その関連で異世界である

勇者が住む世界を定期的に訪れている。

本来の世界では人界にある城とは比べ物にならないほどの面積の敷地と居を構えている。

上から下まで黒の衣装に身を包むが、纏っている外套は伽羅からの千五百歳記念のプレゼント。

梅香ばいか

職業：悪魔侯爵。魔王の側近

性別：男

年齢：921

一人称：僕

紫がかった短い黒髪に、藍の瞳を持つ。身長210cmと体格が良く、人型であるときの魔王よりも身長は高い。

魔力よりも武道を得意とし拳で敵を叩きのめす。

普段は人界で言うチャイナ服のような衣装を好んで身に着けている。黒地に金の昇り竜。

伽羅とは同期であり同じ年の幼馴染でもある。

いつでもマイペースでフェミニスト。女タラシとしても有名である。

菊花きっか

職業：堕天使。魔王の右腕

性別：男

年齢：2100

一人称：私

銀髪を緩やかに三つ網にし、同色の瞳を持つメガネを掛けたクールビューティ。

冷静沈着で魔王の参謀とも謡われる。細身の体つきだが、魔力は強く彼に適うものはそう居ない。  
慇懃無礼を地でいく男で相手が直属の上司である白檀でも変わらない。彼らの中で一番の年長者でもある。

レイノルド・F・ラッチェ

職業：勇者

性別：男

年齢：21

一人称：俺

世界でただ一人蒼い目と蒼い髪を持つ勇者さま。勇者の存在は血筋であり、勇者になれるのはラッチェ家の次男と決まっている。だが勇者が生まれる時期はランダムで、いつ生まれるかは決まっていな  
い。今代の勇者は蒼い髪を短く揃え、眉がきりりと上がった精悍な顔つきである。顔の造作自体は今までの勇者と瓜二つ。ぶっきらぼうな話し方をし、どこか人を寄せ付けない雰囲気がある。

ハーク

職業：元・宮廷近衛隊隊長

性別：男

年齢：28

一人称：俺・我ら

髪・瞳：共に限りなく黒に近い藍色。切れ長の二重でオールバック。冷たく見える伶俐で精悍な顔立ち。

双子の兄。黒子がない方。

王立近衛隊隊長で剣も魔法も得意。しかし弟に比べると剣を得手としている。

弟に比べると口数が少なく感情表現が苦手。

アーク

職業：元・宮廷近衛隊副隊長

性別：男

年齢：28

一人称：俺・我ら

髪・瞳：共に限りなく黒に近い藍色。切れ長の二重でオールバック。兄とよく似ているが良く見てみれば彼の方が柔和な顔立ち。

双子の弟。口元に自分から見て右側に黒子がある。

宮廷近衛隊副隊長で剣も魔法も得意。しかし兄に比べると魔法を得手としている。

兄に比べると口数は多く、口調も柔らかい。兄の足りない言葉を補う内にそうなった。

シェリル 白魔術師。回復を得意とする。

17歳：女。マイペースな気質を持つ。レイノルドの幼馴染であり、彼に恋をしている。

アイル 格闘家。可愛い名前に反し腕前は十分。

19歳：男。女の子が大好きで子供から大人まで守備範囲は広い。体格はよく精悍な顔つきをしている。

ウェイ 黒魔術師。年齢の割にやや身長が低いのを気にしている。天才肌で扱う魔術は一級品。しかしあくまで人間ではと注釈が付くレベル。

14歳：男。自分よりも身長が低い小悪魔の伽羅に好意を持つ。好奇心旺盛なツンデレ体質。

アドニス・ファン・デル・サール      昔々の魔法使い。

魔法使いだというのに随分と体格がよく、その顔立ちには勇者のそれより精悍できりりとしており、短く刈り揃えられたメイプルレッドの髪のところどころにアッシュグリーンのメッシュが入った色彩が派手な男だった。



はじまり

「おい、お前」

真っ暗な世界。

遠くから脳に直接語り掛けるような声に、沈みかけていた意識が少しずつ浮く。

「死んでいるのか」

「・・・・・・・・・・う」

髪を引つ張り上げられ、顔を持ち上げられる。

向けられる魔力はびりびりと肌を刺激し、今にも消えてしまいそうだ。

けれど、強すぎるそれに意識が沈むことを許してもらえない。

「生きてるのか。なら、返事をしないか」

「・・・・・・・・・・」

「太陽を模した金色の髪に海と森を混ぜた碧の瞳か。こんなところで珍しい」

「・・・・・・・・・・」

唐突に手が離され、顔が地面にぶつかる。

鈍い衝撃に、まだ残っている痛覚が頭が切れたと私に囁いた。温い温度が頬を伝う。

「退屈凌ぎにはちょうどいいかもしれないな」

あの方にとって、私の命は氣まぐれに過ぎなかった。  
けれど、私には彼に拾われた事実だけが全て。

## 序章【1】

「何を仰るのですか、魔王様！！」

唐突なことを告げた主に、背を一杯に伸ばして私は声を上げた。

こんな態度を許される筈が無いのに、自制する気力が根こそぎ奪われた。

本来なら彼の抑止をすべきはずの右腕を睨み付けると、長い銀髪を緩やかに編みこんだ彼、菊花<sup>キツカ</sup>は、メガネを指の腹で押し上げつつそりと息を吐いた。

墮天した過去を持つ彼は、この城では異例の存在ではあるが力こそ全ての魔物の基準で魔王の右腕を任されるほどのやり手だ。

理解できないのは白地の衣服を纏うセンスのみだが、基本的に常識的な彼ですら止めるのを放棄し諦めの境地に居るらしい。

眉間の皺の刻み具合から、賛成はしていないだろうに、押し切られたとも言っのか。

頼りにならないと一瞬で切り捨てると、右隣を見る。

私と同じ白檀様の側近という立場の幼馴染、赤地に金の糸で刺繍が入った人間世界で言うところの東国の衣服を纏う梅香<sup>バイカ</sup>は肩を竦めてこちらを見ていた。

浮かぶのは苦笑で、こいつもダメだとじろりと睨む。

結局頼りになるのは自分だけと気合を入れると、数メートル先の玉座に足を組んでゆったりと座る白檀様に瞳を向けた。

「そう怒らないで欲しいものだな、可愛い養い子。怒ったとしても碧の瞳が輝きを増し、白い頬が上気して益々可愛くなるだけだ」

「何を戯言を！！」

「はははは。なあ、伽羅<sup>キャラ</sup>。俺の言うことが聞けないか？」

「いえ、いいえ、魔王様。ですが・・・っ」

「俺の名は白檀<sup>ビャクタン</sup>だ、可愛い養い子」  
「っ。白檀様！」

魔界の闇よりもなお黒い瞳が私を射抜く。

睨まれたわけでなく、ただ見詰められただけ。それだけで全身震えが走り、冷や汗がどつと流れた。

かたかたと制御できない細かさで身体が揺れる。

彼は怒っているわけではない。

ただ、少しの力を解放しただけで、私は身が竦み動けなくなる。

白檀様の側近と呼ばれても、彼との力の差は歴然とし、その気になれば羽虫のように指先で潰される。

圧倒的な存在感。

だが、それでもあつさりと引けぬ理由が確かにあった。

震える身体をどうにか宥め、掠れる声を絞り出す。

「・・・それでも、勇者を魔王城に一週間も泊めるなどとは」

「そこまでにしておきなさい、伽羅」

「菊花」

「白檀様が仰られるのです。私<sup>わたくし</sup>たちの応えは『是』以外にないでしょう」

「ああ。それに、白檀様が人間如きにどうこうなるはずがない。それを良く知っているのは、僕達ではなく君自身のはずだが」

「貴様に言われなくとも　　っ。私が白檀様のお力を疑つてるとも言うのか!!」

ぶわり、と魔力を開放する。

小悪魔で居る状態の金色の髪が揺れるのが視界に映る。

例えば子供の姿でいようと、魔力が薄れるわけではない。

白檀様の養い子として恥ずかしくない力を身につけるために、血の滲むような努力も、死に掛けるほどの修行も欠かしたことは無かつ

た。

例えば相手が男性系であろうとも、人間と違い悪魔の私には関係無い。私が遅れを取る理由にはならない。

私の本気の怒りに早々と両手を上げ、降参の意思を示した梅香に力を納める。

青く発光していた魔力が小さくなると同時に、壇上の白檀様に声を掛けられ慌ててかきこまる。

醜態をさらしたことに後悔が湧き上がり、恥ずかしくて消えなくなつた。

どれもこれも、隣に立つ幼馴染の所為だ。

「伽羅」

「・・・はい、白檀様」

「俺の言葉はお願いではない」

「はい。・・・申し訳ございませんでした、白檀様」

「許そう、可愛い養い子。俺の心配するなどという行為も、俺の言葉に反論するという行為も。代わりに命令しよう。遊びに来る勇者の面倒はお前が見るのだ」

脳裏に覚えている勇者の顔が浮かぶ。

世界に選ばれた勇者の癖に、やる気が無くへらへらと白檀様のところに遊びに来ていた、空を写したような蒼い髪を持つ男の事を。

世界でただ一人持つ蒼色の髪を後ろで軽く結わえ、白銀色の鎧を纏う、この世界の勇者を。

思い浮かべるだけで胸の奥がざわめき落ち着かなくなる。

だが、感情を一切顔に映すことなく私は口を開いた。

「はい、白檀様。仰る通りに」

ゆったりと肘に顎を乗せてこちらを見る白檀様は、ゆるりと唇を上げて満足げに頷いた。

その麗しい笑みを向けてもらえるだけで、これからの苦勞も報われるのだと畏まって頭を下げた。

## 序章【2】

「やれやれ。本当にあなたは心配性でいけない」

「うるさいわ」

「本当だな。魔物のトップレベルにいと認識されている僕たちよりも、百倍は強いと知っているだろうに」

「黙れ」

「度を越えれば無礼にしかありませんよ」

頭の上から降ってくる小言に、私は足を止めた。

謁見室からもう随分と歩いているが、菊花と梅香の言葉がやむことはない。

私の怒りを感じてか、すれ違う部下も一人もおらず、調子に乗っているらしい二人は普段は滅多に共同戦線などほらないはずなのにと忌々しく感じるほど息がぴったりだ。

何が言いたいと睨もうにも身長差がありすぎて、首を上げるのも結構辛い。

なので端的に切って捨てていたが、我慢も限界に達しそうになっていた。

瞳を閉じ意識を集中させる。

「おや」

「おお」

瞳を開けたときには、彼らの視線は随分と近くにあった。

小悪魔の身体であるときの私は身長が僅かに135cmほどしかなく、長身である二人　特に梅香は人型でもメートルを超える巨体である　に視線を合わせるだけでも一苦労だが、本来の姿に戻った今ならばさして難しくない。

髪の色が濃くなりさらなる輝きを放つ。右で結っているそれを後ろに流すとずっと目を細め彼らを睨んだ。

肌を包むのは黒革で出来た露出の高い衣装。長い足にヒールの高いブーツを履いき高らかに靴音を響かせ距離を詰める。

先程よりも首を上げる角度が柔らかくなった菊花を睨み、次いで視線をずらすと少し首を上げ梅香も睨む。

「静かにしろと言っているのが聞こえないの」

「怖いな。小悪魔の姿でいるときはまだ可愛らしさが前面に立つくせに、本来の姿に戻ると怒りもまた違った印象を与える」

「全くだ。白檀様の側近としては余程そちらの姿の方が相応しいでしょうに」

「煩い。菊花、あなたの言葉に従う謂れは無い」

「まあ、そうでしょうけどね」

「勿体無いと思うけどな。いい身体をしているのに」

無造作に伸ばされた手が胸を掴む。

頬を赤らめる必要も、いまさら恥らう関係でもなかった。だが、不快には思っ。

眉間に皺を刻み、力を使おうとした瞬間。

ばかり、と音が弾け青白い閃光が火花を散らす。

「おっと・・・これはまた」

黒焦げになった己の掌を余裕の表情で眺めた梅香は、くすくすと笑いながら自分の手を前に翳した。

その顔に驚きは無く、むしろ面白がる様子だった。

ちらり、と横目で梅香とは反対隣にいる菊花を眺めればため息を吐



きながら眼鏡を指先で押し上げている。  
その姿に内心で胸を撫で下ろした。

「大丈夫ですか！？お姉さま！」

大理石の廊下に響いたアルトの声。

様々な呪が刻みこまれた褐色の肌に濃緑の髪を持つ少女は、黒地に赤の入ったターバンを髪に巻いている。伏せられたままの瞳は彼女が盲目であることを示していた。

何よりも特徴的なのは身体中に彫られた呪。普段は黒いそれを怒りのため赤く発光させた存在にため息を一つ落とす。

成体でいる私の胸ほどまでしかない少女　　香は私のただ一人の傍仕えであり腹心の部下だ。

だが白檀様の側近である私の傍仕えであっても、一個人で見れば私と肩を並べる梅香の方が当たり前に香より身分は上になる。

普段どれだけおちゃらけていようと、気が向けば城のメイドどころか人間にすら手を出す好色男であろうと、彼は魔王側近なのだ。

けじめをつけるべき相手　　つまり、他人の目がないところで何をされても子猫に引つかかれた程度にしか思わない梅香は処罰を下したりしないだろう。

だが、相手が菊花となれば話は別となる。

元天使であつた所為か彼には規律に厳しい部分がある。

上下関係をはつきりとさせるのを好み、分別を弁えない小物は容赦無く消すこともあつた。

しかしながら何故見逃すのかは理解できないが、今のところ香に手を出す気は無いらしい。

「香。こちらへ来なさい」

「はい、お姉さま」

「怪我はない？」

「はい。あたしは大丈夫です」

「酷いな、伽羅。今のは何をどう見ても僕がやられてただろう？僕の心配はなしなのか？」

「あなたのは自業自得でしょう。その位で済んだことを感謝すべきです。あと数瞬でも遅ければ伽羅があなたの手を吹き飛ばしていたでしょうから」

「そうね。その右手首があるのは香のおかげよ。感謝なさい」

「二人とも友達がいがないコメントをありがとう」

「友人になった記憶は無いですからね」

「腐れ縁ではあるけどね」

「それはどうも。涙がでそうなコメントだ」

「涙が出たら魔族として欠陥品ですよ、梅香様。変な病気だといけません。速やかにお姉さまから離れてください。永久に、とこしえ久遠に消えてくださると尚良いです」

「君は本当に伽羅以外は眼中にないんだな。年も力も身分も上の相手に物怖じ無く命知らずに主張するところは感心するよ」

「あたしはお姉さまのことでは譲らないと決めているんです。人目をはばからずお姉さまに不埒な真似をする輩など全て滅べばいい」

「・・・本当に、感心する。他の誰にでもなく、この僕に対してそれを言うのだから」

じんわりと、藍色の一重の瞳を細めた梅香は香を眺めて頷いた。その仕草は今にも狙いを定めんとする獣に酷似していて嫌になる。香の腕を引っ張り抱き込むと小さな悲鳴を上げた少女は、すぐに腕の中で大人しくなった。

「おや？伽羅に抱きしめられるなんて羨ましい限りだな。僕にもする気は無い？」

「全く無いわ。私の可愛い香とあなたと一緒にしないで」

「本当に手厳しいな、伽羅は。千年近くも付き合いがあるのに」

「だからこそ、とでも言うべきかしら？」

「はあ。本当につれないな。ま、そこも含めて魅力的なんだが」

「気持ち悪いわ」

「全くです。早く居なくなってください」

「本当に辛らつだな」

「仕方がありませんね、それは。普段の行いを省みてからアプローチすればいいんじゃないですか？さて、ではそろそろ私たちは失礼しましょう」

「はいはい」

「私たちは勇者様ご一行の為にしっかりとした警備体制を準備します。伽羅。あなたは白檀様直々に面倒を見るようにと言われていますのでくれぐれも粗相が無いように」

「判ってるわ。ここに居る、誰よりもね」

「そうですか。ならば宜しい。勇者が来るのは数日後と聞いております。部屋の準備はあなたに任せます」

「随分と早いね」

「話自体は前から上がっていた内容でしたので。人間からの面会の申し込みが続いているのはあなたもご存知でしょう？」

「ええ。この地に現れるたびに繰り返される行事ですもの」

「ならば、あなたの為に白檀様がぎりぎりまで口を開かないのも毎度のこととご存知のはず。あの方の過保護ぶりにも呆れますが」

眼鏡のつるを押し上げた菊花は、腕を組むとため息を吐いた。

言葉通りに呆れているのだろう。けれど白檀様はたかだか養い子一人の為にそこまで視野が狭くなる方ではない。  
考え違いをしていると指摘しようかと思ったけれど、それより先に二人は踵を返し背を向けた。

### 序章【3】

「お姉さま」

「何？」

「勇者どもがこの城へ来るとは本当ですか？」

「ええ。菊花も言っていたでしょう？この世界の恒例行事のようなものよ」

「恒例行事」

「そう。あなたも知っている通りに、私たちが住む世界には幾つもの鏡面世界があるわ。その世界一つ一つを伯爵以上の地位があるお人が支配している。白檀様はこの支配者。世界の『王』よ」

「世界の・・・王」

「白檀様が望めば天候も自然も全てが従う。滅べと願えば世界が消える。私たち『魔族』は力を持たぬ人間とは違う。その長命さと人知を超えた力は『天使族』と同じものだけれど、人間へ力を貸す『天使族』とも違う。ここは私たち魔族が支配する世界。その中のトップは白檀様。だから彼は魔の中の王、『魔王』と呼ばれる」

「それでは勇者とはこの世界では何の役割を果たすのです？異界の御伽噺のように白檀様を打ち倒しに来るのですか？」

首を傾げた香の、至極真面目な問いかけに噴出した。まさか、そんなのありえない。

確かに、勇者の一族は破魔と呼ばれる特別な力を持っている。

己の魂の存在と引き換えに、ただ一度だけ魔王に対抗する力を。

それを与えたのは私たちの世界に存在する神で、一方的な支配に対する勢力として与えたのだと聞いていた。

だが。

「この世界の勇者の主な役割は交渉よ。白檀様に対して力を行使することはないわ」

「交渉ですか？」

「ええ。この世界に長く居座らずに、なるべく早くあるべき世界へ帰れと。私たちからすれば瞬きするような時間でも人にしてみれば随分と永い。圧倒的な力を持つ『魔族』がこの地に滞在する時間が長ければ長いほどこの地の受ける影響は大きいわ。事実、この地に住みつづけて二十年。白檀様のお好みでこの地は常に夜と同じ闇に包まれているけど、その間に死滅した動植物は数知れない。彼らからすれば私たちの存在は害悪のようね。まあ私たちがこちらに来る都度、世界に出来た歪から下級の魔物が現れるくらいなのだし、そう感じるのも仕方が無いけれど」

「ですが白檀様がお治めにならなければこの世界の歪はもつと大きなものとなりましょう」

「人はそれを知らないわ。知る必要も無いことよ。それに長居をすれば忌々しい天使たちがこの地に姿を表すわ。無駄な接触はお互いに避けたいものよ」

盲目の少女の頭に手を乗せる。短いけれど柔らかい感触のそれに唇を緩ませた。

心地よさ気に目を細める仕草はまるで上品な猫のよう。

安心して甘えてくる香の耳を指先だけで撥ると、うつとりしている彼女に忠告する。

「いいこと、香。彼らは『人間』。私たちとは種族が違うわ。想いの表し方も、感情の起伏も、恐怖する対象も愛情の示し方も。人とは儚く泡沫の存在。気を許してはいけないわ」

勇者が『魔王』の存在を脅かす最初で最後の駒なのは、何処の世界でも同じなことから

## 序章【4】

翌日の朝、普段着ている革の衣服ではなく、流れるドレープも豊かなドレスに着替えた私は長い階段の中腹に居た。

赤い絨毯がしかれているそれは、全ての屋敷に切れ目無く届いている。

もちろん、今見下ろしている玄関に向けても。

近づいてくる気配に苛立ち、仕舞っている羽がうずうずと動く。

すると私の落ち着かない様子が気がついた梅香が苦笑して私に手を伸ばしてきた。

小悪魔で居る私からすれば見上げるほどの大男は、あやすように私を抱き上げる。

藍色の瞳が目前に迫り、じとりと睨みつけるが抱き上げた手は離されない。

「落ち着かないみたいだね、伽羅。そんなに勇者ご一行が来るのが気に入らない？」

「ええ。判っているでしょう？私は白檀様に仇成そうとするもの全てが嫌いな。ご命令でなければこの屋敷の敷居を跨ぐ前に消し去ってやりたいわ」

「それはまた物騒な話だな。折角可愛らしい姿をしているのに」

「これは私の趣味じゃないわ。菊花に無理やり押し付けられたのよ。白檀様のお顔を立てるためでなければ、誰が『白』なんて着るものですか」

見下ろす衣装は染まらぬ純白。

いらり、と湧き上がる黒い想いに唇を噛む。



他の魔族の趣味は知らないが、私は白は好まない。

私が好きなのは白檀様の色である黒で、基本的に服もリボンも装飾品につける石も黒で統一されている。

それなのに用意されたのは菊花の意志が通された白。

幾重にも重なるレースも好みではない。絡み付くように流れるリボンが不快ですらある。

それでも白檀様が良いと仰ったとの一言で、噛み付きたい気持ちは頭上から押さえ込まれる。

かの人と正反対の色を纏う屈辱と、かの人直々の言葉は複雑に私の心を乱し混乱させた。

私の感情を全て読み取っているとでも言いたげに唇を歪めた梅香は、子供にするように頭を撫でた。

落ち着かせようとしてるのだろうが正直全くの逆効果だ。

けれども見詰める眼差しがあまりにも静かで、仕方なく深呼吸をして気を静める。

「仕方がないさ。ここの世界の人間は僕たちと違って『黒』よりも『白』を好む。僕たち魔族よりも天使族により近い生活を送っているからね」

「いつそ、永遠に天使族に管理されていればいいのよ」

「それは出来ないと君も知っているだろう。世界は正と負で成り立つものだ」

「それくらい判っているわ」

「ならそろそろ機嫌を直すんだ。勇者様ご一行が門を潜ったみたいだ」

言葉と同時に宙に映像が映し出された。見なれない馬車がかたと揺れている。

立派な葦毛は賢そうな目をしていた。

この魔力の波動は菊花のものだ。きつと、いい加減に持ち場に戻れと無言で促しているのだろう。

一つ息を吐き出すと梅香の腕を叩く。こうなれば初めての体験だからと下がらせた香を傍に置いておけばよかったと少しだけ後悔した。力が緩んだのを確認して、彼の腕から飛び降りる。

視界の端に赤いリボンが揺れて、少しだけ気が紛れた。

唯一身に纏う白い外の色は、ずっと昔に白檀様に与えられたものだ。魔力で加工して使っているので腐食は見当たらない、血の色よりも濃い紅色のお気に入りのお品だった。

「一人で大丈夫かい？」

「誰に言ってるの？」

「それはまた失礼。なら僕は大人しくここから観察させてもらうよ」

言葉と同時に姿が消える。

紛れるように感じた気配に、存在はまだここにあるのを意識した。

別の部屋から見えている菊花とは違い、彼はこの場での見物を選んだらしい。

それも人には判らぬよう、しっかりと姿と気配を消して。

悪趣味だと瞳を眇めれば、幼馴染だからこそ判る微かな気配が笑いに揺れる。

どうせ止めても聞きはしない。ならば無駄骨は折りたくないの一つ息を吐き踵を返す。

気配を辿れたとしても彼の姿は目に映らない。

私にすら姿を隠し、けれどその存在感だけをアピールしたまま留まるのは、感傷に流されそうになる私を止めようとしての彼らしくない配慮かもしれない。

## 序章【5】

馬車から降りる人影を待たずして宙に流れている映像が途切れた。全くの静謐が屋敷を包む。

今なら針の落ちる音でも大きく反響するかもしれない。

玄關の前で気配が止まる。

目を眇めれば、魂の輝きがはっきりと見えた。

桃色、浅黄、黄緑、そして一際大きな蒼。

どうやら今回の勇者ご一行は四人連れらしい。

前回は確か四人だった。何か四という数字に意味でもあるのかもしれない。

こくりと首を傾げ、まあどうでもいいかと息を吐き出す。

指先で小さく円を描きそのまま手前に引いた。

「！！？」

一様に驚き足を止めた存在に目を細める。

白いローブを羽織った亜麻色の髪の少女を背に、半そでに長ズボンの身軽そうな格好をした鍛えた身体の茶髪の青年が立つ。手に嵌める力ギ爪に目を細めその特徴から白魔術師と格闘家かと目星をつける。

丸っこい目を好奇心に輝かせきよろと当たりを見まわしながらも杖を構えた小柄な少年は、不意に顔を上げて動きを止めた。幼いながらも随分と魔力が強いらしい。

そして彼らの真中に立つ蒼い髪が印象的な青年は、相も変わらず白銀の鎧に剣を構えている。

幾度会合を繰り返しても変わらぬ装いに作ったものではない笑いが

漏れた。

じつと姿を見詰めるが違和感を感じて眉を顰める。まさか、と息を呑み観察しつづけ確信に至る。

どうやらあの小柄な少年以外に私の姿は見えていないらしい。今回の一行のレベルの底が知れたと息を吐く。

階段を一段一段降りながら徐々に力を解放すれば、残りの人間も漸く気づいて顔を上げた。

ばさり、と意識して羽を広げれば、目論見通りに視線がくぎ付けになる。

これは彼らと私の境界線。

人と、そうでないものとを意識させるための儀式。

羽ばたき彼らの視線よりも微かに高い場所で動きを止める。

そのまま白檀様にするように、優雅に一礼して見せた。

髪を揺らす角度すら意識し、首を僅かに傾げ唇をゆるりと持ち上げる。

自分の容姿が人間に対しどれ程の影響力を持ち得ているか、私はきちんと理解している。

人では持ち得ない肌理細かく透けるような白い肌。頬は桜色に染まり唇は何もせずとも桃色に色づく。

光を紡いだような輝く金系の髪は右サイドで結い上げて波を打ちくるくると流れる。

長い睫に彩られた碧の瞳はエメラルドですら及ばないと吟遊詩人に言わしめた。

小悪魔の姿であるためメリハリはないが、それが返って華奢な身体を引き立たせる。

幼い容姿に悪戯っぽい笑みを浮かべれば、人どころか魅了に慣れている魔族ですら『堕ちず』にいるのは難しいと、白檀様に言わしめた小悪魔が一人誕生だ。

「いらっしやいまし、『勇者』様方。ようこそ『魔王の城』へ」

## 一日目【1】

「いらっしやいまし、『勇者』様方。ようこそ『魔王の城』へ」

朗々と響く声で本音とは逆の言葉を口にする。

厭味を存分に乘せた笑顔は、けれども愚鈍な人間たちには通用しなかったらしい。

白いローブを纏った少女はまるで天使にでも逢ったように胸の前で手を組み、格闘家らしき青年と小さな少年は息を忘れて見入っている。

目を細めて微笑みかければ、一拍の間を置いて茹るほどの勢いで頬を染め上げた。

黒い羽の羽ばたきを弱め床に舞い降りる。

ここで羽が数枚散れば良かったが生憎悪魔の羽は天使のそれのように鳥のようにには出来ていない。

つま先から着地し伏せていた瞳を上げる。

真正面に立ちながら、けれど見上げる形となった勇者と視線が絡み合った。

そこでまたしても違和感に襲われる。

蒼の瞳を眇めた彼から、戸惑い以外の感情を見つけられないのだ。

不思議に思い小首を傾げる。

「私の顔に何かついておりますか？『勇者』様」

問いかけに、随分と間をたつぷりと置いた後、漸く口を開いたのは目の前の青年ではなく周りを囲む『その他』の人物だった。

割り込むように間に入り込み、目を輝かした少女は何を考えたのか私の両手を両手で包み、しゃがみこんで視線を合わせてきた。その勢いに微かに押され、思わず身を引くも引きつった態度に気づきもしない。

「あの、私！私の名前はシェリルって言います！職業白魔術師で、回復を専門にしています」

「俺はアイルだ、お嬢さん。ところで君、お姉さんいない？」

「馬鹿なこと言っていないでどいてよ。　　僕の名前はウェイ。天才黒魔術師さ。君、僕よりも小さいね。気に入ったよ」

わつと群がる彼らに一瞬瞳を眇め、悟られないように小さく息を吐き出す。

この感覚は、遙か昔にも一度だけ感じたものに酷似していた。

群がれる煩わしさに眉を顰めなくなるが、相手は主の客人と幾度言い聞かせ特大の猫を被る。

本音を言えば彼に仇為すかもしれない存在に笑顔を向けるのは嫌だったが、何とか心を落ち着かせた。

私が誰かを忘れ困う人間を一瞥し微笑むと、全てを有耶無耶にするためまだ一言も話していない青年に向かう。

「こんにちは、レイノルド」

「え？」

「私があなたの名前を知っているのが可笑しいかしら？」

「・・・・・・・・」

難しい顔をして沈黙を保つ相手に、疑惑は確信に変わる。  
蒼い髪に蒼い目。この世界で唯一の色を保持する勇者様。  
けれども逢う度に伸ばしていた髪は短く、結わえていた飾り紐もない。

覚えている『人』と重なりながら、けれども決して同じではありえない。

ふつと唇が孤を描く。所詮人間などその程度のものだったのだ。

「この世界の勇者の名前は全て同じでしょう？レイノルド・ラツチエ」

「正確に言えば、俺の名はレイノルド・F・ラツチエだ」

眉間の皺を解くことなく重々しく告げられる。幾度も見てきた顔なのにこんな表情を向けられるのは初めてで何やら新鮮だ。

「何故、俺の名を？」

「私はこう見えてもあなた方の数十倍は生きているの。あなたより前の勇者たちも全員が『レイノルド』を名乗ったわ」

「あなたは俺より前の勇者をご存知か」

「ええ。私は『魔王』様の側近ですもの。『勇者』を知っているのは当然でしょう」

「そうか」

それきり黙りこんだ青年は、これ以上話を続けるつもりはないようだった。



「それで、君の名前は何て言うの？お嬢さん」

脂の下がった表情で、問うてくる男に少しだけ迷う。果たしてこれに応えは必要だろうか。

しばしの沈黙後、彼に返事をしたのは私ではなく別の声。

「彼女の名前は伽羅と言う。そして、僕の名は梅香。好きなように呼んでくれて構わない」

「何故出てきたの？」

「君が困っているように見えたからね」

ひょいと背後から抱きかかえられ視界が一気に高くなる。近くなつた藍色の瞳は飄々とウィンクした。

はしたなく舌打ちしそうになり慌てて堪える。

認めたくないが今この場にいるのは客人で、はしたない真似は白檀様の顔に泥を塗るのと同じ行為だ。

同族に抱き上げられていることで十分に私の面子は潰れたと思うが、苛立ちに任せて行動するには与えられた役目に背くも同じ。

「キャラ？キャラって言うの？可愛い名前ね」

「キャラちゃんか・・・うん。君にぴったりだ」

微笑ましそくに頷く彼らにうんざりとする。私たちの名前は彼らの

国にはない発音なので浮いた発音が耳障りだった。しかも自身よりも遙かに年下の相手に『ちゃん』づけ。自国の民にすらそんな呼び方はされない。虫唾が走りそうではあるがそこは気合で乗り切った。

「呼び捨てで十分ですわ。私は今回あなた方の案内役を仰せつかっておりますもの」

精々ふんわりと微笑めば、了解の言をあっさりと得れた。正直少し話ただけでこれ程に疲れる彼らの相手を一週間なんて気が遠くなりそうだ。自分を抱き上げる腕を叩けば、あっさりと床に下ろされた。

毛足の長い絨毯に足を下ろせば、赤い糸が足首を攪る。

「それでは、勇者様方。魔王様の御所へお連れいたします」

こちらを見詰める蒼の眼差し。懐かしくもあるそれに笑いかけ踵を返した。

## 一日目【2】

隣を歩く幼馴染は何処となく機嫌が良さそうに見えた。

今にも鼻歌を歌い出しそうな雰囲気で、シェリルと名乗った白魔術師と会話をしている。

話題が豊富な梅香は尽きることのない話題で女性を楽しませるのが得意だ。種族を問わない女誑しなのは知っているが、その手腕を目の当たりにするのは久しぶりだ。

だがどうせ誑しこむなら全員を会話に巻き込んでくれればいいのに。心の中で小さく毒づく。

『何、伽羅。妬いてるのか？』

『馬鹿なことを言わないで。あなたが一人しか相手をしないお陰で残りの全てが私に回っていることに腹を立てているのよ』

『でも久方ぶりの勇者様だろう？ 尽きない会話があるんじゃないのかい』

『厭味のつもり？』

『まさか』

くつくつと笑う声が脳裏に響く。思念だけの会話は聞き取られる心配がない分安全でもあるが、同時に自覚するよりも深くまで考えを読み取られる可能性がある。勇者たちとの会話の一方で続けるには梅香は油断がならない相手だ。一方的に繋がっていた思念を打ち切り、馴れ馴れしくも肩を抱こうとしてきた男をかわす。

「いやあ、でもこんなに可愛らしい子が出迎えてくれると思わなか

つたな。最悪いきなり命を狙われると考えていたし」

「そうだね。命を懸けてここまで来たんだ。どんな化け物が現れるかと思っていたよ。話が出来るのかも怪しいと思っていたし」

「だな。ところが蓋を開けてみれば話も通じて見目麗しい美少女の登場だ。正直、キャラちゃんくらい可愛い子にお目に掛かったのは初めてだよ。これじゃ我が国自慢のお姫様も姿が霞むね」

「不敬だよ、アイル。少し前までは姫、姫と煩かったくせに」

「その通りだ。魔族は力が高い者ほど見目麗しいと聞く。気を抜きすぎるな。ついでに年を考えろ。色目を使うには相手が幼すぎる」

「レイノルドは堅物だな。折角こんなに可愛い子とお近づきになれるチャンスなのに」

ひょいと肩を竦めた青年の暢気さは天晴れなものだ。見た目に騙されるなど親切に忠告してやりたくなるくらいの馬鹿である。

幼い見た目に騙されること無かれ。美しい見た目に騙されること無かれ。

綺麗な薔薇に棘があるのは、全世界で共通であろうものを。

ふわり、と微笑を浮かべれば、見詰めた相手は息を呑み耳まで顔を赤らめた。

私相手に人間が発情するのは良くあることだが、この姿でも簡単に堕ちる人間達には幼女趣味が多いのだろうか。

目の前の男に欠片も興味がないので確認する気にもならないが、今回もその他の人間は簡単に御せそうだった。

「ねえ、キャラちゃん」

「何です？」

「君は魔王にとってどんな役どころになるのかな？」

「役どころですか」

「そうだね。君は見たところその大男に比べて小さく華奢だ。僕ですら押さえ込めそうに見える位に」

侮辱とも取れる言葉に目を細める。すると私の怒気を感じ取ったらしい梅香が、くすくすと笑いながら間に入った。

「そこまでしておいた方がいいよ、君たち。彼女はこう見えて魔王様の第一の側近だ。そして俺と同じ年の幼馴染でもある。見た目に騙されてはいけないよ。彼女とて千年に近い時を生きた魔族だ」

「千年！！？」

「そうだ。勇者君。君のご先祖様である初代レイノルドを迎えたのも彼女だよ」

何処か挑戦的な色を交えた瞳を向ける梅香は、先ほどまでの陽気さをすっぱりと脱ぎ捨てていた。感情を露にしているわけではないけれど、確かに違いを感じたのかレイノルド以外のメンバーは顔を引きつらせる。

久しぶりなので忘れていたけれど、そう言えば代々の勇者と梅香の関係は中々に最悪だった。

今回の勇者はどうなのだろう。

唇に指を当て観察すれば、眉間の皺を深めたレイノルドはゆっくりと口を開いた。

「それを俺に話してどうしろと言った？俺は初代ではないし、話題に出されても困る」

「へえ。それが君の出した答えか」

「何がだ？」

「いいや？判らないならそれでいい。所詮僕らは相容れない存在だと確認したただけだ」

唇を歪めた姿は普段の飄々とした態度からは考えられないほどに、実に魔族と呼ばれるに相応しいものだった。

唐突にそれを向けられたレイノルドは戸惑いの眼差しをこちらに向ける。

一つため息を落とすと、過保護な幼馴染の袖を引っ張った。彼の理性は普段はしっかりしているのに、相性の悪い勇者相手だとすぐに振り切れる。

「梅香。無礼よ」

「そうかな？」

「過剰な態度は白檀様のお顔に泥を塗る結果になるわ。自重しなさい」

「そうだった。君の最大の基準を忘れるところだったよ。悪かったね、勇者殿。僕はいつも可愛い幼馴染に関しては理性が緩むらしい」

「ああ、それ判ります。キャラちゃんは可愛らしいですものね」

「いいや。この子の本当の姿を見たら、さすがにその台詞はぱっと出てこなくなるよ。まあ、危うげな雰囲気は変わらないけれど」

「本当の姿？」

首を傾げるシェリルに、唇の前で指を立てた梅香は綺麗にウィンクを決める。その仕草にぞわぞわと鳥肌が立った。相変わらず気障な男だ。

「これ以上は秘密だよ。それに知らない方が君たちのためでもある。深入りはしない方がお互いのためだ」

「でも・・・」

「折角の滞在を無残なものにしたくないだろう？僕たちも君たちにはいい記憶だけを残してもらいたい。ねえ、伽羅」

「そうね。その為にもその悪い手癖を働かせないように気をつけて頂戴。梅香は魔界きつての女誑しですわ。シエリル様もお気をつけあそばせ」

私の言葉に目を丸くした少女は、ふわりと頬を淡く染めた。

赤くなった頬を両手で押さえ込み、隣を歩くレイノルドに視線を送る。

その姿にピンと来て、横目で梅香を見れば面白そうに腕を組んで見物していた。

忠告した端からつけこむ隙を与えるなど愚かだと思いが、素直そうな少女には伝わらないだろう。

その気になった梅香につけられる薬はなく、飽きるまでは放っておくのが一番いい。

下手に関わったら思わぬ火の粉が飛び散りそうだ。

最後の角を曲がれば謁見室への扉が見えた。

一度足を止め勇者一行を振り返る。

一人一人と視線を合わせればさすがにここが何処か理解できたのか先ほどまでの暢気な雰囲気はなりを潜めた。

「こちらが謁見室となります。心の準備は宜しいでしょうか？」

先ほどの騒がしさを一変させ、引きつった表情を浮かべる彼らにもさすがに白檀様の威光は理解しているらしい。緊張に固まる中、それぞれの武器を握り締める。

その態度は反乱分子と見なしでも良いものだと言いつても良かったが、所詮彼らの力では傷一つつけることは適わない。この世界で、白檀様を傷つけられる可能性がある人間はただ一人だ。

そのただ一人に視線を向ければ、何故かこちらを見詰めていたら彼と視線が絡む。

他のメンバーとは違い彼の手は武器に掛かっていない。意外に思い目を丸くすれば、眉間に皺を深深と刻みこんだ。しかめっ面を曝したレイノルドに小さく笑う。

「あなたは、武器を手になくて宜しいのですか？」

「俺が武器に手をかけたなら。あんたは容赦なく俺を殺しに掛かるだろうが」

「断言なさるのですか？ 私はあなたの仲間が武器を構えても何も言わなかったのに」

「こいつらと俺は違う。俺はこの世界の勇者で、唯一魔王に対抗しうる人間だ。そしてあんたは魔王の一の部下で彼にこの上なく忠誠を誓っている。本当は今だって魔王に武器を向けようとしているこいつらを消したくてうずうずしているはずだ」

「・・・随分と、私を判っているような仰りようですこと」

「はずれていたか？」

真っ直ぐに見詰めてくる瞳に微笑みで答える。子供だからと侮ることがない姿は確かに覚えているものと面影が重なった。私たちの会話を聞いていた他の面々は、青い顔をして武器を持つ手に力をこめ



る。

漸く私が何者であるかを理解してくれたらしい。

不必要に無礼を働く気はないけれど、馴れ合うつもりはないので警戒するのはいい心がけだ。

勇者ご一行を名乗るのであれば、それくらいは始めから判っていて良さそうなものだけだ。

「さあ、伽羅。魔王様がお待ちだ。こんなところで何時までも無駄な時間をとるものじゃない」

「そうね。それでは皆様、くれぐれも粗相のない様をお願いいたしますわ。間違ってもそのお手にあるもの魔王様に向けられたのなら私は困ってしまって何をするか判りませんもの」

「君たちが君たちの王の為に命を懸けるように、僕たちも僕たちの王の為に命を懸けること、忘れないように頼むよ」

青白い顔で頷いた彼らの指が武器から離れるのを見て、私は扉に向き直った。

## 一日目【3】

『これこれ。そんなに脅すものじゃないよ、お前たち』

響き渡る声に、目を眇める。すかさず隣を見上げれば、梅香は眉を下げて苦笑しながらひよいと肩を竦めた。

どうやら予定外の事態に眉間に皺を刻む。

お戯れが大好きなあの方は、待ちきれなくなってしまったらしい。子供のような部分を持ち合わせているのを理解しているので今更驚くことはなかったが、けれど十分に頭が痛い事態だ。

私と梅香が何かするよりも先に扉が開き、赤い絨毯が敷かれた先にいる方はゆつたりとした王座に腰掛け行儀悪くも肘掛けに腕をついていた。

指先を動かす仕草にふわりと身体が浮く。圧倒的な力だがそれが私の身体を傷つけるはずがないと知っているので身は委ねた。

ふわりとした力に包まれ視線が高くなる。眇めた蒼色の瞳と一瞬だけ視線が絡み、それと知られぬように目を逸らした。

面白そうに唇を持ち上げる幼馴染はどうやら状況を見守る事を選んだらしい。お気に入り白魔術師の隣を陣取ると、ひらひらと掌を振ってよこした。

平行移動する視界をそれとなく眺めると、僅かな後に自分を包んでいた力が緩むのを感じ自身の力を展開しようとする。だが、さらに大きな力に握りつぶされ僅かにバランスを崩した。

「白檀様！」

小声でその力の主を窺めるも、何を思いついたのか楽しそうに瞳だけで笑う彼は私を膝の上へと抱き込む。慌てて控えている菊花に視

線をやれば肩を竦めお手上げとジェスチャーで伝えてきた。

本当に役に立たない男だと唇をかみ締め睨み付けるが、何処吹く風と相手は涼しい顔のままだ。

どうにかして状況を立て直そうと身を振るも、それほど力が籠められていなそうに見える彼の腕を払いのけるなど無理な所業だった。仕方なしに彼の膝に抱かれたまま顔を上げれば、最早こちらを見ていない視線は一直線に勇者一行に向いていた。

「白檀様」

「ああ、何だ、養い子？」

「機嫌が良さそうですね」

「そうだな。そうかもしれない。」

者は本当に俺を退屈させぬな」

なあ、俺の養い子。あの勇

黒い瞳を眇めて喉を震わせる白檀様は、勇者の異変に早くも気づいたらしい。愉快そうに唇に手を当て、くつくつと声を漏らす。

その姿に、不敬だと知りつつも私は眉根を寄せて反感の意を露にした。

昔から白檀様は何かと言うと勇者の肩を持つが、私はそれが気に入らない。

厭きないから気に入っている。

その言葉を彼に貰える存在など、一握りも居ないと誰より知っていたから。

不機嫌になった私に気づいたのか、宥めるように大きな掌が髪を弄る。優しく触れる様はまるで慈しむようだと思ってしまうくらいで、俯き唇をかみ締めた。

だがそんな反応など一瞬で、この身体になっている間は普段よりも大きく感じる掌をやりわりと両手でどかす。

愛しさを恋しさが超える前に、この感情を整理する必要があった。

「白檀様。勇者一行を御前へとお連れしますが、宜しいですか？」

「ああ、構わぬ」

「伽羅はそのままで？」

「ああ。 反応を確かめたい故な」

まるで私の想いを見透かすようなタイミングで割り込んだ菊花は、何食わぬ顔で白檀様へと語りかける。

感情の色のない言葉。白檀様よりも年上の彼らしい制御の行き届いた声を多少羨ましく思うが、今はそれどころではないと気分を切り替えた。

白檀様の指示に従い力を使った菊花は、指を動かし入り口から動かないレイノルド達を先ほどの私と同じように浮かすとそのまま移動させた。

ただ一人術の制御下に入らなかった梅香は肩を竦めると、瞬間移動で菊花と反対側の白檀様の隣へと並ぶ。

「あんたが魔王か」

口を開いたのは叩頭すらせず真っ直ぐに突っ立ったままの勇者一行の真中に居た、勇者様本人。

飾らぬ口調と言えは聞こえは言いが、無礼にも程がある態度に私の髪がふわりと浮く。

危うく力の発現を催そうとした私を、押さえ込んだのはやはり白檀様だった。

「そうだ」

「俺の名は」

「知っている。レイノルド・ラッチェだろう？否、今生ではレイノ

ルド・F・ラツチエだったか」

「何故知っている？」

「何故？それを俺に問うのか？クククツ、愉快だなレイノルド。お前は本当に俺を厭きさせぬ」

蒼色の瞳を剣呑に細めた『彼』は、やはり何故か判らぬらしい。

魔王と呼ばれる白檀様が笑う理由も、彼が何故『彼』の名を知っているかも。それが判らぬからこそ更に白檀様が笑いを堪えれぬというのも。

短く刈り上げた海を映した蒼い髪。硬質そうな髪型は私も初めて見るが中々に似合っている。

苛立ちを湛えた空と同じ蒼い瞳。虹彩の色も、中の少し濃い瞳孔も覚えているのと同じ色。覚えているより面立ちは幼いが、それでも十分に記憶と重なる。手に出来た剣だこ、身に纏う褪せぬ銀の鎧。だが私が知っている『勇者』は『彼』とは違い、もっと。

「伽羅」

「ッ、はい、魔王様」

物思いにふけっている途中で呼ばれ慌てて身を正す。

先ほどとは違い距離はないので彼の名は呼ばない。白檀様が名乗らなかつたのはそういう意味だろうから。

姿勢を正した私の頭を撫でると、勇者の顔から視線を逸らし私の耳へと唇を寄せた。

耳に当たる吐息がくすぐったく気恥ずかしい。この程度の接触は慣れているはずなのに、彼に対してだけいっこうに慣れなかつた。

「勇者をもてなすがよい。お前の本来の姿をもって」

「！？」

「魔王様！」

諫めるような響きで声を上げたのは菊花で、気を重くしたのは梅香。私はと言えば驚きで目を見開き硬直したまま、こちらを真っ直ぐに射抜く蒼い瞳を呆然と見た。

だから勇者は嫌いなのだ。

お願いではなく、ましてや懇願でもない命令を耳にした私は、屈辱で唇を噛みただ一人を睨み付けた。

## 一日目【4】

唇を噛み締め黙り込んだ私の頭を撫でると、白檀様は私の脇の下に手を入れひよいと抱える。そしてそのまま自らの隣に置き、静かに立ち上がった。

その一挙一動に勇者一行は釘付けになり、青ざめた顔色ながらも視線を外せないで居る。きつと白檀様の壮絶な美貌と覇気に押されているのだらう。弱き人間にありがちだが、すぐにも意識を失わないところを見ると、なるほど、やはり勇者の仲間選ばれただけはあるらしい。

ただ一人真っ直ぐに白檀様を見上げるレイノルドの蒼い瞳は揺ららず真っ直ぐに彼を見据えていた。

その瞳の強さが気に入らず、思い切り睨みつける。

よりにもよって白檀様を睨むなど、何という厚かましさが。本来ならすぐにでも首を飛ばしてやりたいが、残念にも白檀様本人が『彼』の存在を気に入っているため果たせない。それが苛立たしく腹立たしい。

殺気向け気がついたのか、蒼い瞳がこちらを向く。先ほどまでの鋭さが嘘のように消えたその瞳は、過去を思い出させ更に私を苛立たせた。

そんな私の感情に気づいているに違いないのに、喉の奥を震わせた白檀様は私の髪を梳くとそのままぽんと背中を押した。

たたらを踏み前に倒れこみそうになる私を、横から菊花の手が掬い取る。そのまま何故か片腕で抱き上げられ、涼しい顔をしている男を思い切り睨みあげたがあっさりと流された。

「俺の可愛い養い子」

「・・・はい」

「お前は必ず本来の姿で『彼』をもてなさなければならぬ」

「はい」

「だがそのタイミングはお前に任せよう。ああ、そうだ。いつだったかの時のように奴隷志望の人間は作るな。魂に刻まれた想いを消すのは手間だし、追い払うのも厄介だ。お前も、面倒は望んでないだろう？」

「はい」

白檀様の言葉に深く頷く。

何代か前の勇者の時代、芸術が好きだという魔法使いをうっかりと墮としてしまった経験がある。面倒にも約束の一週間が終わった後も彼は城の周りをうろつき、結界を張ったまま自分の世界に帰り安堵したのも束の間。次の時代の勇者に会うため時を経てこの世界に戻れば、何故か自分の絵姿を聖女としてそこかしこに残されていた。無駄に絵画の才能があつたらしい彼は、私を天使の如く美化し何故か旅した場所のそこかしこのその絵を飾り、今でもそれは教会や王族の城に飾られているらしい。

次代の勇者に話を聞いた際には背筋を怖気が走ったものだ。

魔王の部下である私を指し聖女とのうとのたまった挙句、それを歴史に刻み残すなどどうかしている。挙句その絵を残した本人は人を勝手に聖女に祀り上げ永遠の愛を述べたくせに、堂々と妻帯し子供も何人も作ったと言うのだから最悪だ。悪魔である私は誰かを墮とすために自分を使う。それ故別に他の女に手を出したからどうというのではないが、結婚するならその女に永遠の愛を誓えと全力で言いたい。やはり人間の価値感理解できない。

面白がった白檀様はその時代の勇者に私の肖像画を持ってこさせたが、慌てて焼却したのでそれを見られてはいないはずだ。私は白檀様には絶対に本来の姿を見られたくないのです、その時代の勇者に酷く怒りをぶつけた記憶がある。

確かに、あんな目に合うのはもう御免だし、今は人間の使い魔も必要としていない。白檀様の言葉に頷くと、彼は一つ頷きもう一度勇



者一向に向き直った。

「しきたり通りにこの屋敷に住むのは一週間。その間に人の世界で起きた内容を語ってくれ。魔王である俺との話し合いが勇者の役割。レイノルド・F・ラッチェ。お前が本来の役目と目的を違わずに居てくれるのを願うでしょう。では、また明日。ああ、部屋の案内は梅香お前が致せ」

「は、魔王様」

梅香が礼を取るのに合わせ、私と菊花も頭を下げる。本来ならきちんとした礼をとりたいのに、菊花が手を放さないためそれも叶わなかった。瘦身であるくせに彼はとても力が強い。現在もぎりぎり腕に爪を立てているが、全く気にした様子も見せない。この涼しい顔を引つかいたらスツとするだろうが、勇者一行の目があるのでそれも出来ない。

頭を下げている間に白檀様の気配も消える。顔を上げれば重圧から開放されたように惚ける人間達が居て、その姿を冷めた目で眺めた。そんな私の静かな苛立ちに気づいたらしい梅香が、苦笑すると手を叩き勇者一行の視線を集める。呪縛から開放されたように視線を集中させた彼らにウィンクすると、あくまでペースを崩さず口を開いた。

「さて。では僕が君達を寢所へと案内しよう。全員で眠れる部屋と一人部屋、どちらがいい？」

「もちろん、全員で眠れる部屋をお願いいたします、バイカ様」

「おや？君は女の子なのに男と同じ部屋でいいのかい？シエリル」

「ええ」

「ふふふ、どうやら警戒されてしまったようだね。もちろん、僕は君の願いを叶えるでしょう。他に異論がある者は？」

「俺は、一人部屋にしてみたい」

「レイノルド!?」

「何言つてんだよ、お前が居なきやいざという時俺らじゃどうしようもないだろ!?」

「そうだよ！僕達じゃ何かあったときシェリルを守りきれない！」

「先ほどの魔王の言葉を聞いてなかったのか？話し合いが勇者の役割だと魔王は言った。ならば迂闊に手を出すわけがないだろう。違うか、伽羅」

呼ばれた名にひっそりと眉を寄せる。他の面々と違い完璧に発音された私の名前に、彼は欠片も違和感を抱いていないらしい。ひっそりと眉根を寄せる私をじっと見詰める彼の表情は動かず、応えるまですずっとこのまま見詰めあわなければいけないさそうなのでため息を一つ落とし仕方なしに折れる事にした。

「ええ。魔王様はあなた方に手を出す気はございません。あなた方が手を出されるなら反撃はしようが、何もされぬのに何かする理由はありませんから」

そう。蟻がうろついていようと大して気に留めないのと同じだ。噛み付かれたら振り払い潰すが、そうでなければ放っておく。私達にとって人間の力などその程度のものでしかなく、彼らが自覚する以上に遙かに差があった。

不安に顔を曇らすリシエルに向かい微笑む。作り物の笑顔であつても、それだけで彼女の気負いが和らぐのを見て益々笑みを深くした。

「心配であれば扉の前に護衛をお付けしますわ。私の直属の部下に致します。それでも、心配ですか？私を信じてはいただけませんか？」

「・・・いいえ。私、キャラちゃんを信じるわ」

梅香は様で何故私はちゃんづけなのかと問いたしたが、奥歯を噛んでぐつと堪える。

そのままこちらを見ているレイノルドへ視線を移すと、小首を傾げ聞いてみた。

「勇者様はお一人の部屋で宜しいの？部下はご入用でしょうか？」

「いや、必要ない」

「そう。では梅香、案内をお願い」

「了解」

私に向け小さく微笑んだ梅香が指を鳴らすと、勇者達の姿は消えた。気配がしつかりと消えるのを待ち、自分を抱き上げたままの菊花を殺気を籠めて睨み上げた。

「いつまで抱いているつもり」

「あなたが落ち着くまでです」

「・・・菊花の分際で図々しい」

「ですがあなたは放せと言わなかった」

「言えなかったのは見て判っているでしょう？私を放しなさい、菊花」

「・・・はい」

暫くの無言の後頷いた菊花の腕から降りる。だがその手が未練がましく私の服を掴んだままなのに気づき、苛立ちで髪をかき上げた。

「まだ、何か用があるの？」

「食事がまだです」

「食事？お腹が空いたの？」

「はい」

こくり、と冷たくも見える美貌で頷いた菊花を見上げる。淡々とした口調と声音はとても腹を空かせている様に見えなかったが、強請るように服を引く仕草に肩を竦めると頷いた。

「私の部屋でいいですか？」

「構わないわ」

返事をするのが早かったか。それとも彼の力の発動の方が早かったか。

どちらか知れぬが、どちらでもいいと瞼を瞑った。

残り6日。勇者との日々はいつもどおり長く感じそいで、私は眉間の皺を深めた。

## 閑話【菊花】（前書き）

R15になります。伽羅が白檀以外と絡むのが駄目な方は、どうぞ  
回れ右でお願いいたします。

## 閑話【菊花】

しゅるり、と小さな音を立てて髪を結んでいたリボンを解く。極上のレースを利用し作られたそれは菊花が自分で選んだものだが、生憎伽羅が気に入ることはなかった。

彼女の嗜好はあくまで白檀が中心であり、彼の名にあるのに彼女は『白』を嫌っている。それもこれも彼女が敬愛する白檀自身が白を嫌っているからで、それ故に彼女は極力白を身につけようとしなかった。

解いたリボンを投げ捨てれば、波打つ金の髪がさらりとほどけ腰元まで流れる。小悪魔の姿であるのと、白いドレスを纏うことから生娘のようにあどけなく無垢に見える様子に、喉の奥で小さく笑えば掛けていた眼鏡を飛ばされた。柳眉を顰める伽羅に笑いかけ気にせず顔を近づける。菊花の場合眼鏡は別に視力強制に必要なものでもないで、そのまま白くまろい頬に口付け小さな体を抱き上げた。華奢な体は比喻表現でなく空気より軽い気がする。抱きしめれば彼女特有の熟れた果実のような甘い香が漂い頭がくらくらした。

こみ上げる愛しさを押さえる術を知らぬまま、菊花のベッドへとその体を下ろす。白いシーツに埋もれるように置かれた伽羅は、碧の瞳の色を濃くし菊花を見詰める。

カーテンが締められていない窓から、人間界でも美しいと感じる月の光が差し込み、きらきらと金色の髪を輝かせた。黄金の海のように美しいそれは、指に掬ってもさらさらと音を立てて流れ落ちる。

気紛れで留めて置けない様が彼女の本質を現しているようで、伽羅の前でしか見せない笑顔でくすりと笑った。

菊花が目の中の悪魔にあったのは、もう軽く700年以上は前になるだろう。その時から彼女の美貌は秀でていたが、時を経て益々磨きが掛かってきた。

天界でも見る事が出来なかった見事な金色の髪に、宝石より美しい碧の瞳。肌はぬけるような雪白で、華奢な体は抱きしめたら折れてしまうのではないかと思えるくらいだったのに、それでも抱きたいと願う気持ちが抑えきれない強烈な欲望を抱いた。その感情の強さに、自分でも驚いたほどだ。

一般に天使は博愛主義といわれている。それは実際に本当で、天使族は漏れなく誰にでも平等の愛を注ぐ。誰にでも等しく公平に。それが天使の特徴でもある。

しかしながら、その天使の博愛の意味を正しく理解する存在は、同じ天使以外にはいないだろう。

天使の博愛は二種類ある。文字通り全てを愛する博愛と、誰にも関心がない故に平等性を保つ博愛。

菊花の場合は当然後者であり、その中でも変り種と呼ばれる存在だった。

天使は常に微笑みを浮かべ愛を説く。それなのに菊花は笑顔を浮かべるのが極端に苦手で、むしろ楽しくもないのに笑っている同僚を見て虫唾が走ったものだ。悪魔と違い淡い色を纏う天使。白を好むのも相俟って人には敬愛されたが、その実質は菊花の好むものではない。関心がない故に平等でいられた菊花は、微温湯のような生活を受け止めていた。

「  
伽羅」

蕩けそうな声が自分から出ているなど、700年以上経った今でも信じられない。人の身であれば自分は少女趣味に分類されるのかもしれないと今日来た勇者を思い出し、また小さく笑った。

腕の中の存在が愛しい。この存在だけが愛しく、好ましいために菊花は墮天した。

博愛を謳う天使は特別を作ってはならない。王である神はあくまで平等を説き、それを守るのが天使の主文だ。それを守れなければ、

卑しいとされる魔に身を墮とさなければならぬ。そしてそれは天使がもつとも恐れることでもあった。

細い首筋に口付け、ちゅつと吸えば赤い華が咲く。自分を刻み付ける行為は楽しく心が踊る。色が白い伽羅には簡単に痕が残る、それがまた歯止めの利かない行為を助長させた。

ふつと漏れる息が耳に掛かり、ぞくりと背筋を駆け上るのが快感だと理解したのはいつだったか。噛んでも殺しても漏れる愛しさに、胸が苦しく呼吸が困難になる。

魂を握られている感覚。息すら難しいほど荒れる感情は彼女が原因であるのに、菊花を留めるのもまた彼女の存在だった。

愛しくて恋しくて仕方ない。

唇で鎖骨を辿り、ドレスから見える胸元ぎりぎりに唇を落とす。吸い付けばやはりあつさりとするしが残る、とても気分が昂揚した。もつと、もつとと望む声に逆らう気は起こらず、舌で辿ると薫りどおり甘い体を満足するまで舐め回す。どんどんと薫りが濃くなり、菊花の理性を徐々に奪った。

「愛してます、伽羅」

博愛主義の天使は一人に愛を告げることも出来ない。

菊花は伽羅に恋したがために墮天した。

彼女に唯一の愛を捧げたいがために墮天し、そして彼女のものとなった。

「あなただけを愛しています」

天使は悪魔を忌避する。しかしながら唯一の愛を捧げるためにはとても都合がいい。

墮天した天使は悪魔と同じ。だからこそ、伽羅も菊花の言葉を信じ



る。

悪魔は唯一の愛を囁く。見せ掛けだけでない想いを一途に捧げる。

それを愚かだと思っていた菊花はもう存在しない。

ばさり、と意識して羽を出せば、在りし日には白かったそれは漆黒に近い色になっていた。

三対六枚の羽を見て、伽羅は満足そうに瞳を細めて笑う。

この色に羽を染めたのは伽羅で、ここから先菊花が生き続ける限りこの色が白に戻ることはないのだろう。

悪魔から天使へと変わるものも稀に存在するが、菊花にはそれは望めない。

「あなたが恋しい」

甘ったるい気は伽羅のもの。それを吸い込むたびに菊花はどんどんと堕ちていく。

塗り替えられる体の構造。否、体だけでなく魂から作り変えられる。目の前の存在が失くしては生きていけないように。

それは何とも喜びに満ちた変化で、どんどん深まる愛情に眩暈がしそうだ。

愛しくて恋しくて仕方ない。

彼女が願うから菊花は白檀の側近へと納まった。そしてこれからも彼女が願えば何だってしてやるのだろう。

「伽羅」

桃色の唇に唇を合わせれば、菊花にとって極上の気が奔流となり流れ込む。

彼女の唇を舌で開け、辿り、貪れば貪るほどその甘く美味しい伽羅の気が体を支配するのが判った。

甘美な束縛に抗う術はなく、もっと自分を墮として欲しいと望む。生きるために摂取しなくてはいけない伽羅の生气。これが絶えれば菊花はただ死に絶えるしかなく、それを望まれたら喜んでそうするだろう自分を知っていた。

月明かりに照らされた部屋の中、ただ一人に愛を囁くために墮天した愚かな男は、満足いくまでその原因を貪った。

静かな夜、世界よりも大事な伽羅は、確かに菊花の腕の中に存在していた。

## 二日目【1】

目が覚めてまず感じたのは、重い一言だ。

腰に回った腕は、子供の姿になっっている私の足よりも太く、緩く抱いてるように見えながらも絶対的に抜けない拘束。自身の足を使い挟むようにして私を抱きしめる相手は、色々な意味で重い。

取り敢えずは物理的な重さを除去しようと自身の魔力を使い拘束する腕を無理やり？ぎ放せば、その力で目を覚ましたらしい菊花が、眼鏡をしてるときにはついぞ見せない甘ったるい表情で私の姿を瞳に映した。

とろとろに蕩けるのではないかと思える柔らかな顔は、私個人においては割りと良く見かけるものだが、城の他の面々が眺めたなら腰を抜かすかもしれない。むしろ贗物と勘違いし、武器を向けられるかもしれない。むしろ向けられる、と目が覚めた瞬間から冴える思考を働かせつつ、上半身を起こした。

「・・・おはようございます、伽羅」

「おはよう、菊花」

魔族にはない銀色の瞳の瞳孔が大きくなり、身を起こした彼はゆっくりと唇を近づけた。

それを避けるでもなく受け、力を渡す。暫く口内を我が物顔で蹂躪した舌は、満足したのか唾液の橋を作りながらゆっくりと離れていった。途切れたそれが口の端を汚すのを見て、嬉しげにまた近寄ると唇から顎を舐め取る。

「いい加減になさい、菊花。もう、朝よ」

「駄目、ですか？」

「駄目。私は、白檀様を起こしに行くわ。離れなさい」

「・・・御意に」

強めに放たれた言葉に、渋々と菊花が身を放す。自分とは違つ温もりが完全に自分を解放するのを感じ、開放感に背筋を伸ばした。

カーテンが引かれていたわけでもないのに、この部屋は薄暗い。否、この城の全ての部屋に日の光は届かない。現在白檀様が存在するこの空間は太陽を拒絶して作られている。故に、この部屋に光が射すなら夜に輝く月明かりだけだ。

裸のままベッドから降りると、自分の体を一瞥したため息を吐きたくなつた。

体中に散らばる赤い華。その数はどう控えめに断じても粘着質であり、つけていない場所を探す方が苦勞する。

胸、鎖骨、腹、腕、腿にはもちろん。手の甲足の甲まであるのは、些かいきすぎではないだろうか。しかし文句を言つても彼がこれを止めた事はないので、押し問答になるのも面倒で現在は黙認している。

どうせ、簡単に消せるものだった。

指先をふり力を使えば、みるみる間に体から痕が消える。鋭い視線が体に刺さり、菊花が私を見つめているのも気づいているが、全て無視。私の体に他人の痕を残す予定はなく、それはこれからも変わらない。

私の体に痕を残しているのは白檀様のみで、他の誰かにそれを許すつもりはないのだから。

もう一度指をふると自分の魔力で衣服を作り出す。黒い布が幾重にも広がるドレスがあつという間に出来上がり、頭には白檀様から頂いたりボンを結わえ準備は完了した。

人のように布で出来た衣服を纏うのも悪くないが、急ぎの場合は自分で作る方が手っ取り早く理想のものが出来る。襟ぐりには繊細な

レースがあしらわれたそれは、以前白檀様に買って頂いたドレスを模倣したものだった。

人間と違い風呂に入る必要もないが、暫し考えると伝心で香へと風呂の準備を頼んでおく。魔法で体を清潔に保てるが、ゆったりとした湯船に浸かるのもいい。人間達の趣向の中で数少ない感心した一品だった。

それに風呂は気分の切り替えに丁度いい。この後しなくてはならない義務を考えると、少しは気を落ち着ける必要があった。

「伽羅」

「何？」

「いいえ、何でもありません」

中途半端な部分で言葉を区切った相手を、首だけで振り返る。

しかしながらすでに衣服を纏い、眼鏡を身につけた菊花からは何か感情を読み取ることとは出来なかった。

ひょいと肩を竦めると、移動しようと力を使う。普段は歩くのだが、起床の時間が迫っていた。

「それじゃあ、また後で」

「はい。また、後で」

簡潔に別れの挨拶を済ますと、意識を彼へと飛ばした。

## 二日目【2】（前書き）

R15です。残酷表現がありますのでお気をつけ下さい。

## 二日目【2】

この城の中でも一際大きく立派な造りの扉を前に、軽く深呼吸する。宝樹と呼ばれる樹を切りぬいたドアは繊細な細工と掘り込みがしてあり、磨きぬかれているため触りごこちも滑らかだ。

小悪魔の状態でなくとも見上げる高さのそれは、今の状態だと私ではドアノブが顔の前にある。じつとそれを見てから心を決め、ノックを四回する。心を落ちつけるために瞼を閉じ、一拍おいて正面を見た。

「おはようございます、白檀様。伽羅です。失礼します」

私はこの城で 否、幾つも存在する世界の中で、唯一かの人の返事を待たずとも室内に入る許可を経ている。それは彼の腹心である菊花や、同じく側近を勤める梅香、そして彼の身内である誰もかもを含め得られていない特権で、私はそれをいつでも行使できる立場にあった。

本当は名乗りすらいらないと言われているのだが、それでも一応名乗るのは自分が覚悟を決めるためだ。

白檀様の部屋に、足を踏み入れる覚悟を。

暫く待っても返事がないのでいつも通りドアノブに手をかけると、自力で回すには重たいそれに魔力を注ぎ軽く捻る。そうすると僅かな軋みもなく、ドアは内側に開いた。

白檀様の部屋は、普段から混じり気ない闇に包まれている。元々この時期この世界のこの場所に彼が光りが注がないよう操作しているのも理由の一つであったが、さらに幾重にも遮光カーテンが引かれ新月の夜より暗い部屋が出来ている。

私は悪魔なので闇の中でも視力は衰えないが、人であれば指の先すら見えない闇に恐怖を抱くに違いない。

事実以前乗り込んできた人間を、白檀様の部屋と似た造りの牢獄に居れたところ、三日と持たず発狂した。闇は己の中の恐怖心を引きずり出し、想像力を膨らませる。思いこみで人は死ねると白檀様は仰ったが、実際にその通りだった。

悪魔は基本的に光りより闇を好むが、白檀様の好悪は徹底している。そして彼はこんな闇の中でないと眠れないと、私は知っていた。

寝室専用になっているこの部屋は、寝酒を楽しむためと称し皮張りのソファが用意してある。寝転びながら酒を嗜むのは行儀が悪いと幾度注意しても利き入れてもらえず、そのソファはもう何百年も代替わりしながら低位置にあった。

窓は大きいものが三つ。朝の間は全て遮光カーテンで覆われているそれは、大体成形形の私と同じくらいの大きさがある。他は毛足の長い肌触りのいい絨毯。天蓋付きのベッド以外に置いてある家具はそれくらいで、物欲のない主の性格を明確にあらわした部屋になっていた。

室内に一步足を踏み入れると同時に足を覆っていたブーツを消す。毛足の長い絨毯を味わうためと、白檀様はこの部屋で履物を履くのは私に禁止していた。

小さい歩幅で五十歩ほど歩いた場所に目的のベッドはあり、その上の皇かなシートの上で目的の人が眠っているのが見え、自然と顔が綻ぶ。入り口から数歩の場所で羽を出し広げると、羽ばたき目的の場所まで飛んだ。

音を立てないよう極力気を使い黒いシートの上にふわりと膝から降りる。ちょうど白檀様の顔の横だが、大柄な彼が五人眠ってもまだ余裕がある広さのそこは、私一人乗ったところで狭さは感じない。



低反発の魔力因子を集めて造られた極上のベッドはきしむ音すらなく私を受け止める。闇の中でも見間違えない美しい彼に手を伸ばすと、額の髪を掻き上げキスを落した。

「おはようございます、白檀様。朝ですよ」

「・・・・・・」

「起きてください」

もう一度、ちゅっとリップ音を響かせながらキスをする。朝の挨拶と教えられたこの仕草は、私が白檀様に拾われてから毎日欠かさず続けられる日常だ。何があってもどんな場合でも、何処に居ても変わらない所作は、それでも衰えぬ胸のときめきを呼び起こす。

ゆったりと眠りから覚めるように梳いている髪に触れる手すら熱く、胸が高鳴り頬が熱くなる。幾度繰り返しても緊張するが、この瞬間ほど愛しいものはない。

眉を寄せ寝返りを打とうとする白檀様の顔を両手で包むと、今度は頬に唇を落す。幾度か繰り返すと漸く意識が浮上し始め、今だ半分まどろむ黒の瞳が漸く私を映し出した。

「・・・・伽羅？」

「はい。おはようございます、白檀様」

寝起きで掠れた声で名を呼ばれ、頷きふわりと微笑む。偽りでなく心から浮かぶ笑みは、彼の前でだけ無防備に曝け出せた。

そんな私を目を瞬き暫く眺めていた白檀様も、不意に目元を和ませる。そのまま腕を伸ばすと、私の身体を包み腕の中に閉じ込めて髪に鼻を埋めた。

人形を抱く子供の仕草と、それは似ているかもしれない。

きゅっと繊細なガラス細工を扱うように加減された腕に包まれ、う

つとりと目を細め幸せに浸る。養父であるこの人との他愛無い触れ合いは、優しい感情を私に与える。彼だけが私をこんな気持ちにしてくれ、彼だけを心から信用し、信頼していた。否、違う。信用や信頼などではなく、最早心を全て預けていると言った方が適切だろう。白檀様のためになるなら、私は何でも出来る。彼が望むなら、何でも出来た。

それが例え、自分の心に沿わないことだったとしても。

伸ばされた腕が頬を撫でる。ぬるり、とした感触と鼻につく匂いは、初めからこの部屋に充滿しているものと同じで、塗りつけるように撫でまわす手を止めた。

闇になれた目にしつかりと映るこの光景。ほぼ毎日なので無視していたが、相変わらず彼は慣れない。その繊細さが愚かしくも愛しい。

部屋のそこかしこに転がる元は同族だったろうものの遺体。女性の凹凸が伺える切り離された胴体でしか性別は判断できない。顔だったものは潰され、腕や耳も転がっている。右足は入り口付近にあったのに、左足はベッドの脇に落ちていた。無造作にちぎり捨てられたそれは美しくなく、ひっそりと眉を顰める。

「また、ですか？」

「ああ、まただ。兄上の悪趣味な贈り物は要らないのにな」

抱きしめる、というより縋りつくように腕を回され呼吸が苦しくなる。血塗れの彼に抱かれ、私にもとうに血臭は移っている。

彼が黒を好むのは、この血の色が目立たないからだ。乾いても黒は他の色ほど血を反射せず、そして闇の部屋に籠るのも同じ理由。しかし彼のこの脆さを知るのは私だけで、それが密かな優越感を抱かせる。

他の誰を抱こうとも、弱さを曝け出すのは私にだけ。それは彼に拾

われた私の特権で、体をつなげるより遙かに重要な絆だった。

「伽羅。俺の、伽羅」

「はい、白檀様」

「血塗れの俺は醜いか？」

悪魔の癖に、酷く繊細な質問をする白檀様を可哀想だと思う。けれど同時に彼が悪魔にしては愚かにも繊細であってくれてよかったとおもってしまう。

だからこそ、彼は私を拾い育ててくれた。私を彼のものにしてくれた。それがどれ程の幸福かなんて、他の誰にも判らない。

もっと、依存してくれればいいのに、と思う。けれどそれは駄目だと、頭のどこかで私が呟く。

だからこれ以上は、と理性が自分を引き止める内に、顔を上げて微笑みかけた。

「血など洗えば流れます。

私も血塗れになってしまいました。

共にお風呂に入りましょう」

「・・・そうか。そう、だな」

こんなに小さい悪魔相手に、安堵のため息を殺す白檀様の泣きそうに歪んだ顔に掌を当て、もう一度頬にキスをした。

不安定なときにしか呼ばれぬ名が、彼に安定をもたらしてくれれば良いと、切ないまでに神でも本来あるべき自分たちの王でもなく、彼自身へと願った。

## 二日目【3】

幸せと不幸の天秤はいつだって公平であるとのたまったのはこの賢人であろうか。

少なくとも現在の私はそれを身を持って理解する立場にあり、恐ろしく面倒で嫌だと訴える心を宥めつつせかせかと足を動かした。

力を使えば一瞬で終わる移動も、基本的には使わない。急いでるわけでもなし、歩いていれば面倒な相手その一と顔を合わせ、じりと眉間に皺を寄せた。

しかし私の顔色を読むのを得意としているくせに、空気は一切読む気がない幼馴染は細い目をさらに細めて笑顔で近寄ってくる。小悪魔状態の私の1.5倍近くある長身の彼は、あっという間に距離を詰めると挨拶の前に私を片腕で抱き上げた。

丁度彼の腕に腰掛ける状態で持ち上げられれば、自然と視線は絡み合う。殺気を箆めて鋭く睨みつけているのに、飄々と躲すのはさすがと誉めるべきなのだろうか。

渋い顔をしているだろう私の頬を、何が楽しいのか知らないが崩れた表情で指先でつつく。思い切り噛み付きたい衝動に駆られたが、どうせ喜ぶだけなので止めておく。代わりに心底嫌々ながら口を開いた。

「何か用なの？」

「はははっ、朝からつれないな伽羅。まずは挨拶からじゃないのかい？」

「挨拶云々をあなたが言えるの？いきなり抱きかかえて頬を突付きだすような礼儀知らずに、礼儀を守る謂れはないわ」

「手厳しいな。じゃあ、僕から挨拶したら返してくれるね？おはよう伽羅。今日も飛び切りの美人さんだね」

「下らない修飾語は必要ないわ。私相手に美辞麗句は不要よ。」

おはよう、梅香。今日も朝から鬱陶しいわね」

「君への愛が溢れて止まらないだけだ」

「怖気が走るからやめて頂戴」

冗談抜きで一氣に鳥肌が立ち、寒気に体をすり合わせる。

そんな私を情けなく眉を下げて苦笑しながら眺める梅香は、つれないなと言呟いてから移動を開始した。どこへ向かうかなど問う必要もない。彼が来たなら行き先は一つだと始めから判っているからだ。

白檀様との心温まる触れ合いの後、自室に戻った私を迎えたのは相変わらず白いドレスだ。蝶をかたちどった繊細なレースが幾重にも巻かれたドレスは、腰元を大きなリボンで結ぶ子供向けのものだった。

明らかに私の趣味ではないそれを用意したのは菊花に違いない。この城で私に白い服を着せるなんて悪趣味な行動は彼以外は取らないのですぐに判ったが、この恥ずかしさ溢れる子供向けドレスを一体どんな顔をして選んだか見てみたい。

一瞬そう考えたが、慌てて否定した。普段どおりの顔で選んでいれば詰まらないと思いつつも納得できる。しかしそうでなかったら、色々な意味で怖すぎた。

レースの感触が気に入ったのか、スカートの裾についているそれを指先で弄る梅香を好きにさせていたら、悪戯な指先が裾から潜り込んで来た。腿を直に這う掌を思い切りドレス越しに抓り、涙目になった幼馴染を見上げる。

「勇者様一行は？」

「もう食堂へ案内したよ。君が指定したとおり、広すぎる場所ではなく人数が丁度入る部屋だ。彼らについているのは君が選んだ人間の部下。コックも指示通りに彼らの希望を取り入れた朝食を作っている。」

君は、『勇者は嫌いだ』と言いつつどうしてそこま

で甘いのかな」

「甘い？どこが？最低限のもてなしかせずに、狭い部屋に押し込めた私のどこが甘いと言うの？私の眷属を彼らの下につけると言うの？人の相手は人で十分。違つかしら？」

「そう、人の相手は人で十分だ。態々君が気紛れで拾った死に掛けの人間を彼らの世話役として与え、彼らが警戒しないように食事を選ぶ自由を与えた。それを甘さと言わずして何と言っんだい？」

「全ては白檀様のご意思よ。白檀様は私に彼らの面倒をみるように勅命を受けているの。あなたも見ていたでしょう？」

「ああ」

「なれば私はそれを完璧に遂行する義務がある。白檀様のお望み通りに全てを滞りなく進める義務があるのよ」

「だから君は彼らに本性をさらすつもりなのか？」

「・・・それを、白檀様がお命じになられたなら、享受するのが私の存在意義よ」

「君は、馬鹿だね」

しみじみと言われた言葉は、彼との付き合いの中でもう四桁以上は聞いただろう。それだけの永き間を共に過ごした幼馴染は、普段の彼らしくない、どこか泣きそうな眼差しを私に向けていた。

その視線の意味を知らないとは言わない。その視線がいつも私を見ていて、どんな想いを持っているか知らないなどと私は言えない。

彼の想いは私にとって価値があるもので、それを梅香自身が明確に理解している間は、私達は共にあり続けるのだろう。

「馬鹿で結構よ。そんなの、昔から知っているわ」

「追加するよ。ただの馬鹿じゃなくて、酷く残酷で賢い馬鹿だ」

矛盾する言葉を吐き出した梅香に視線を向ける。

いつも通りに一直線にこちらを見詰める眼差しに、その籠められた熱さに私は晒った。

「随分と矛盾してるのね」

「男心は複雑なんだ」

絡めた視線は一瞬。そして次の瞬間には、燃え盛る焰のように熱く宿っていた何かを瞳から消し去った梅香は、にこり、と心の内を読ませぬ笑顔を浮かべた。

口端を僅かに持ち上げることですれに应えようと、私達は試練の場へと向かった。

## 二日目【4】

室内に足を踏み入れた瞬間、三対六つプラスの視線が私を射た。その視線は昨日と違い剣呑な意味合いを含んでいるものが多く、何かが彼らをそうさせたのだろうと考えながらも視線を無視して梅香は進む。そして当然私も視線の意味など興味の欠片もないので無視をした。

私の興味を引いたのはそんな剣呑に向けられた視線の意味ではなく、別にある。

ちらりと瞳だけで室内を見渡すが目的とする相手はその場におらず、梅香に視線を向けても肩を竦めるだけ。何か隠しているのかと思っただ、それにしても反応が薄い。

通常私に対し何か隠し事をしているなら、もっと面倒な感じにテンションが上がりが瞳がキラキラと輝いている。隠しておく気があるのかと問い詰めたくなるくらいにあからさまな態度をとるので、本当に知らないに違いない。

梅香からは答えを得れないと判断した私は、唯一この部屋で答えをくれそうな人物たちに視線を向けた。すると心得たように僅かな微笑みを見せた彼らは、こくりと頷く。

疑問の解消が出来る当てが出来た私は、それまで無視していた視線を正面から受けると鮮やかに微笑んだ。

「このような格好で挨拶するのをお許しくださいませ、皆様。おはようございます、昨夜はよく寝れました?」

「・・・ああ、柔らかいベッドに清潔なシーツに温かい風呂。何かあればすぐにお付きの人間が来てくれて何一つ不満はなかったぜ」  
「それは宜しゅうございました」

口を開いた垂れ目がちな男が瞳を細めてこちらに答えた。ナンパな



態度を取っていた彼の名前は、確かアイルだったか。警戒した眼差しを向けているが、答えを返したただけまだマシなのだろう。

そ知らぬフリではちばちと瞬きを繰り返し小首を傾げる。視線を向けずとも残り二人の眼光がこちらに突き刺さるのを感じ、梅香の気が揺らいだのを慌てて押さえた。

見た目と反し気が短い幼馴染は、押さえ込まれたのに気がつくとも苦笑して私を床へと下ろす。漸く地に足が着き自分の意思で歩けるようになったので、スカートの端を持ち上げ一礼すると用意された自分の席に足を進めた。

空席は二つ。

梅香と私が座っても余る席に座る予定者は、レイノルドと菊花だった。一人だけいないのならともかく二人ともいないのなら、菊花が何らかの意図を持ち彼を何処かへ連れて行ったと考えるのが自然だろう。

面倒になっていなければいいかと内心で苦く呟きながら、微笑みはキープして下げられた椅子に腰掛ける。

そして視線をアイルに向け、微笑みを浮かべながらどうしたのかと問うてみた。

すると判りやすくみるみる眉間の皺を深くした彼は、行儀悪くも私を指差して声を荒げる。否、性格には私の後ろを指差して声を荒げた。

「一つ答えろ。何であんたの後ろに近衛隊隊長のハーク様とアーク様がいらつしやるんだ！場合によっちゃ俺たちはあんたに刃を向けなきゃならねえぞ！？」

弱い獣が自身より強い獣を威嚇するときのように、声を裏返して叫んだ男に目を細める。

何を勘違いして上から目線で私にものを申しているのか。勇者さえ居なければ彼らは烏合の集だと自覚すらしていないのだろうか。

それとも私の見た目で勝てると判断しているのだろうか。ならば実力差すら気づかぬ愚か者だと、嗤うことすら億劫だ。  
見た目は笑顔をキープしたまま内心で苛立ちを抑える。

『どうする伽羅？彼ら自分の立場が判ってないようだけど』

『さあ、どうしましょう？』

『僕たちが気にするのは勇者の存在だけなのにな。ついでに言えば勇者が倒せるのだって魔王である白檀様だけで、僕たちには対抗策すらないのに。何を勘違いしているのやら』

『本当に。これだから人は愚かでいけないわ』

『その愚かな人を君が拾ってこなければ、こんな面倒もなかったんだが』

笑いを含んだ声に苛立ち強制的に伝心を断ち切る。

すると今度は飽き足らず実際に声を出して笑い出したので、優雅に微笑みながら彼らに見えない角度で思い切り睨み付けた。

その視線に苦笑した梅香がひらひらと掌を振るのを見届け意識を元に戻す。

私と梅香が放している間にも糾弾だか、質問だか判断が出来ない言葉が席を飛び交い、気がつけば参加していなかった二人すら発言を始めていた。

億劫になりながらそれを眺め、面倒になったので問題となった『人を指先で手招く。すると先ほどまでは彫像のように動かなかった彼らは従順に私の傍まで近寄ると配下の礼を取った。』

下から私の顔を仰ぐ彼らの顔は鏡で合せたようにそっくりだった。唯一の違いは口元に黒子があるかないか。

黒に限りなく近い藍色の髪に、同じ藍色の瞳。顔立ちは人間にしては整っており、切れ長の二重とオールバックにした髪形が特徴とさえば特徴になるだろう。細身でありながらしっかりと筋肉はついて

おり、試しに魔物と争わせたところ、相手は下級であつたが二人は競り勝った。

梅香に押揃された通りの拾い物の二人だったが、ここまで面倒な具合に詰問されて手元に置く筋合いはない。

「ハークとアークとは彼らの名前でございますか、アイル様？」

「・・・そうだよ。もしかして、名前も知らないのか？」

「ええ、存じ上げませんでした。何しろほとんど会話も交わしておりませんので」

「どういうことだ？」

「彼らはね、伽羅が拾ってきた人間なんだよ。一月くらい前かな？ 散歩をしに出かけた伽羅が死に損ないの二人を拾ってきたのは」

「そうね。確かそれくらい前だわ。もう一月も経つのね」

「こんな面倒になるなら見捨ててれば良かったな。態々助けた拳句に責められるなんて、面倒この上ない。君の甘さはどうしようもないものだよ、伽羅」

何度も面倒だと口にしたのはわざとに違いない。私に聞かせるためと、この場に居る人間全員に聞かせるために繰り返された言葉は、不愉快に耳を打つ。

しかし実際自分でも面倒だと感じていたので反論の言葉もない。

黙り込んだ私に何を思ったのか、厳しい表情をしたままのアイルが問いかけた。

「お二人は王女直属の近衛であり、同時に彼女の許婚候補筆頭でもあつたんだ。一月ほど前に魔物に襲われ失踪したと言われていたのだが、君が攫つたんじゃないのか？」

言葉はあくまで問いかけであるのに、彼の心はそれを否定しているようだった。

始めから私が攫ったと思っっているのなら、何故疑問の形を取るのか。回りくどく責められた気がして、歪みそうになる表情を何とか押さえ込んだのは、白檀様に対する忠誠心故だ。私の態度は白檀様への評価へと直結する。それはこの世界以外でも共通する事項で、身に刻まれていた。

自分の怒りを落着けようと静かに呼吸を繰り返していると、更に追い討ちが掛かった。

「悪魔は自分の好みの人間を攫い飼うことがあるという。君は彼らを眷属へ加えたのか？」

その言葉は、きりきりと膨らみかけていた怒りをぼたりと落とした。歯牙に掛ける必要すらない愚考だ。ここまで言われると、最早侮辱されているとすら感じない。

ただ思うのは、やはり面倒だとその一言だけ。

隣に腰掛ける梅香が笑顔で力を溜め始めたのを抑える気は今度はなかった。白檀様としてこの矮小な人間達を一人二人消しても何も言わないのではないかと思ひ始める。

だが寸でのところで理性が勝り、梅香の力の発動と同時に結界を張ってやることにした。そうすれば一応自分を守った相手に対し見方は変わるだろう。

伝心でそれを告げれば愉しげに笑った梅香から了承の言質が取れ、彼に合せて力を膨らませる。人である身が受ければ一瞬で蒸発してしまう程度の力なのに、彼らはそれを感じ取ることすら出来ないらしい。

しかし結局その力を発動することはなかった。

「伽羅様を貶めるのはやめてもらおう」

「我らは確かに伽羅様に命を救われこの場に存在するのだから」

流れるバリトンは勿論私のものでもなければ梅香のものでもない。  
啞然と口を開く勇者一行を眺めれば彼らでもないのは判断できた。  
この場に居るのは残りは二人で、跪いたままの彼らに視線を向ける。  
すると目を細め慈しむように微笑んだ彼らは、その光を一転させる  
と勇者一行に向ける。

剣呑な眼差しと殺気に塗れた雰囲気は戦いに慣れた者が発するそれで、勇者の一行であるくせに剣すら持たない存在に怯んだ彼らは喉を鳴らし二人に釘付けになった。

『どうするんだ、伽羅？傍観するか？』

『そうね。この二人が話したのなんて一月ぶりだし、いい余興になるかもしれないわね』

『ついでに利用できるといいんだがな』

『ええ』

視線で頷きあつた私と梅香は判断を下す。そうして私は足元に跪いたままの二人を立たせると、発言を許した。

## 二日目【5】（前書き）

少し残酷表現が入りますのでご注意ください。

## 二日目【5】

立ち上がった二人は、梅香ほどではないが菊花よりも身長がある。と言っても、その差は小指の関節一つ分程度だが。それでも人にしては長身だろう。

改めて観察したが、ハークとアーク、彼らの見た目は見れば見るほどよく似ている。きつと双子なのだろう。

どちらがハークでどちらがアークか知らないが、静かに放たれる殺気もよく似ていた。彼らの経験値はこの場にいる勇者ご一行の誰よりも高そうで、勇者の一行を名乗る割にはお粗末な実力だと内心で嘲笑った。

人にしては珍しい黒に近い藍色の瞳をしたハークだかアークだが、凜いた眼差しをアイルに向けた。鋭くした殺気は衰えないのに、随分と器用なことだ。

「彼女は、伽羅様は、死に掛けた我らの命を救ってください」

耳に心地よいバリトンが伝えるのは先ほどと同じ言葉。幾度も繰り返しても状況は変わらないだろうに、愚直に伝えるのは口元に黒子がない方の男。

「伽羅様は我らの生い立ちも、所属も、人としての立場も何もかもご存じない。それでも無条件で死に掛けていた我らに再び命を下さった。手厚く加護し、何不自由なく生活をさせてくださった。伽羅様に連れられて一月近く。我らは伽羅様に見返りを求められたこともなければ、何かを強制されたこともない」

先に話した男と全く同じに聞こえるバリトンの声。しかしながら朴

訥でぶつきらばうな先ほどの男よりも、口元に黒子があるこの男の方が口が達者らしい。

やはり見た目が同じであっても、中身までは同じではないということか。

「しかし、あなた方の失踪は未だに国内を巻き込んだの搜索が続き、中でも許婚候補であった王女の錯乱状態は酷く、お二人の弟君が連日付きつきりでお慰めをして漸く落ち着くほどの有様で」

「王女が混乱しているのだと？」

「ハーク様？」

「・・・弟が付きつきりで、か」

「アーク様？」

個人個人で呼びかけたアイルの反応で、私は漸くどちらがハークでどちらがアークか判断できた。

先に口を開いた黒子のない素っ気無い口調の方がハークで、彼よりも弁が立つ黒子がある方がアークらしい。

ふむふむと頷いていると、梅香からの伝心が繋がった。

『おい、伽羅』

『何？』

『何やら少しばかりややこしそうな話しになりそうだが、どうする？僕たちに必要な情報だと判断するか？』

『・・・そう、ね。彼ら二人が国の要人で、王女の許婚候補と言うのは理解したわ。ついでに何やら泥臭い内容に巻き込まれて瀕死の状態だったらしいってことも』

『利用できる話になると思うかい？僕はなんだか話しを聞くのに飽きてきたよ。・・・人のいざごさは面倒なだけで、僕たちに有利な何かが出てくるとは思えないな』

『でも余興にはなりそうよ。それに、白檀様はこういういざごさを



聞くのは好きだわ。退屈が嫌いな方だから」

『君はいつもそればかりだ。でも、確かに白檀様は好きだろうね。勇者もまだ戻ってこないようだし、もう少し見物するか』

態々ため息まで伝心で伝えた梅香を横目で睨みつつ、目の前の光景に意識を戻す。

少し梅香と話している間にも、話は続いていたらしい。ハークとアークの瞳の色が危険色に光っている。助ける際に私の血を一滴飲ませたので、彼らは私の眷属扱いになる。自分のものにする気など欠片もなく、怪我さえ全て治ればどこにでも出て行けば良いと思っているが、血を抜かない限りは彼らは私の特徴を受け継いでいた。人の身であるくせに、私の名を正確に発音できるのもその所為だ。

私の瞳の色は碧。彼らの瞳の色は濃い藍色。全く違う色合いであるが、彼らが怒ると私の眷属としての力が僅かに発現する。血の一滴程度なら中級の魔物にも及ばないだろうが、人に比べれば遙かに強い。肉体的にも、魔力的にも、だ。

私の血を受け入れてから彼らが怒りに支配される状態を見たことがなかったのだが、どうやら余程腹に据えかねる言葉をもらったらしい。ぴりぴりと空気が震え、怒りが皮膚を刺す。

悪魔として力ある私ですらこの程度の刺激を受けるのだ。人である勇者一行はさぞかし強烈な殺気に身を焼かれる気分にいるだろう。

事実、アイルもシエリルもウェイも今にも気絶しそうな土気色の顔色をしていた。いつそ気絶できれば楽なのだろうに、中途半端に戦闘経験があり修羅場を潜ったから意識すら失えないのだろう。

私としては、この程度の殺気に当てられているのに、どうして私や梅香を威嚇出来たのか心底疑問だ。この二人程度の力の方が弱くて判りやすいのだろうか。少なくとも、レイノルドであればこうはいかないだろうに。

この場に居ない勇者を思い出したため息を吐けば、何故か梅香から鋭い視線を送られた。伝心を繋げたでもないのに、全く察しのいい幼馴染だ。

飽きつつある私と梅香を横目に、シリアスな空気は続く。

「王女が錯乱状態に陥るはずがない。                      弟が、彼女に付きつきりなのは本当だろうがな」

「・・・どういう、意味ですか？」

「簡単に単純な理由だ。我らを瀕死の状態に追い込んだのは、その錯乱状態の王女様だという話なだけだ。魔物に襲われ彼女の護衛についていた我らは、王女を護るために命を懸けた。腕が？がれても胸が裂かれても、我らは護る心積もりでいた」

「死に掛けながら戦う我らに、王女はおっしゃった。『私のために死んでくださいませ』と」

「我らは意味が判らなかった。混乱し、胸を貫かれたハークを見て、王女は美しい顔に花が綻ぶかんはせような笑みを浮かべられた。全ては彼女と弟が仕組んだ罠だった」

『ありがちな』

『ええ、ありがちな』

『あつちの世界のドラマでありそうな内容じゃないか。昼の時間に流れている感じのどろどろした』

『あなたが良く体験してそうな雰囲気の内容のあれ？』

『失礼な。僕は遊ぶ女は選ぶよ。三文芝居につき合わされるのは真つ平ごめんだ。出会いは運命的に、別れはスマートにが僕のモットーだ』

『・・・刺されなさい、一度』

ハークとアークの話よりも梅香の話が身近な私としては、この幼馴染を焼却処分するかを真剣に悩み始める。白檀様の直属の部下であ

るくせに、そこら中から隠し子が出てきたらどうすればいいのだろうか。

彼がどれだけ女好きか、そして女の扱いに慣れているかを知っているが、いくら子供が出来にくい体質の私達でも数を打てば当たる。もし隠し子を連れている女性が名乗り出たら、絶対に責任を取らせてやろうと密かに決意していると、僕がそんなへまをするかと最悪極まりない伝心が来てぶちきった。

私達が心の中でそんな下らない遣り取りをしているとは知らない人間達は、シリアスムードを継続している。

信じられないと首を振るアイルたちに、ハークとアークは碧の目をしたまま続けた。

「王女は魔よけの守護を持つタリスマンを弟から受け取っていた。そして同時に我らには逆の効果のタリスマンを持たせていた」

「どうせ死ぬのだからと、彼女は我らに色々と教えてくださった。

曰く、我らがいると弟と結婚できない。曰く、我らがいると弟が当主になれない。曰く、我らがいると近衛隊を制圧出来ない。曰く、我らが生きていることは邪魔で仕方ない、と」

「あれほど嬉しそうに微笑まれた彼女は初めてだった」

「我らが慈しみお育てした王女は、物心ついたときから我らが邪魔で仕方なかったそうだ。殺す瞬間まで、絶望を与えようと望むほどに」

深い闇を感じさせる声音で告げた彼らは、いつそ鮮やかに微笑んで見せた。彼らの普段の笑顔は知らないが、それが酷く歪なものだと私でも判る。

怒り、悲しみ、絶望、悔しさ、憎悪、切望、哀切、その他もろもろを含んだ笑みは、凶悪なまでに美しい。

彼らはきつとその王女を大切にしていたのだろう。そこにあったの

が愛慕や恋慕、思慕なのか、それともただ単に敬愛だったのか知らないが、慈しんでいたのには違いない。命を懸けるのに躊躇を覚えない程度に特別に想っていた相手は、しかし彼らを裏切った。彼らと弟の関係がどうだったのか知らないし、知りたいとも思わないが、心中は複雑で当然だろう。

絶対零度の眼差しと、今にも牙を剥かんばかりの殺気に、アイルたちが晒されるのは仕方ないだろう。

踏み込んでいけない領域に、彼は土足で踏み込んだ。それは知らないで言い訳は利かない繊細な領域で、当然の権利とばかりに主張した彼の言葉がどれ程外れたものかを物語っていた。

アイル自身もきつと二人の発言に驚いているだろう。昨日ちらりと聞いた内容では、彼は王女に強い憧れを抱いていたようだったからそこまで考え、気が付いた。付け入るための隙は、とても大きく口を開いて待っていたのではないか。

『梅香』

『何だい、伽羅』

『目の前のこの勇者一行を取り込むのは下策だと思う？』

『さあ、どうだろうな。・・・彼らを取り入れて浮かぶデメリットはないが、メリットも思い浮かばない。ああ、でも勇者対策にはなるかもしれないな。いざと言うとき目の前の彼らが君の肩を持てば、勇者も簡単に白檀様に手を出せなくなる』

『・・・そうね。そんな状況作り出すはずがないけれど、一瞬の躊躇さえ得れば手は打てる。ならば、この者たち取り込みましょう』  
『どうする気だ？』

『成体に戻るわ』

伝心で告げた内容に、梅香は少しも驚かなかった。

## 二日目【6】

私は白檀様の側近だ。誰よりも彼に忠誠を誓い、誰よりも彼を敬愛している。養女として可愛がってもらっており、彼の様々な面を誰より知っていると思自負している。誰よりも信賴していただいているし、誰よりも信用していただいている。

その信賴信用に応える為日夜修練は積んでいるが、世の中は努力だけではどうにもならない部分もある。私は文武魔に秀でていると名高い悪魔だが、それは器用貧乏でしかないと自分が一番判っている。武の面ではどうしたって梅香に劣る。文と魔の面では墮天使の菊花に劣る。戦闘力は高いが、二人を超えるほどはなく、魔力は高いが菊花ほど癒しの力を持たない。

それでも私は白檀様の役に立つために、他の誰にも負けないものを一つだけ有している。

使い方次第では状況を引っくり返す、白檀様に教えられた自分の使い方。

魅了の力。

悪魔の癖に金色の瞳と碧の瞳を持つ私だが、物珍しさもあって魅惑の力だけは他の悪魔より優れていた。美貌を誇るのは悪魔の常識。力が強い者ほど容姿が優れる世界にあつて、私は全てにおき異色を放っていた。

何しろ、私の魅了の力は、その気になれば王族を超える。恋心を忠誠心と置き換える悪魔の、王族のために育成された暗部の者さえ誑し込めるほどに。

生まれ持つての力だと、これだけは白檀様も称賛してくださった。そしてこの力があるからこそ、私は彼の側近でいれる。

成体であろうと小悪魔であろうと魅了の力は使える。存在するだけ

で魅了されると誉めそやす相手も少なくないが、それでも場に相応しい格好がある。

何か特別のことをするわけではない。ただ意識するだけでその力は強まり、姿は関係ない。しかしこの力を使うと意識するならば、と昔白檀様と約束した。

もつとも効果的な時に、鮮やかに全てを攫って見せろ、と。

『俺の娘ならば、何もかも奪って嗤って見せろ。何より誰より美しく、泥中でさえも咲き誇れ』

薄汚れ死に掛けた私が回復し初めて敵を魅了した時に、白檀様は僕<sup>しもへ</sup>とも奴隷とも呼べる存在を連れた私にそう言って笑った。

私の美学は彼の規律に反しない、ただそれだけ。鮮やかに全てを奪い、上から見下ろし嗤うだけ。魅了すると決めたなら、美しく鮮やかであれ。

微笑み方を変えた私に、梅香はひょいと片眉を上げた。物言いたげにしながらも、口を噤む代わりに力を使う。この部屋の入り口を魔力で閉じ、人は入れないよう工夫した彼は、何食わぬ顔で伝心を繋いだ。

『墮とすのか？』

『ええ』

『そうか』

短い会話の後、一方的に繋がりは切れる。

視線は逸らされたままでちらりともこちらを見る気配はない。けれど梅香の意識がこちらに集中していて、尚且つ彼が不機嫌であるのは長い付き合いで判った。

彼は表に出していないだけでこの世界の『人』が嫌いだ。その原因

の一端を担う身としてどうしようとは微塵も思わないが、上辺に騙され気を許しつつある勇者一行　取り分け女性というだけで親切にされたシェリルを哀れと思わないでもない。

何しろ梅香がちやほやしたとしても、それは逆上せさせるための演技でしかなく、最終的に彼は自分へ向いた想いを踏み躪ると決まっているから。

ああ、でもそれなら今この瞬間に私に魅了されるのは幸せかもしれない。

私の血を一滴とはいえ持っているくせに、持ち主の雰囲気の変化にすら気付かぬ愚鈍な男たちを見れば、相変わらず瞳の色を変えて目の前の、敵にすらならない存在を脅かしていた。

余程逆鱗に触れる内容だったのだろうが、空気を読んでいただきた

い。

仕方なしに指先を弾き小さな風を起こす。

はっと瞳の色を本来のものに戻した二人が執事服で礼を取り、そうすることで彼らの視線の先にいた私に意識が集中した。

部屋の人間の視線が集中したところで、指を鳴らし幻の花を空から降らす。形も色も様々なそれらは、けれどきちんと芳しい香を一つ一つが放っていた。

幻なのに芸が細かいと梅香には言われるけれど、より本物に近づけるのが幻の骨頂。本物と認識させれば、幻でも生物は息絶える。

贋物は時に本物を越える。

頭を下げたハークとアークとは違い、この幻想的な雰囲気を目にみた三人は唖然と口を開けた。幻想により高くなった天上から、花は降ってくるように見えるのだろう。窓すらない場所から光が差し、私を中心に照らしていく。

正直作りすぎだと思うが、『人』にはこれくらいが判りやすくて丁度いい。視覚、聴覚、嗅覚を支配すれば容易に術に嵌るのが『人』だ。

一番奪いやすいのは視覚。だからこそ見た目は派手に美しく幻想的に。

視線が集まったのを感じ、口角を上げる。

相手の好みを読み、より相手の理想に近づける。彼らと話をした上で、一番彼らを墮とし易いと感じた形へ。

僅かに小首を傾げ、髪を結んでいたリボンを風の力で解く。

ふわりと金髪が舞い顔を隠す。その動きにあわせて光を流し、自分の姿を覆い隠す。足元から布を解くように光を退けて行くのとあわせ体の作りを本来のものへと戻していく。

ふわふわだった白いドレスから、体にフィットした形の黒のドレスへ。

いかにもお姫様が着そうなレースが幾重にも重なるチューリップ型のドレスではなく、アシンメトリーなデザインのそれは、右側に腰に届くすれすれまでのスリットが入っており、歩きたびに足が露出する。白檀様の髪とお揃いの黒と対比する白い肌。スリットネックラインの胸元に飾る薔薇のコサージュは毒々しさ一歩手前の赤色。それと同色のピンヒールを履けば、視界が随分と高い位置へと変わる。

右側でまとめてあげていた髪は優雅に流し、右に分けたて胸まで垂らした髪にリボンを編みこんだ。右手だけ肘まであるレースで蝶が描かれた手袋をすれば出来上がり。

口を開き、魂すら抜けるのではないかと思わせる間抜け面を晒す勇者一行に、精々鮮やかに微笑んで見せた。



呼吸をしているのか怪しい彼らの顔は徐々に紅潮し、今にも卒倒しそうだ。倒れられたら面倒だからやめて欲しいと考えながら、微笑みは継続する。

頭を垂れているはずのハークとアークの耳すら紅いのが視界に入り、一部しか開放していないとはいえそれでも私の前で礼を崩さぬ態度に感心した。何しろ同族ですら下級の相手であれば、呆気なく理性を失うくらいだ。その自制心には人にしては中々のものだろう。

目の前の勇者一行はすでに自意識すら保てているのか怪しいところなので、彼らの自立心の高さは相当だ。

たっぷり五分ほど経っても何も反応を示さない勇者一行に痺れを切らしたらしい梅香が、ぱちんと指を鳴らす。

同時に空気を伝い微弱な雷が彼らを貫き、止まっていた時がようやく流れ始めた。

「・・・黒の、聖女様」

その名を広めたのも人間であれば、その名を呼ぶのもまた人間。忌々しくも面倒な呼び名を私に付けた男はもう世界に存在しないのに、鬱陶しくも時を跨いで二つ名は受け継がれた。

先ほどまでの警戒心丸出しの視線から、羨望と恋慕と思慕と敬慕、ありとあらゆる憧憬の視線を籠めた彼らに、嫣然と微笑んだ。

## 閑話【むかしむかしの魔法使い：前編】

この世界の時間枠での昔の昔のその昔。そして私の住んでいる世界でも十分に昔と言える過去に、私の人生の汚点が作られた。

それはほんの些細な気持ちが生み出したとんでもない面倒で、私はその後手痛い失敗を元に慎重になった。

私の人生に汚点を刻んだ男の名は『アドニス・ファン・デル・サール』。

今から数えて四代前の勇者の一行に魔法使いとして同行していた男であり、当時の世界にこの人ありと歌われる人最高の魔法使いだった。

魔法使いだというのに随分と体格がよく、その顔立ちは勇者のそれより精悍できりりとしており、短く刈り揃えられたメイプルレッドの髪のところどこにアッシュグリーンのメッシュが入った色彩が派手な男だった。

真面目を絵に描いたような男で、いつだって私を見る眼は疑惑に塗れ、無口な性質だったらしく偶に口を開いても一言二言で会話は途切れる。さらに言葉以上に明確に、眉間に刻まれた皺が私達に対する感情を教えていた。

曰く『鬱陶しい』『魔物ごときが』『穢れた存在め』『俺に近づくな』などなど。

目は口ほどにものを言うと言った昔勇者に教えてもらったが、確かにその通りだと、感慨深げに彼の言葉に感心してしまった。ありえない不覚だ。

とにかく、アドニスの私に対する拒絶はとても判り易くあからさまで、一度当時の勇者が仲を取り持とうとして返り討ちにあつたくらいだった。

そう、何の因果か知らないが、魔法使いの彼は格闘術にも優れていて、残念な勇者より腕が立った。それでも彼が一人でこの場に来れなかったのは、彼の腕がどれだけだとしても所詮は『人間』の枠に収まる程度であり、私達とは歴然の差があったからだ。

力で遙か及ばない彼らの切り札は勇者のみ。世界中でただ一人魔王の白檀様に傷をつけることが出来る存在のみだ。どれほど魔力が強くとも、どれほど武術に優れていてもそれは判断の基準にならない。

私は最初アドニスには勇者が嫌い、だからこそあんな態度なのかと思った。

しかしながら、彼は勇者の無二の親友だったらしく、仲良くしてやってくれと頼まれた。頼まれたからと言って聞く理由は欠片も持ち合わせぬ私は普段通りに振る舞い、そして日が経つにつれ徐々に彼の瞳は鋭さを増していった。

アドニスは私が嫌いだった。その事実は当時の私にとって魅力的な内容であり、実験台を探していた私としては、彼は丁度いいモルモットに過ぎなかった。

当時の私は自分の力を試したくて仕方がない年頃だった。王族の暗部も傲慢な貴族も、誇り高い天使でさえ墮天知らしめた実力である私だったが、片手に満たない数だがどうしても墮とせない存在もあった。

自分より高位である白檀様や王族の方々ならまだ我慢も出来た。魅了が利かない相手に、『人間』が居たのが私のプライドを酷く刺激した。

いつの時代も私に向かってヘラヘラと笑いかけてきた勇者。いつだって油断していて隙を見つけるのは簡単なのに、いざ捉えようとしても彼は私の手の内に堕ちて来ない。だからずっと実験してみたかった。

私を愛さなくとも私に好意を持たない存在は数少ない。力を使わなくともそれで、野良の魔物や動物、果ては知性の高い『人間』や『悪魔』『天使』もそうだ。だから、彼は体のいい実験体だった。

「あなた、私が嫌いね？」

一応疑問符をつけているが、問いかけは疑問ではない。むしろ心の内では確定した真実であり、彼がそれを否定するはずがないと自信があった。

しかし目の前の男は目を細めただけで無言を貫いた。思ったより馬鹿ではないらしい。

人の身で魔王の城へ交渉に来ている現状をよく理解している。口にしてくれれば言質が取れてまた面白いのだろうが、別に構わない。

この地域一体はもう幾度も利用しているが、相変わらず日が差すことはない。今は昼の時間帯であるが、太陽が嫌いな白檀様の力により厚い雲で覆われ空は闇色に濁っていた。ところどころ雷雲があるのも白檀様の趣味で、時折暴風雨を起こすのが密かなマイブームらしい。

その嗜好は理解できないけれど、白檀様が宜しいなら私に文句はない。子供みたいな笑顔で作った雷を私に語る白檀様は可愛らしく、素敵だ。

ああ、話は反れてしまったが、何が言いたかったかというところこの部屋には明かりが乏しく光源が少ない。ただでさえ外は薄暗いの更に遮光カーテンが引かれ、人は闇に慣れるまで時間が掛かるはずだ。そして私の自室に明かりはなく、人であれば闇の濃さに恐れを抱くだろう。

それなのに言葉を発する私から微塵も目を逸らさぬアドニスは、濃い闇に怯まずいつも通りに仏頂面だった。警戒するように魔力のアンテナを広げ、私を探っている。

振り払うのは簡単だが好きにさせてやっている、危険がないと理解したのか警戒しながらもアンテナを引っ込めた。

普段ならそんな無礼な真似をされたらさっさと魔力を開放しているが、今日の私は知的探究心が前面に出されている。よって少しの無礼は赦すことにした。

「明かりは必要？」

「・・・頼む」

アドニスはきつと失語症に違いない。言葉を三言以上発音している姿を目にしないし、ついでに彼に付けている部下も見えないと言う。顔立ちは整っているが女に怖がられると勇者が言っていた理由の一端はそれだろう。それでいて女に慣れてないわけじゃないと教えてもらっている、本当に都合がいい。

指を振り部屋の中を照らす光源を作ると宙に浮かべた。闇に慣れた彼は眩しげに目を細めたが、私は気にせず観察を続ける。

見れば見るほど容姿の優れた男だった。

柔らかな光源に照らされた髪は、本来よりも薄い色に見え綺麗と言えないこともない。

明らかに苛立ちを含んだ視線を向けてくるアドニスに、私はにこりと微笑んだ。

本来の姿へと戻ったときの、彼の反応が楽しみだった。

## 二日目【7】

誰かを墮とすのに時間は関係ない。場合により臨機応変に使い分ける。ようは心の隙間さえ作ればいいのだ。

僅かに油断し出来た亀裂から心の奥深くへ入り込みその人の核を掴み取ればいい。

人の核は魂と呼ばれるそれだ。把握するには心の中に入り込み掌握すればいいだけで、握った手綱を放さなければそれで簡単に墮ちる。目の前の彼らの隙を呼んだのは、大げさなまでの壮麗な演出。いかにも人が好みそうな美しい光景に惑い油断した瞬間に、魂を把握すればいい。

そう、それだけでいいはずだった。

『菊花』

『何ですか？』

『弾いたわね？』

『ええ』

全てを掌握しようとしたものの、相手が人間だとどこかで油断していたのだろつ。

後僅かで掌握しきるといふ瞬間、魂の底に触れようとした私の力は悉く跳ね飛ばされた。良く知った力によつて。

薄い膜状の力は私の力が発動する瞬間までその気配すら感じさせなかった。それなのに、今は全てを反射し近づけない。

その力は、紛れもなく菊花のものだった。

菊花は私の力が通用しないわけではないが、私の力を弾くことは出来る。予めトラップのように保険として仕掛けておいたのだろつ。

それが何時成されたのかは知らないが、私にすら感知させない力の強さは相変わらず憎たらしい。

伝心を繋げて問うた質問の返事は、欠片も迷いなく判り易いもの。端的な答えだけに心の内が読み辛く、苛立ちが高まる。

目の前の人間達はハークとアークを除き床に倒れ伏していた。自我を保てない状態まで持っていたのを無理やりに弾き返したのだ。それ相応のダメージはあるのだろう。

倒れ伏す勇者一行を前に晒うだけの梅香と、未だに頭を下げたままの残りの人間二人組み。

誰一人動こうとしない状態で、私は伝心を続ける。

『どうして邪魔をしたの？もう少しで把握しきれたのに』

『どうして？どうしてと、貴女が問うのですか？随分と貴女らしくない失策だ』

『 どういう意味？』

『白檀様の御言葉を忘れたのですか？奴隷志望の輩は作るなど、』

『ええ、仰っていらしたわ。私が忘れると思ったの？』

『それなら』

『奴隷志望の輩を作るつもりはなかったわ。完全な傀儡にする予定だったもの』

『伽羅』

『全てを把握し忘れさせる予定だったわ。私への想いを深層心理の奥に隠し、いざという時に白檀様の盾になってもらう手筈だったもの。いくら勇者といえども仲間を斬るには躊躇は生まれるでしょう』

『それは約束に反します』

『どうして？私は別に操る訳じゃないわ。彼らにお願いするだけよ』  
『貴女のお願いにどれ程威力があるか、何もかも判ってらっしゃるでしょう？』

私を諭そうとしているのか、淡々と訴える菊花に段々と気分が落ちてきた。

デメリットがないから使おうとしたが、菊花の説教が長々と続くなら、これは彼らを利用する上でのデメリットに違いない。

意識が戻らぬまま倒れている力なき人間に目をやれば、一分ほど経ってもそのままびくりとも動かない。

魂の力に寄り衝撃は変わるはずだが、どうやら彼らはただ人よりも少し上程度らしい。体は鍛えられても魂を鍛える人間は少ない。人としてなら上等の部類なのだろう。

それでも力不足は否めず、何故彼らが選ばれたのか首を傾げるが、その疑問は当分は解決しそうになかった。

取り合えず言えるのは、彼らを傀儡にするメリットは急速に魅力を失った。

どちらにせよ、いざという時は私や梅香、菊花も居る。保険を掛けようと思っただが、この場に居る彼らから判断するに、実力差は明らかだ。

唯一つ、悔いが残るとすれば、力を使い切れなかった一点のみ。

白檀様がこの場に居<sup>お</sup>られなくて良かったと心から思うが、あの方が見ていなくとも、失敗は恥でしかない。

きりりと唇を噛み締めれば、態々菊花が伝心を使つてため息を聞かせた。

それに尚屈辱感を煽られ、実力不足を痛感する。もっと、力が欲しい。自分より上の菊花の術を上書きは出来なくとも、破壊できる術が欲しい。

その為にも力を強めるための修行をせねばと心に誓っていると。

『おい、伽羅』

『何？』

『苛立つのは判るけどさ、この惨状は早く片付けた方がいい』

『・・・・？』

『はあ、本当に君らしくないな。気付かないのか？君の勇者君が、



こちらに向かっているのを』  
『っ』

言いたいことは色々とあるが、あまりの不覚に恥辱を感じる。冷水を浴びせられたように頭が冷えた。

この地に存在する魔族であれば誰でも判るはずの勇者の気配を見落とすなど、本当に油断しすぎている。

『浮つくのは判るが、いい加減に地に足をつける。こちらの世界に居るたびに不安定になるのは君の悪い癖だ。驕りは油断を誘うものだ。度が過ぎるなら、僕が白檀様に報告する』

厳しく聞こえる言葉だが、全て反論出来ぬ事実であるが故益々唇を噛み締めた。

白檀様の為にならないと判断したら、梅香は迷いなく私の失態を報告するだろう。

今回の失敗も、白檀様の側近であるなら油断すぎであり、職務怠慢だと罵られても仕方ない。

例えそれが、梅香の狙いだたと今更気付いても、全てが遅すぎる。普段ならもっと早く気づき対応していたら、浮ついていると指摘されても仕方ない。

『菊花は黙認するだろうが、生憎僕は甘くない。己の誇りにかけ、醜態を晒さないように気をつけるんだな』

『・・・わかったわ』

それでも一度は目を瞑ってくれらしい幼馴染に感謝をし、成体から小悪魔へと姿を戻した。

## 二日目【8】

「さて、それで君はこの惨状をどうするつもりかな？」

席を立ちゆつたりとした体勢で腕を組んだ梅花が、顔に薄い笑みを湛えたまま問う。

『この惨状』とは、勇者一行が床に平伏して意識を閉ざしている状況をさしているのだろう。

この場で意識を保てた人間はハークとアークの二人だけで、彼らは未だに頭を下げたままだ。使用人としてはある意味正しいのかもしれないが、彼らを使用人として雇った記憶もないため感心する気はない。

面倒な状況を作り出した一員に含めたいが、そもそも彼らを配置したところからが自らの失態だと理解しているので、彼らを責めるのもお門違いだ。

一つため息を吐くと、小悪魔の姿で指を振るった。

淡い光に包まれた彼らが瞬時に姿を消し、移動先に指定した場所の気配を探る。

「移動先は彼らの寝室？」

「ええ。今の出来事は忘れてもらうわ。朝食はまだ準備ができていない。彼らは慣れない場所で寝坊してしまった。起こしに来たのは魔王の側近。彼らは自分たち以外の人間は目にしていないし、女性の悪魔は見えない」

「全て、夢の中の出来事って？それは根本的な解決になってないな、伽羅。今は忘れていても切欠があればすぐに思い出す。菊花の力に弾かれたんだろう？」

「時間を稼げる程度に暗示は掛けたわ。出会いはやり直しをさせる。記憶を上書きさせれば信じたい方を信じるでしょう。」

彼らを

不用意に会わせたのは私の失態。ならばそれを拭うのは私の義務よ」  
「やれやれ。僕は白檀様のために、君が醜態を曝さないのを祈るよ。  
とりあえず君は昼まで謹慎だ。頭を冷やしたまえ」

「・・・判ったわ」

瞼を閉じて意識を集中させれば、脳裏に廊下を歩いている菊花と勇者の姿が現れた。

どうやら菊花が力で空間を歪めたらしく、果てのない回廊を延々と歩いている。

時折勇者が何事か尋ね、菊花がそつなく返答していた。

『菊花』

『話は纏まったみたいですね。では、勇者はどちらに向かわせますか？』

『・・・彼に選択を委ねて頂戴。菊花は私から伝心で彼らがまだここに来ていないのを伝えて。その上で勇者がこちらに向かうか、それとも彼らの寝室に向かうか選ばせて欲しい』

『判りました』

『・・・時間を稼いでくれてありがとう。手間を掛けたわ』

『いいえ、お気になさらず』

切れた伝心に肩の力を抜く。

こちらの様子を力を使って覗いていた菊花は説明せぬとも話を理解して、眼鏡のつるを指先で押し上げた。

一瞬だけ視線を絡めると、力を断ち切って意識を戻す。

「私が頭を冷やす間、勇者たちの相手を願えるかしら。午前は一応城の案内の予定だったのだけれど」

「君のお願いなら喜んで。ただし貸し一つだ。次の休みは一日僕に付き合ってもらおうよ」

「ありがとう」

綺麗にウィンクを決め伊達男を気取った幼馴染に頷いて礼を言う。次はないと忠告しながら、彼は今回の失態を黙認してくれる。手厳しく感じる物言いは、それだけ彼が案じてくれているからだ。

梅花は勇者が嫌いだ。多分、私が抱く感情の何倍、何十倍も膨れ上がった嫌悪感を抱いている。

だからこそ梅花は私を勇者に近づけないために引つ掛けようとするし、あわよくばこちらの世界から排除しようとするだろう。

彼は白檀様の側近で同僚であるが、同時に心配性な幼馴染でもある。

「ああ、伽羅。君の屋敷に戻るなら、その目障りな人間二人も連れて行ってくれ。この場にいても邪魔なだけだ」

私に向けていた親近感のある視線でなく、言葉通り邪魔な虫けらでも見るような眼差しをハークとアークに向けた彼は、冷やかな笑みを浮かべる。

私の血が混じっていても、梅香の目に彼らは人間に映り、尚且つ嫌悪の対象であるのには変わらないらしい。

視線に籠められた力は僅かだが、元が人である彼らにはさぞかしきついだろう。

近づき手を握ると、視線が私へと戻ってくる。首を縦に振れば嫌そうに眉を顰めた梅花は、ひょいと肩を竦めた。

「君は本当に甘いね、伽羅」

「貴方は相変わらず心配性ね、梅花」

「そうだよ。僕が心配性になるのは、君に対してだけだ」

私を抱こうと伸ばされた手をワンステップでかわすと、本当につれないなと益々笑みを深めた。

「私は頭を冷やしに行くわ。香は向こうにいるから直接彼らの下に付くよう言うておく。食事の用意は改めてさせるから、冷えた料理はこちらにまわすよう告げておいて」

「はいはい。お姫様の仰るとおりに」

「時間があれば貴方の好物の『クッキー』を作っておくわ」  
「楽しみにしてるよ」

言葉以上に嬉しそうに笑った梅花は、くしゃりと私の頭を撫でた。菊花の分も作らなくては、と考えながら、自身の力をもう一度展開した。

## 二日目【9】

瞼を閉じ、ついで開いた時には目的の場所に移動していた。

部屋の広さは教えられた単位で数えると二十畳ほど。屋根に取り付けられた天窓と、そして壁に嵌る四つの窓から降り注ぐのは、この地には似合わない太陽の光。

私の『拾い物』が太陽がないと生きられないと仕方ないので、白檀様がここだけ力を緩めているのだ。

ただしその分城との境はきつちりと結界が張られている。きつちりと区切られた一角は結界のおかげで外からは見えないようになっているが、太陽のおかげで庭の緑は青々としており花も数多く咲き乱れていてここだけ別空間となっていた。

伽羅が使うのは屋敷の二階にある一室だ。この部屋の内装はちぐはぐで、城にある華美で品のいい調度品はほとんどない。

部屋の半分はフローリング、そしてもう半分は畳という草を編んだ床で構成されている。調度品としておかれているのは、この場にそぐわない装飾を施された天蓋つきのベッドと大きい扉つきの本棚のみで、他にはちゃぶ台と呼ばれる小さな机が置かれているだけだった。

手入れはされているが豪華でない屋敷、それが伽羅の与えられ白檀様により手入れされた、通称『伽羅の拾い物屋敷』だ。

城の部屋に比べるべくもない瑣末な部屋の中には、ぽつりと一つの人影がある。

医者でも研究者でもないのに白衣を着て畳の上で座り込む青年は、伽羅に気づくと顔を上げた。

瞳すら見えない分厚い黒縁眼鏡と白檀様と比べても遜色ないほど黒い髪。クリーム色の肌は私たちの世界ではあまり見かけないもので、

どっこいしょと掛け声をつけて腰を上げた彼が、私に部屋の広さの単位と畳を教えた本人だった。

畳に座って本を読んでいた所為か、僅かにふらつきながら近寄ってきた男　黒方は私を見下ろし首を傾げる。

「・・・あれ？伽羅仕事は？」

「梅花に頭を冷やせと追い出されたの」

「ぬわんですってええ！？あたしのお姉さまを追い出したですってえ！！？信じられない暴挙です！」

「・・・香」

アルトの声で大絶叫した彼女は、私を見つけると走り寄り抱きついた。ぎゅうぎゅうと抱きつくというよりしがみつく力の強さの香は、小悪魔でいると私より背が高い。彼女の肩に頬を押し付けつつ一息を吐く。

この盲目の少女は私を慕ってくれるのは嬉しいが、たびたび暴走しがちなのが困ったところだ。苦笑して頭を撫でると、漸く少し落ち着いたらしく力が抜けた。

香からそつと離れると、再び黒方と目が合う。否、眼鏡が分厚すぎて合っているか判らないが、多分合った気がした。

「頭を冷やせて、何したんだ？あいつがお前にそんなこと言うの、珍しいな」

「お前？お前とは誰を指して口にしたものですか！お姉さま？まさか、お姉さまと言わないわよね、この下郎が」

「・・・香。話が進まないから黙りなさい。黒方は昔からこの話し方なの。子供の頃からこうなの。私が許しているのだから、貴女の許可はいらないわ」

「でも、お姉さまっ」

「香」

威圧を籠めて名を呼べば、びっくりと体を震わせた香は黙って頭を下げる。肌に刻まれた呪が赤い光を消し、元の黒い呪へと戻った。その様子を見届けてから、もう一度髪をくしゃりと撫でる。

「お茶の用意をお願い出来るかしら。貴女のお茶は美味しいし、考えを纏めるには最適だわ」

「っ、はい！お姉さま！誠心誠意心を籠めてお淹れします！」

ぱあと顔を輝かせて全開の笑顔を見せた香は、一礼するとドアから出て行った。この屋敷は基本的に白檀様のルールが適用され、敷地内では極力力を使わないようにしている。

お湯を沸かしてお茶の用意をしてから彼女がこの場へ戻るには少し時間がかかるだろう。

勢いよく出て行った少女を見送ると、黒方の視線がこちらに向いているのに気づいた。そして連れて来た存在を思い出した。

「伽羅。『それ』、朝連れてったんじゃないのか？何で速攻でお持ち帰りしてるんだ？」

「それが、どうやら勇者一行が顔見知りだったらしいわ。王族関係者だったみたい。私が誘拐犯みたいに思われたから、仕方なしに記憶を有耶無耶にしてここに連れてきたの」

「誘拐犯？伽羅が？」

「ええ。落ちていたから拾っただけなのだけれど、誤解を解くのも面倒だわ」

「それでどうするんだ？」

「出会いをやり直させる予定よ。いきなり予備知識なしに会わせるより、本人たちの口からワンクッション入れた方がいいでしょう」

「そうだな。で、それまでの間『それ』をどうするんだ？俺としては第三の選択肢、今すぐ捨ててくるがお勧めだ」



「・・・捨てる？私が？」

「捨てるは比喻みたいなものだ。大体『それ』の体の傷はもう癒してあるだろう？ならば開放するのがルールだ」

「・・・・・・・・」

黒方の言葉に、思い出した二人を振り返れば未だに頭を下げ続けていた。

本当に、彼らはいつまでそうしているのだろう。あの体勢はどう見ても楽なものじゃないだろうに、固まったように動かない。

「いつまでそうしているつもり」

「・・・お許しが、いただけるまで」

「許し？」

「は。伽羅様のご許可がいただけるまではこの体勢を崩すつもりはありません」

ならどこまで出来るか試してみようかとちらりと脳裏を過ぎり、同時に冷静な声がそんな無駄なことに時間を使うなと突っ込んだ。

黒方が呆れと苛立ちを含んだ気配を纏い、私は肩を竦めると彼らの望む許しを与えた。

漸くこちらに向けられた顔はやはり瓜二つで、黒子を探しどちらがどちらかを判断する。

「黒方の言葉を聞いたわよね？勇者一行の面前に出した上で判断すると、貴方たちがここから居なくなるのも確かに選択肢の一つと判断するわ。怪我が治ったならここに居る必要はないでしょう。そうすればあの人間たちに説明する手間が省けるし、全てはあやふやで終わるわね」

「・・・・・・・・」

「元々貴方たちは気紛れで拾っただけ。怪我が治ったなら自由にす

るといいわ。勇者一行には香を付け、当初の予定通り私が面倒を見ればいい。生きる代価として純粋な人としては存在できないけれど、それは予め告げておいたわ。貴方たちは好きになさい」

「・・・・・・・・」

私を見つめる二対の瞳に告げれば、彼らは微かに瞳を揺らした。

何の感慨もなくそれを眺めていると、背後から寄った黒方が私を抱き上げる。世界の中でもイレギュラーな彼はとても非力だが、それでも私を抱き上げる力は持っていた。

突然の行為に僅かに目を見開くと、ゆるりと口角を持ち上げた黒方は私の額を指先でつつく。親しげな行為は好まないが、彼に対しては許していた。

「伽羅。無言は抵抗に等しい。『それ』の意見も聞いてみたらどうだ？」

「・・・・面倒ね」

「全く。でも、話が進まないからさっさと発言を許せ」

「言いたいことがあるなら、早く言いなさい」

渋々と促せば、揃って一礼した二人は私を真っ直ぐに見つめた。黒に近い藍色の瞳は悪魔の好む色合いだ。

だがその程度の色は悪魔にあって珍しくなく、さして私の興味を引くものでもない。

一瞬互いの片割れと目配せしあった彼らは、漸く唇を開いた。

## 二日目【10】（前書き）

気が付けば二十話突破しておりました。

ここまで読んでくださった皆様に、深く感謝を申し上げます。  
本当に、ありがとうございます！

## 二日目【10】

目の前の二人は黒方より掌半分くらい背が高い。普通の人間と同じ生態しか持たない黒方よりは鍛えられた体はがっしりとしており、瞳には戦いに慣れた者特有の鋭さがあつた。

現在は知り合いから拝借した執事服を着ているが、初めて見えた時の衣服は彼らの世界で騎士が纏うものだったので、単なる『人』の黒方と比べるのは初めから間違っているのかもしれない。

微かに強張る体から緊張感が伝わる。幾度か口を開いて閉じを繰り返した彼らは、私が苛立ちを覚えるぎりぎりのところで漸く声を發した。

「・・・伽羅様は我らが邪魔ですか」

「邪魔・・・？」

躊躇の末悲しみを堪えるような声を出したのは、黒子がない方なのでハークだった。言っている意味が理解できず軽くかぶりを振る。面倒だと思つが、邪魔と思つはづがない。まずそもそもからして邪魔と考える理由がないのだから。

私にとって彼らの存在は『意味を持たない』ものだ。捨てられ死に掛けていたから拾つた。ただそれだけで、それ以上の意味を持ちようがない。

邪魔だと思つなら道端の石を拾う者はそう居ないだろう。私にとって彼らは石に等しい。拾つたからには面倒を見たが、怪我が治れば必要がない。

「我らは伽羅様に拾つて頂き生き長らえました。貴女様は我らになんら見返りを求めることなく瀕死の我らを世話してくださつた。己の力を分け与え、傷口の手当をして下さつた。何も求めぬまま何も

かもを失った我らに衣食住を提供して下さい」

「それが？」

「貴女様は我らの命の恩人です。そして、同時に今の我らの全てです」

「・・・だから、何だと言うの？私にとって貴方たちを拾った意味は何もないわ。捨てられたから拾っただけ。生きたいと望んだから生かしただけ。行く場所がないと言うからこの場に置いただけ。ただそれだけの話でしょう？私の屋敷にはルールがあるの。一つ、ここに連れてくるのは捨てられた存在のみ。一つ、ここで世話をするのは怪我が癒えるまで。一つ、怪我が治ったのならその後は自由にさせる。貴方たちはもう怪我は癒えている。だからこの場に留まる理由はないでしょう」

交互に話す二人を見て、双子とは思議なものだと考える。

互いの言葉を補うように続けるさまは息が合うというよりも、何を口にするか判っているようだ。ハークが発言し足りない部分はアイクが補う。

だが二人の言葉の内容は私にとって価値がない。彼らが発言したとおり、私は彼らに見返りは求めていない。

拾ったから拾った。助けたかったから助けた。ただそれだけだ。

「私は貴方たちに何も求めていないわ。私の血を飲んだからには貴方たちはもう人として純粹に生きられない。生き長らえた対価としてマシな方と思いなさい。それ以上の何が貴方たちに必要？」

生きたいと望んだから生き延びる手伝いをした。

怪我をしていたから生きていけるように怪我を癒した。

私の血を内包しているから馴染まない内には治癒の力も使えず、その分時間はかかったが体を動かせるまでになった。

それで、十分ではないのか。

私の問いに唇を噛んだ双子は、吐息と紛うような囁きを漏らした。

「・・・だが」

「言葉ははつきりと口になさい」

「・・・ あな、た、・・・さまが」

「あな、た、さまが？」

呪文が何かだろうか。中途半端な言葉に力は感じないが、意味が判らず眉間に皺を寄せる。

私を抱く黒方の腕に力が籠り、双子から意識を逸らし見上げれば、面白くなさそうに唇を曲げていた。

血は繋がってないが、昔から弟のように可愛がってきた彼の仕草が、今よりもっと幼い頃と重なって思わず手を伸ばす。昔よくそうしてやったように白檀様のそれより僅かに固い髪質を梳いてやれば、黒方は嬉ったそうに首を竦めた。愛玩動物が甘えるように、私の肩に額を寄り寄せて息を一つ漏らす。

目の前に立つ人間二人とのやり取りより、黒方との交流の方が私にとって遥かに意味と価値があった。

体ばかり大きくなったがまだまだ甘えたい盛りの弟分は、自分から話を聞けと言ったくせに独占しようとはかりに私を抱きしめる。ほんのささやかな力であるのに、彼の心が伝わる抱擁に心が和らいだ。しかしそんな柔らかな空間も、無粋な声により破られる。

「伽羅様！」

「伽羅様、こちらをご覧ください！」

強い口調にずっと眉を上げ視線を向ける。

きりきりと整った眉を吊り上げた双子は、そっくりの顔にそっくり

な表情を浮かべている。

苛立ち、悲しみ、悔しさ、羨望。表情からは様々な感情が伺えるが、どれが一番強いかは判断付かない。

そう言えば、彼らが自分から意思を持って私に呼び掛けたのは初めてかもしれない。だからといってどうという話でもないが。

強い口調に意識を戻せば、瞳の色を碧くした彼らはじっと私を見詰めた。

「 会話が出来ないなら、貴方たちに意見を求める気はないわ」

「伽羅様・・・っ」

「言いたいことがあるなら言いなさい。自分の意思を殺せと私は言っていないはずよ」

いい加減苛立ちながら彼らを眺めれば、息を呑んだ彼らは、今度こそ私に判る言葉を発した。

「我らを傍に置いて下さいませ」

「・・・何故？何故私がこの世界の人間ごときを傍に置かなくてはならないの？」

「我らはもう人間ではありません。貴女様の血を分け与えられた我らは純粋な人でないと、仰ったのは貴女様です」

「だから何？傍に置くために拾ったのではないわ」

「我らを拾ったのは貴女様です」

「意味はないと言ってるでしょう」

「意味なら我らが持ちました。与えるだけで何も求めぬ貴女様に、全て捧げると誓ったのです」

「そんなこと、望んでないわ」

「我らが望みました」

「我らが願いました」

『この命存えたなら、貴女様のために生きようと』

先ほどまでのやり取りが嘘のように二人の口から言葉が流れ出る。否定しても否定しても次の瞬間には全て肯定され、面倒で仕方ない言葉は交わされても会話が出来てない。何を口に行っているか、彼らは理解しているのだろうか。

悪魔の私の傍に居たいと望むのなら、『家族』も『世界』も『人生』も捨てねばならないということを。

そもそも私は望んでないと、言っているのに。何と強引で厚かましいのか。

「そんな脆弱な身で私の傍を望むというの」

「強くなります。貴女様に恥を掻かせぬほど強くなります」

「全てを捨てて何を得るの」

「貴女様のお傍に存在する栄誉を得られます。何にも勝る幸せです」

「私は」

「やめろ、伽羅。これ以上は無意味だ」

苛立ちに紛れて言葉を放とうとした私を留めたのは黒方だった。

白衣を纏う腕で私の頭を柔らかに抱きしめると、宥めるように背中を撫ぜる。あやすリズムに心が落ち着き、どちらが年上か判らないとため息を落とした。

降りて欲しいとジェスチャーで示すと、逆らうでもなく畳へ降ろす。私に触れはしないものの、それでもぴたりと寄り添う黒方を見上げた。

「諦める方が早い、伽羅。『彼ら』を拾ったのはお前だ。折

角俺が『開放』こそルールと言ったのに、『自由』にすればいいと言い直したのはお前だ。拾い物の自由を保障するならば、彼らを傍に置いてやれ」

「黒方。貴方はそれでいいの？」



「嫌に決まってる。伽羅は俺のなのに、害虫は目障りだ」

「なら」

「でもこの程度の存在でも、矛になれなくとも盾にはなれる。お前の血を与えたなら、お前の役に立つはずだ」

言葉とは裏腹に、黒方は私よりよほど不機嫌に見えた。

それも仕方ないかもしれない。私が白檀様に依存するように、彼も私に依存している。私たちと価値観が違う彼にとって、目の前の双子を傍に置けと口にするのも業腹だったろう。

それでも私のためになるだろうと、嫌々渋々と口にした弟分に、重いため息を吐き出した。

「梅花がお前を下がらせた理由が少しだけ理解できる。今のお前は普段のお前より隙がある。言葉尻一つとっても、俺ですら付け入れる」

「・・・・・・・・」

「だからこそ、『彼ら』を傍に置く意味がある。俺はお前が大切だ。お前に危険が及ぶのは恐ろしいし、傷が付けば耐えられない。だから、頼む。俺のために、『彼ら』を傍においてくれ、姉さん」

「・・・・はあ。貴方にまで指摘されるなんて、本当に氣を入れなおさなければいけないわね」

「・・・・」

「心配する必要はないわ。この世界で私に傷を負わせれる人間など、ほとんどいない」

「姉さん」

「でも、貴方が心配だというのなら、そうね、保険をかけるのも納得するわ」

伸びてきた手が私の掌を掴む。昔は小悪魔の姿の私とほとんど変わらぬ大きさだった掌は、いつの間にか包み込めるほど大きくなって

いた。

それがとても不思議で、喜ばしい。嘗ての彼を覚えているから、成長した姿が嬉しかった。

可愛い弟分の言葉なら、私も聞いてやれる。彼が安心するのなら、自分に妥協できる程度に、私は黒方を大切にしていた。

私の決断を聞いたなら、この場に居ない幼馴染は笑顔で圧力をかけるだろう。

白檀様は仕方がないなと笑い、菊花はひっそりと眉を顰めるだけで終わる。

この場に居ない心配性の知り合い達も、きっと各々の反応を見せるに違いない。十人十色のそれは思い浮かべるだけで少し面倒だったが、許容するしかないだろう。

「……とりあえず、正式に自己紹介を求めるわ。あと発言に一々私の許可を求めるのは止めなさい。上下を見せる必要がない場所ですまで畏まる必要はないわ」

「伽羅様、それは」

「それは我らをお傍に置いてくださると、解釈しても宜しいのですか……？」

「説明しなければ判らないの？ 空気くらい読みなさい」

「……っ、必ず貴女様の盾となります」

「貴女様が誇れる存在となると誓います。ですから」

『どうか、我らを捨てないで下さい』

異口同音に希う彼らに、私は嗤った。

捨てる気があるなら初めから捨つたりしないと、気づかない彼らが酷く滑稽で少しだけ哀れだった。

## 二日目【11】

焼きたてホクホクの『クッキー』を両手で持ちながら、私は機嫌よく廊下を歩く。

先ほど黒方と共に焼いたのだが、味見をさせた香は涙ながらに美味しいと言ってくれたので、きっと中々の出来だろう。

焼きたてのそれは、四つに別けた。

一つは菊花に。一つは梅香に。一つは黒方たちに。

そして残った最後の一つは綺麗にラッピングして白檀様に。

菊花と梅香の分は転送したので彼らの分が先に付いているが、歩いていっても昼食後のデザートには十分間に合うし何より白檀様のお顔が見たかった。

先ほど何だかんだで手に入れてしまった新たな部下二人の報告をしなくてはならなかったし、一日に最低三回は白檀様の顔を見ないと調子が出ないのだ。

新しい部下を思い出すと、自然と眉間に皺がよる。

黒方の想いに応えるために双子を受け入れたが、それは果たして吉と出るか凶と出るのか。正直先が全く見えない。

『改めて名乗るけれど、私の名前は伽羅。こちらの黒髪の男が黒方で、可愛い女の子が香よ。貴方達の名は？ああ、家名は必要ないわ。もう意味がないから』

視線を向ければ同時に膝を付いた双子は、私の手を握ると甲を額に当てる。

『我はハークと申します』

『我はアークと申します』

『誠心誠意二心なくお仕えいたします』

『どうぞ我らを、使い切ってください。我らは貴女様のもの。所有していただけることこそ幸せ』

恭しく告げると熱の籠った瞳を向けてきた。色は彼ら本来のもので、上気した頬は単純に興奮故らしい。

覚めた眼差しで眺めていると、そのまま手の甲へ唇を落とそうとして、戻ってきた香により強かに壁まで蹴り飛ばされた。

毛を逆立てた子猫のように威嚇する香の頭を撫で、彼女の背中を避けて顔を出す。

『・・・使い切られたいなら強くなりなさい。今のままじゃ盾にしてもすぐに壊れるわ』

『・・・はっ』

『そうね、丁度いいから香に師事するとわね。頼めるかしら、香？』

『勿論です！この脆弱な輩を叩き潰せば宜しいのですね？』

『違うわ。叩いていいけれど、伸ばして欲しいの。打たれ強くしてくれれば十分よ』

『どの程度でしょうか？』

『貴女が、私の傍に置いてみても恥ずかしくないと思える程度までよ』

香はそれはそれは嬉しそうに笑った。

見えない瞳は閉じたままだが、それでも表情から喜びが伝わってくる。

体に刻まれた呪が赤く点滅し、危険色に染まった。

『お前ら、死ぬより辛い目に合うぞ。今ならまだ逃げ出せるが、どうする？』

『心配御無用』

『一度は死んだ身。耐え抜いて見せましょう』

口の端を持ち上げて笑った双子に後悔は全く見られなかった。

彼らが香を見てどう感じたか知らないが、きつと想像以上に扱かれるに違いない。

何しろ彼女の師匠は戦闘において抜群のセンスを誇る男だ。

そして彼の私に対する過保護な感情も香はそっくり受け継いでいる。合格ラインまで叩き上げられるのは、ちよつとやそつとでは無理だろう。

黒方の唇が愉しげに持ち上がる。彼らの運命を見越した上での表情は、白檀様に少しだけ似ていて、ちよつとだけ可愛らしかった。

先ほどのまでの遣り取りを思い出していると、いつの間にか白檀様の部屋の前についた。

朝入った寝室ではなく、少し離れた場所に設置している執務室。

応接間を隣接しているこの場所で白檀様は昼食を取られるので、きつと今の時間帯ならこの場所に居ると検討をつけたが当たりらしい。室内から仄かに漏れる力を間違えるなど有り得ず、軽快なノックを四回する。

「伽羅でございます。入室の許可を頂けますでしょうか」

『・・・うむ。入って来い』

「ありがとうございます」

視ていないだろうが扉の前でスカートを持ち上げ一礼すると、背筋を伸ばしてドアノブを掴む。

ゆっくりと空けると、部屋の置くから漂う白檀様の気配が強まった。

焼きたてのクッキーを抱えたまま笑顔で室内に入り、そしてそのまま固まった。

「よく来たな養い子。お前も同席するといい」

磨きぬかれた机の上に、昼食を乗せたまま笑顔で促した白檀様は、椅子に座ったまま普段どおりに私を手招く。

いつもならそれに一、二もなく飛びつくが、それが出来ない理由があった。

ぎこちない仕草で白檀様から視線を逸らすと、こちらを射抜くように眺める男に目を向ける。

蒼い目と蒼い髪。世界で唯一の色彩を持つ、ただ一人の存在。

「・・・勇、者」

掠れる声は、私が発したものでしょうか。

器用に片方の眉を持ち上げて一つ瞬きをしたレイノルドは、当たり前顔をして、白檀様と同席していた。

## 二日目【12】

ぞわり、と体中を走る怖気に似た何かに、全身に鳥肌が立つ。無防備でいた時に飛び込んできた姿に、暴発しそうになる力を必死に抑えた。

それでも押さえ切れない力が先ほど解いたままの髪を広げ、そんな醜態を咎めるように白檀様がこちらに視線を向けた。

体の奥深く、臓腑ではなくもっと別の　　そう、言うなれば魂からの拒絶を必死に制御しようと浅い呼吸を繰り返す。

暴走しそうになっていた力が体の内に収束し、髪が背に流れるのを感じてから閉じていた瞼を開け表情を取り繕った。

警戒を怠らず、白檀様の名を呼ばずに居て良かった。

勇者に白檀様の名を呼ばれるなど、苛立ちを通り越し、世界の均衡も無視して殺してしまうだろうから。

「失礼いたしましたわ、勇者様。魔王様とお食事をされていらしたのですね」

「・・・ああ」

クッキーを片手に持ち替え、スカートの端を摘むと略式の礼をする。すっと瞳を細めた勇者　　レイノルドは、表情がないだけで無骨に見える端整な顔をこちらに向けた。

まるで珍しい生物を観察するように注視した後、ゆっくりと唇を持ち上げる。

「あんだ、笑えるんだな」

「え？」

「笑ってる方がいい。年相応で可愛いく見える」

しみじみとした言葉に、眉を跳ね上げる。

一体彼は何を言っているのだろうか。

昨日梅香との会話で出たが、私は彼らより遙かに永い時を生きている。

千年近くを生きてきた私からすれば、目の前の男は子供以下だ。

元々こちらの世界と私の住む世界では一年の換算が違う。

一年を365日とするこちらと違い、私の住んでいる世界は一年が1099日となる。

さらに時間の感覚も違い、こちらの世界の方が早く流れている。

私達がこちらの世界に来るのは大体百年に一度。単純に計算したらこちらの世界に現れるのは約三百年に一度の頻度になるが、時間の流れが違つたためこちらの世界で私達が現れるのは約四百年に一度に変換される。

忘れた頃にやってくるこの仕事で毎回勘違いされるが、私は私の世界で921歳なのだ。つまりこちらの日数のみで考えれば2500歳を超えている。

したがって目の前の男に子供判定される言われもなく、年相応と嘯かれる理由もない。

しかしながら白檀様の前で怒声を上げるなどはしたない真似をすることも出来ず、仕方なしに貼り付けていた笑みを益々深めた。

「あら、勇者様。私は笑顔で応対していましたでしょう？」

「そうか？」



「ええ」

反論は許さない、と目に力を籠めれば、納得していないと表情に出しながらもレイノルドは黙った。

これが以前の勇者であれば、ここからさらに反応が発展していたので、今回の勇者はとても相手が楽だ。

食事中だというのに無作法にも短い髪をがしと掻き毟ったレイノルドは、不満そうに唇を尖らせて白檀様を見る。

子供っぽい仕草を愉快そうに眺めた白檀様は、寛容にもマナー違反を咎めることなく笑い、私を手招いた。

「悪いな、レイノルド。俺の養い子は俺が好きで仕方がないんだ。

あの笑顔は俺専用の特別製だから俺が居ないと披露されない。この子の世界は極度に狭い　許せよ」

「・・・何であんたが許しを請うんだ」

「これが俺のものだからだ」

招き寄せた私を片手で抱き上げ膝の上に乗せた白檀様は、解いたまま私の髪を摘むと指先に絡まる。

金色の髪が私のよりも浅黒い肌を持つ白檀様の指に絡まり、するりと落ちていく。

髪を梳くのを好まれる白檀様が仰るには、私の髪質はさらさら過ぎて留めておくのが難しいらしい。

ちなみに髪の手入れは基本的に私ではなく、過保護なまでに私に構う執事がしていた。

本来白檀様が好まれるのであれば自分で手入れしたいのだが、まだ

子供の頃に髪を乾かそうとして燃やしてしまつて以来、執事に涙ながらに訴えられ彼に一任していた。

現在彼は留守番をしているため香が代わりを務めているが、たまに白檀様自らがして下さる日もある。

髪に触れる手は優しく、それが嬉しくて幸せだ。

伝わる体温に顔を綻ばせ見上げれば、くつくつと喉を震わせた白檀様は、髪が解けた指をそのまま頬へと滑らせた。

「借りてきた猫のように大人しいんだな」

「くくつ・・・猫、猫か。言い得て妙だな。これは俺が拾い俺が育てた、俺だけの猫だ。俺だけを敬い、俺だけを瞳に映し、俺だけを愛する」

「・・・・・・・・」

「これは愛らしく美しい。俺の世界では他に類を見ぬ色彩を持つ異端であり、忌避されながらも欲される。誰の心も好きに奪え、これが望めば相手は悦び、求めなくとも全てを捧げる。だが、これは与えられるものに対し、酷く執着が酷薄だ。何故か判るか」

「・・・知るか」

「ははっ、嘘だな、レイノルド。お前は知<sup>し</sup>っているはずだ。この世界に住む他の誰よりもな」

肩を震わせて笑う白檀様を睨むレイノルドの視線が鋭くなった。

思わず力を溜めようとして上げかけた手を握られる。

見上げれば穏やかな眼差しで見下ろしている白檀様が居て、私はそのまま力を解いた。

指先で喉を撫でられ、心地よさに目を細める。

胸の奥が暖かくなり、白檀様だけが与えられる『愛しい』という感情で胸が詰まった。

「伽羅は俺のものだ、レイノルド」

「・・・違う」

「いいや、違わない。髪の毛一本、血の一滴すら含め、頭の天辺から爪先まで、何から何まで俺のものだよ」

まるで宣言するように囁きに似た声で告げると、私の頬に唇を落とされた。

柔らかな感触に頬を染めると、そのまま腕の中に抱き込まれ胸に顔が当たる。

心臓が鼓動を早め、幸せで死んでしまいそうだ。

私は、白檀様のもの。

他の誰に認められずとも、白檀様が認めて下さるのなら、私はそれだけで生きていける。

それが私の存在意義で、白檀様のためになら向けられる想いも利用する。

全てはエゴだと知っている。

でも、望まれてなくとも、私は捧げることしか出来ない。

ゴミ同然の私の命を拾って下さった優しい主に、ただ幸せを感じて頂くために。

唇を噛み締め視線をレイノルドへと戻す。

彼の存在は私にとって恐怖以外の何物でもない。

彼により受けた傷は忘れないし、良い教訓になった。

「なあ、レイノルド。聞こえるか」

「・・・何を」

「俺の養女は今も昔も何も変わらず、このままだ。俺だけを愛し、俺以外の何かを迷わず切り捨てる。俺の育てた俺の愛しい俺のためにだけ存在する、可愛く純粋な子供のままでいる」

言い聞かせるよう、ゆっくりと言葉を発した白檀様を、レイノルドは喉を含んだ眼差しで睨み続けた。

表情を隠さず、感情を隠さず、苛立ちを露にした愚かな勇者。この顔であからさまに機嫌を損ねたのを見たのは、何百年ぶりだろう。

世界でただ一人蒼い髪と蒼い瞳を持つ勇者。魔王の対抗手段として生まれる世界の異端は、私と似た存在であり正反対に属する男。

彼は世界から望まれて、私は世界から嫌われた。

生まれながらに誰にも祝福された彼とは違い、同じ異端でも私には白檀様しか居なかった。

それは私には幸福だった。

白檀様の存在こそが全てで、彼だけを見ていればいいのだから。

「・・・違う」

「何がだ」

「伽羅は、あんたのために存在するんじゃない。伽羅には伽羅の意思があり、あんたは解放しなくてはならない」

「本人が望んでいないのに？」

「望みも持たせぬほど縛り付けておいて何を言う。他を見ないよう眼を塞いでいるくせに何を嘯く。都合よく育つよう耳を塞いだくせに何を願う。伽羅の世界を狭め、あんた以外を排除した。そしてそ

の後、どうする気だ」

「随分と俺の養い子に肩入れするな。お前がこの娘の何を知る？どうしてそこまで断言できる？お前は　　この娘を、何も知らぬのに」

「そつだ。俺は伽羅を知らない。でも、俺は『知っている』」

挑戦的に口の端を持ち上げたレイノルドは、白檀様の瞳を真っ直ぐに射抜いた。

何故、いつもこうなのか。

私は白檀様の傍に在れて、彼の役に立てればそれだけで幸せだ。他の何も求めていない。ただ、白檀様が笑ってくだされば、それだけでこの身も命も魂ですら捧げれる。

それなのに、その幸せを、目の前の男は崩そうと躍起になる。

私はこのまま時が続けばそれでいい。それだけで、いいのに。

「お前が俺の養い子を知っている？」

「ああ」

「どういう意味だ？」

「そのままだ。俺の家は代々勇者が選出される家系だ。だが古くから続くのは血だけではない。俺たちには知識も継がれる」

「知識？」

「そつ、知識だ。蒼い髪の子供が生まれて最初に教えられるのは古代語だ。剣術でも魔術でも、社交でも歴史でもなく、最初に覚えるのは文字だ。何故か判るか？」

「文字を覚えるならば、文字を読むため、もしくは書くために他ならぬだろう」

「そつだ。俺の家には代々勇者のみに拝読を許される書物が存在する。初代から脈々と受け継がれるそれは、歴代勇者の手記だ。彼ら

は魔王とはどんな人となりか、その力は何か、側近は何人か、その時交わされた会話は何か、一週間の出来事のみを細かく綴ったそれを後世へ残している」

「それが知識か」

「ああ。勇者の力の一つに封印と解除がある。手記はそれぞれ勇者のみが解除でき、新たに作成した手記に俺もいづれ封を施す。そうして知識は受け継がれてきた」

レイノルドの言葉に私は目を丸くした。

本来ならそんな面倒必要がないはずなのに、彼は保険をかけていたのか。

どこまで細かく記されていたか知らないが、知識と呼ぶ程度に彼に情報は与えられたのだろう。

よくよく面倒しか生まない男だ、勇者という存在は。

白檀様の反応を伺えば、少しだけ驚いたようだがすぐに平静に戻った。

面白そうに唇が弧を描き、片眉を上げてレイノルドを見る。

「その手記に、俺と俺の養い子が書かれていたか」

「ああ。だから俺は『伽羅』を知っている」

断言したレイノルドに、初めは堪えていたようだが、ついに体を震わせて白檀様は笑い出した。

不機嫌そうに眉を顰めた勇者を無視して心行くまで笑い続ける。

暫くして、息も絶え絶えになりながらそれでも何とか呼吸を整えようと、私を片腕に乗せて立ち上がった。

「残念だな、レイノルド。手記に書かれた『知識』では、到底俺と養い子の関係は理解出来まいよ」

「何を」

「俺から『伽羅』を救えとでも書かれていたか？それとも『伽羅』に自我を持たせるとでも書かれていたか？」

「……」

「愚かだな、人間よ。お前はいつだって見えていない。勇者の役目を逸脱し、お前こそ何を望んでいるのだ？」

「俺は……俺は、ただ」

「お前の考えはどうでもいい。だが、そうだな。俺の退屈しのぎにはなる」

「……どういう意味だ」

警戒心に毛を逆立てる獣のように、低い声を出したレイノルドは椅子から立ち上がり身構えた。

盾になるために離れようとし、白檀様に遮られる。

大丈夫だと唇の動きだけで伝えた白檀様は、私をそのまま床に下ろした。

力を使い黒いリボンを作り上げると、私の髪をいつもどおりに右上で纏め肩の前に垂らす。

「伽羅」

「はっ」

「俺の命令を覚えているか？」

笑いを含んだ声に、息を呑む。  
そして素早く配下の礼を取ると、白檀様の前に跪いた。

「勇者の、面倒をみる、と」

「そうだ。勘違いしているようだが、お前は一行の面倒を見るのではなく、ただ一人の相手をしていればいい」

「・・・申し訳ございません」

「今日一日の失態には目を瞑ろう。お前の役目は仕切りなおして明日からでいい」

「はっ」

顔を下げたまま是と返せば、人差し指で顎を持ち上げられた。

逆らわず顔を上げれば、愉しそうな白檀様の顔があり、私もふっと微笑み返す。

満足気に頷き、一步下がった白檀様は、迎え入れるよう両腕を開いた。

「今日は俺と共に下がるぞ。おいで、俺の可愛い養い子」  
「・・・はい、魔王様」

誘われるままに腕の中に納まれば、優しい口付けが額に落とされた。柔らかな感触に心が浮き立ち幸せが膨れ上がる。

例え今の遣り取りの全てが、勇者に見せ付けるための茶番だったとしても、それでも私は幸福だった。



「さて、では下がる前に勇者殿に挨拶をしろ。俺の客人だ。粗相がないようにな」

「はい、魔王様」

頷き踵を基点にくるりと回る。

スカートの裾が広がり、花が閉じるようふわりと収まった。

足を僅かに引いてスカートの裾を両手で持つ。

中腰になり深々と頭を下げた。

本来の世界で王侯貴族のみに捧げる完璧な礼。

一番美しく見える姿勢は、完璧を愛する執事に仕込まれている。

「お食事中に邪魔をして申し訳ございませんでした、勇者様。明日からは私が専属で付かせていただきます。誠心誠意お仕え致しますので、どうぞよしなにお願い申し上げます」

こてこてに飾った言葉ではなく、判り易く砕いて言葉を伝えた。

白檀様に向けるものとは違うが、先ほどまでより心を込めて微笑めば、瞳を丸くして私を凝視したレイノルドは酷く渋い顔で頷いた。

本来なら許可なく顔を上げて発言するのは許されないが、本当の王侯貴族ではないので白檀様も指摘されなかった。

それにきくと、レイノルド自身もそこまで畏まると困るだろう。

眉根を寄せたままのレイノルドをそのままに白檀様が私を抱きしめる。

大きな体に埋もれるようにして凭れ掛かると、応えるように腕の力が強くなった。

「俺の伽羅をお前に貸してやろう。その間好きに接するがいい」

「っ」

「愉しませてくれ、勇者殿。ああ、そうだ。お前の仲間がお前を探している。今は梅香が屋敷を案内しているし、合流してやるといい。今日の相手はここまでで結構だ。夕飯は仲間と囲え」

言いたいことだけ言い切ると、ぱちりと指先を鳴らす。

物言いたげに口を開いたレイノルドは、瞬きすらせず私達を見送った。

## 二日目【13】

昼食をとり終えたばかりの白檀様は、私を連れて寝室へ転移するとベッドの上に腰掛けた。

朝の惨状は綺麗に片付けられており、胸が悪くなるような血の匂いも消えている。

視線と力で取りこぼしはないか確認し、しっかりと綺麗になっているのを確かめると私は体の力を抜いた。

白檀様は膝の上に私を抱き上げたままころりとシーツの上に転がり、そのおかげでひやりとしたすべらかな感触が頬に伝わる。

朝同様光を遮断した部屋は真っ暗で、それでも闇に強い瞳は明確に彼の顔を映し出した。

「　　そんな顔、なさらないで下さい」

先ほどまで所有を宣言しふてぶてしい笑みを浮かべ傲岸不遜に仁王立ちしていた彼は、情けなく眉を下げ迷子の子供のように不安げな眼差しを向けていた。

遠慮のない力で抱き込まれ小悪魔でいる体は悲鳴を上げているのに、比例して心は浮き立っていく。

抱くというよりしがみ付くにと表現した方がしっくりくる抱擁に頬を緩めながら、普段から紐で一つに結ばれている髪を解いた。

背中の中頃まで伸びたそれは、さらりと音を立ててシーツの上に広がる。

指先を通して梳ると、ふっと息を吐いた彼は、私の肩に顔を埋めた。

「白檀様」

「お前は」

「はい」

「お前は、俺のものだ」

「はい」

「体なら誰に明け渡してもいい。だが心は、魂は俺のものだ」

「はい」

「他の誰かに奪われるのは許さない。お前の存在は、俺のものだ」

私に言い聞かせるようできて、自分に言い聞かせている言葉。

それが判るから逆らわずに肯定していく。

元々私の存在は白檀様が仰られたとおりは何から何まで彼のものだ。反論などあるう筈ないし、何より所有を宣言されるのは嬉しい。

だが白檀様を追い詰めたいわけではないので、彼をここまで不安定に追い込んだ勇者に苛立ちが募る。

昔からそうだ。

白檀様のように爵位を持つ貴族は大抵の場合一つの世界を委ねられる。

天使も同じように義務を負っているのだが、彼らと交互で世界の平定を見守る立場にあるのに、何故か人間は魔族を嫌う傾向にあった。この世界もそうだが、別の公爵が治める世界もそうらしく、教えてもらうと『人間』は大抵は魔族を忌避するらしい。

天使も悪魔もしていることは変わらないのに、交代で現れる天使には肅々とした歓迎を捧げると言うのだから腹が立つ。

勇者はこの地を納める天使も肅清する力を持つ。

それなのに、どうして白檀様のみがここまで苦しめられなければならないのか理解できない。

この世界は出来てからまだほとんど時が経っていない。

白檀様が1000歳の頃から治め始めたらしいが、人の中から勇者が立ったのは私が100歳を僅かに超えた頃だ。

それ故に私も白檀様に無理に願い出てこちらの世界で初の勇者と言葉を交わしたのだが、思えばその頃からどうにも意見が通じなかった。

だからこそ、面倒は起こってしまった。

思い出すだけで腹立たしい過去を胸の奥に沈めながら、自分を抱く人に腕を回す。

ぴくり、と僅かに体を震わせた白檀様は、それでも抵抗せずに私に体を寄りかからせた。

「ご安心ください、白檀様。私が白檀様を裏切るはずありません」  
「・・・伽羅」

「不安に思わないで下さい。私は貴方様のものです。欠片も疑わないで下さい。私は貴方様の魂に沿います。揺らがないで居て下さい。私は忠誠を誓っております。 私が、ただ一人愛するお方」

前髪を上げ唇を落とす。

ちゅつとわざと軽く音を立てて繰り返せば、ささくれ立った気配が段々と落ち着いてきた。

揺らぐ心を収める白檀様に、私はそつと微笑みかける。

苦痛に耐えるように顰められていた眉が皺を失くし、ぎこちないながらも笑みを返してくれた白檀様に、私の笑みは深まった。

「このままお休みになりますか？」

「まだ、昼だ」

「あら。白檀様は何時間でも寝ることが出来ると日頃から豪語されているではありませんか。子守唄も謳って差し上げますよ」

「・・・共に寝るのか？」

「はい。白檀様のご許可が頂ければ。私は安眠効果抜群の抱き枕ですよ？」

冗談めかして告げると、くつくつと喉を震わせて笑った白檀様は、ほうつと息を吐き出すと体の力を抜いた。

広い背中を掌でばんぽんと軽く叩けば、小さく欠伸をして首に頭を折り寄せる。

きつと体は横たえていたものの、昨日の夜の襲撃から眠っていないのだろう。

その原因を思い僅かに眉を顰めるも、腕の中で安らぐ人に気付かれる前にすぐに笑みにすり替えた。

誰かに腹を立てるより、今は腕の中の安寧こそが優先事項だ。

「洋服を着替えられないのですか？」

「・・・面倒だ」

「ですが、寝苦しいでしょう？皺になってしまいます」

「気にしない。それに、お前が子供の頃は良くこうして眠ったものだ」

「・・・後で菊花にどやされても庇いませんよ？」

「構わない。それよりも、今は眠りたい」

言葉を交わしているのに、段々とゆつたりとした口調になりはじめ

た。

伝わる鼓動も音を遅め、体が睡眠に移行しているのに気が付くと背に回していた手を頭へ移動する。

また髪を撫で始めると一瞬だけ薄目を開いて笑った彼は、すっと眠りに落ちていった。

健やかな寝息が聞こえると同時に、力を解放して結界を張り直す。

白檀様が普段張っているものに自分の力を加えて、それを襲撃者への合図へ代える。

白檀様だけの力であれば襲い来る敵も、私がこの場に居れば少しは収まるだろう。

もしかするともっと悪いものが現れるかもしれないが、今の時期はきつとそれもないはずだ。

「・・・ああ、そう言えば『人間』を手に入れたのを報告するのを忘れていたわ」

報告しようと考えていた内容を思い出し、じとりと眉を寄せる。

暫し思案したが、どう考えても白檀様の眠りを妨げてまで行う報告ではなかったので、また目が覚めてから改めてにしようと決めた。

今はただ。

不安定に揺れるこの方を、安らかで健やかに眠りに誘うことだけを優先したかった。

「・・・」

小声で耳障りにならない程度に歌を歌う。

それは昔、白檀様が私に聞かせてくれた子守唄で、彼が眠る時に一番心を解く魔法の歌だった。

中々望んでいただけない故に久方ぶりの共寝に心を弾ませつつ、白檀様が目覚めるまで力を解放し続ける。

この優しい体温こそが、私が望む世界の全て。



## 閑話「ハーク・アーク」(前書き)

残酷描写がありますのでR15です。  
流血沙汰が苦手な方はご注意ください。

## 閑話【ハーク・アーク】

消えかけた意識の中過ぎつたのは陽を具現化したような美しい金色。片方を潰された、残った眼球一つでは焦点を定める事すら難しく、こんな時でも美しいと思えるそれが何かは判らなかった。

体中が悲鳴を上げ、今も生命の証である血液が大量に放出され地面に吸い込まれていつている。

剣を振るっていた右腕は一メートルほど先に飛んでいったはずだが、それがまだそこに存在するのも判らない。

先ほどまで何故こうなつたかを説明していた王女は、もうこの場に居ないのだろうか。

双子にぶつけられる悪意の塊は聞いているだけで吐き気を催し、あれ程慈しみ可愛がっていた妹分は、いつか子のことなら結婚しても良いとした女性とは思えなかった。

朝露に濡れた花が陽を浴びて綻ぶような、鮮やかで柔らかな笑顔が好きだった。

鈴を転がしたような声で『お兄様』と呼ばれるのが好きだった。

砂漠の砂が水を吸うように知識を吸収する彼女に、物を教えるのが好きだった。

年が十も離れた彼女が赤子の時に笑い掛けてくれた日以来、可憐な手が汚れぬように、全ての何もかもから守ってやろうと決めていた。恋はしていなかったけれど、確かに愛していたのだ。

それは離れた場所に居る己の片割れも同じはずで、何もかも捧げて慈しんだ相手に何故ここまでされなければいけないのか、さっぱり理解できなかった。

ぶつけられた憎悪は厚く重いものだった。

嫌悪に溢れた眼差しは、今まで良くぞ堪えたと感心するほど強かった。

吐き出される言葉一つ一つに悪意が滲み、人の心はこれほどまでに呆気なく踏み躪られるものなのかと、麻痺した心で歪みきった心を感じ取った。

可愛がつている弟も、この王女と同じ気持ちだったのだろうか。

自分たちへのコンプレックスと憎悪に塗れ、それでも綺麗な笑顔を貼り付けていたのだろうか。

泣きたいのか怒りたいのか叫びたいのか逃げ出したいのかさっぱり判らなかった。

ただ判る事は、自分たちが裏切られた現実だけ。

冷静になり考える時間があれば彼らに対し同等の嫌悪を向けるだろう。

しかし生き延びる可能性は万に一つもなく、今も己の体にかぶりついている魔物が人体を租借する音が、体を通して振動で伝わった。

痛みはすでにない。ただ失血ゆえの寒さと、信じたくない残酷な現実、それでも狂えず正気を保つ精神が悲鳴を上げていた。

だから始めは綺麗な金色は錯覚だと思った。

死に掛けの自分が見た幻だと。

けれど幻は消える事無く存在し、風に流れて揺れていた。

「貴方たち、捨てられたの？」

その『音』は、今まで生きてきた中で一番美しい音だった。言葉を発していると認識できず、朦朧とした意識で瞬きを繰り返す。

するとその音はもう一度同じ発音を繰り返し、脳が意味を認識した。しかしどうにかして返事をしようとしても死に掛けた体で自由になる場所はなく、声を出そうにも声帯はひゅーひゅーと息を漏らすだけ。

それでも強制観念に似た何かが、それに返事をしなければいけないと心を急かした。

「生きたい？」

音は続ける。楽の音より美しいそれに聞き惚れながら、瞳を動かし音の発信源へと視線を向ける。

そこには金色にたゆたう何かがあり、それが『音』を発していると気が付いた。

「死にたくない？」

もう一度、同じ意味でありながら似ていて違う表現で問いかけられる。

それに答える術はなく、それでも僅かに動く部位で意志の疎通を図った。

瞬間、自分を捕らえていた『魔物』が消え去った。

それでも体は地面に叩きつけられる事無く地面から一定の距離を保ち、その感覚に身を委ねる。

抵抗しようにも力は残っておらず、今更逆らう気力もなかった。

「死にたくないのね、貴方たち」

「・・・・・・」

「一つの選択肢を取れば、もう一方の選択肢は消えるわ。それでも貴方たちは望んだ」

「あ・・・・っ」

「貴方たちを生かしてあげる。けれど覚えておきなさい。純粋な人としての貴方たちは、もう存在しなくなるわ」

静かな宣言の後、唇に何かが押し当てられる。

無理やりに喉奥まで突っ込まれたそれは、何かを擦り付けるとそのまま去った。

何をされたか判らずに居ると、一拍置いて体中を激痛が走る。

「ああああああアああああ！！」

母音のみで発される悲鳴は、自分の口から出たものだろうか。

それとも同じように声を張り上げる片割れのものだろうか。

死に掛けた瞬間よりも激しい痛み。

涙が溢れて止まらない、そして眼球が再生されているのに気がついた。

叫び声がそこら中に響いて、初めて潰された喉が再生されているのに気づいた。

五月蠅過ぎる自分と片割れの悲鳴に、破裂された鼓膜が再生されているのに気づいた。

痛みを堪えるために地面を爪で引っかけて、？げた腕が繋がりに切れた指先が存在するのに気がついた。

今すぐに死を望みたいほどの激痛は容赦なく精神に爪を立てる。けれど狂気に走りたいと望む思いとは裏腹に、何かが強固に意識を繋ぎとめた。

「私の血を一滴与えたの。これで貴方たちはもう人ではない。立場的には私の眷属。けれど怪我が治れば好きな場所に消えればいいわ」

金色の何かが美しい音を響かせる。  
音に反応し心臓が脈打ち、胸の奥から歓喜が競り上がった。

この方の傍に存在できる自分が、傍に許される己の身が嬉しくて仕方ないと、幸福が血流に紛れ全身に広がる。

何故そう思うのか判らない。何故そう感じるかも判らない。それでも傍にすることが、自分にとって自然で当たり前だと塗り替えられた何かが叫ぶ。

零れる涙も溢れる唾液も止まらない鼻水も隠せない。

全身の穴という穴から体液を零す自分はさぞかし情けなくみつともないものだろう。

生まれてこの方そんな醜聞を晒した経験はなく、高すぎる矜持に、ほんの一日、否、彼女に裏切られる前ならば自ら死を選び取ったはずだろう。

しかしそんな姿を晒したとしても、目の前の方に拒否されるはずがないと心が訴える。

彼女が自分を嫌悪するはずないと、息をするのと同じくらい自然に信じられた。

「私が貴方たちを拾ってあげる」

静かな宣言に瞬きすれば、漸く目の前の金色が形を整える。  
陽を紡いだと思った美しい金色は、波打つ見事な髪の毛だった。

消えかける意識に最後まで刻まれたのは、この世に存在するのが信じられないほどの美を所有する生き物だった。

### 三日目【1】

扉の外に生まれた気配に、私は閉じていた瞼を開けた。

瞼を開けても相変わらず広がる闇色に目を細め、自分を抱いて眠る人に視線を向ける。微かに唇を開いて寝息を立てる白檀様に微笑むと、力を使い体を入れ替える。

私の代わりに腕の中に出現したのは、本邸で留守番をしている男が手作りした『伽羅人形ver.等身大ぬいぐるみ』だ。

白い肌や金色の髪の毛の精度は大したものだ。触り心地など自分のものとほとんど変わらないし、吸い付くような滑らかさがある。髪は何も手入れせずともきらきら輝く。瞳こそ私のものより僅かに青が強いが、それでも十分だろう。体温がないが、変わりに子守唄機能搭載だ。

デフォルメされたぬいぐるみを奪われた男の発狂ぶりが脳裏を過ぎるが、柔らかいそれをぎゅうぎゅうに抱きしめて寝返りを打つ白檀様の無防備な様子を目にするとうでも良くなった。

「・・・白檀様」

「ん・・・」

「勇者に動きがございました。私は命令を遂行するために先に失礼します。結界は継続し、見張りは菊花に引き継ぎます。何かありましたらすぐに駆けつけますので、どうぞゆるりとお休みくださいませ」

「ん」

返事をしているのか、それとも呻いているだけなのか。



不明瞭な声を漏らす白檀様の額に口付けを落とすと、そのまま身を起こす。

有事の際を考え瞼を閉じていただけの私とは違い、本当に眠っている白檀様は、浮き上がろうとする意識に抵抗するよう唸る。

白檀様は私を外套に包むと眠ってしまったが、二人でいたならともかく、一人寝だと風邪を引いてしまうかもしれない。

暫し思案して、力を編みこんで掛け布を作り体を包む。ふわふわとした毛をしたものを作ったのだが、気に入ったらしく眉間の皺が解けた。

子供のような無邪気な様子に小さく笑い、菊花に伝心を繋げると後を頼むと告げておく。忠誠心の厚い彼ならば、白檀様に粗相はないだろう。

その後梅香に伝心を繋ぐと、勇者一行の面倒を引き続き頼むと告げる。元々そのつもりだったのか、彼の返事はあっさりとしたもので、けれど心の内までは読ませない。

何を考えているか判らない幼馴染の行動に違和感を覚えるが、どうせ私では止められない。どちらにせよ、白檀様に対して忠誠を誓う彼なら、白檀様に危害を与えるような策は考えない。ならば、考えるだけ無駄だ。

扉に手を掛けて風呂に入っていないのを思い出した。視線を下げれば少し皺が付いたドレスは着の身着のままだ。暫し思案すると、衣服だけ形を変える。

時計を見ればまだ早朝。闇に包まれた領域では判りにくいが、人間の国でもまだ朝日は昇ってないだろう。

扉を開けると、そこには一匹の獣が居た。

見た目は人間界の狼に近いが、全身を彩る毛は鮮やかな緋色。そして瞳は草原に生える若草色。立ち上げれば成体である私も軽く超える巨体でちょこんと座り込んだ獣は、静かに瞬きを繰り返した。

ルー・ガル！。

彼はそう呼ばれる魔物で、私の眷属の一人だった。

「アース」

「がう」

名を呼べば、ふさり、と尻尾を一度だけ振る。

本来のルー・ガルであれば、人型になり私達と言葉を交わせるが、私の眷属はその力を持たない。

しかしそれは別に気にならなかった。言葉が使えずとも伝心があれば感情が伝わるし、何を知らせたいかは判る。

甘えるように足に擦り寄る獣の頭を撫でると、そのまま思考を読み取った。

部屋の番人として置いておいた忠実な僕は、同時に勇者の監視も任せていた。

動いた気配を敏感に察し、結界を張って外と内を遮断していた私に異変を知らせたアースを誉めるよう手を差し出せば、喉を鳴らしながら手の甲を舐める。

ざらりとする長い下が指をしゃぶり、牙を立てぬ柔らかさで噛み付く。指の股を舐め満足したのか、もう一度手の甲を舐めた。

べとべとになった手を見て思案すると、そのまま彼の首筋を撫でることとで解決する。

「追えるかしら」

「・・・・・・」

問いかければ、心地良そうに目を細めながらこくりと頷いた。

## 三目【2】

アースの背に乗り外を駆ける。うつすらと残る痕跡を辿れば、どうやら勇者は森の中へと向かったらしい。

白檀様の屋敷は、広大な森に覆われている。自然に手を入れていないので、碌な歩道もない。

ここ二十年は太陽も顔を出していないので、進化が狂い不気味な成長を遂げた植物が蔓延っている。

白檀様の力の影響で枯れることはないが、それ以上の手入れはされていない。

人間達の間では、『迷いの森』とそのまま呼ばれているらしいが、別に幻影の魔力をかけているのではない。

単純に入り込んだ人間は、森に住む魔物に喰われているだけなのだが、それを知らせる存在が居ないだけだ。

どうせ臆病な人間が呪われていると噂のこの地に足を踏み入れることなどほとんどなく、それを知る私達も態々教えてやる義理はないので人間に伝えない。

方位磁石など方向を知るアイテムを持っていれば道には迷わないだろうが、白檀様の守護が掛かっていた馬車の中ならともかく、人の身でこの森をうろつくのは少しばかり危うかった。

しかめっ面をしたまま移動する内に、目的地の見当は付いていた。始めは訓練のために早起きして出かけたのかと思ったが、どうやらそれは違うようだ。

「どうしてこんなに面倒ばかり起こすのかしら」

「・・・うるウ」

「判っているわ。別に何かする気はないもの」

私を乗せるアースも、その方向に何があるか察したらしい。

ため息混じりに漏らした私を宥めるように唸ると、さらにスピードを上げる。

流れる風を冷たく感じるほどにスピードは出ているが、遮蔽物は全て器用に避けていく。

しなやかな体を躍動させる獣の首に回した腕に力を籠めると、到着を知らせるようにアースは一声鳴いた。

先ほどまで見ていた陰鬱な気分になる植物の森を抜けると、空けた原っぱになっている。

屋敷からそれほど離れていないが、意識しないと着かない程度の場所にあるそこは、基本的に伽羅以外は足を踏み入れない土地だった。

そこに生えるのは木ではなく花だ。小さな花弁を幾つもあしらった可憐な花。

花びらはアースの毛と酷似した緋色で、茎は瑞々しい緑。大きさは、大体伽羅の掌を僅かに超えるくらいの小さいものだ。

だが緋色の絨毯を広げたように大地を埋め尽くし、この不毛な地に不似合いなほど美しい光景は中々圧巻だった。

「こちらにお見えでしたのですね、勇者様」

アースから降りると、赤一色の花畑の真ん中でぽつりと立っていたレイノルドへと近づいた。

呆れたことに剣こそ携えていたものの、防具一つ纏わぬ彼は、薄い普段着のようだった。

その様子に眉根を寄せ、力を編みこみ外套を作つてやる。藍色の外套の突然の出現に目を瞬いた勇者は、私と認めると淡い苦笑を浮かべた。

「やはり、来たか」

待っていたと言外に告げる男に、ひょいと眉を上げる。

昨日までぶっきらぼうな態度と、仏頂面しか見ていなかった気がするが、今日のレイノルドは機嫌でもいいのか随分と表情が柔らかい。覚えていた面影に一瞬だけ重なつたが、まさかと首を振る。沸いた疑念を押し殺すと、顔に笑みを貼り付けた。

「こちらで何をされていたのです？」

「・・・それは、もういい」

「何がでしょう？」

「嘘臭い笑顔と、とつてつけたような丁寧語だ。昨日も言つたら？俺は、あんたたちを知ってるって。手記に書かれたあんたは、『勇者』相手にそんな態度取つたことないだろ？」

笑いを噛み殺したように告げるレイノルドに、私は表情を消した。一瞬、その『手記』とやらにどのようなように私が書かれているか聞いてみたくなつたが、後悔するのは面倒なのでやめておく。

どうせ苛立つたところで怒りをぶつける正当な相手もないのだ。何を言っているか理解できないとばかりに小首を傾げてみれば、くつくつと喉を震わせたレイノルドは私へと距離を詰めた。

隣に座っていたアースが私の正面へ立ちはだかるように移動すると

威嚇音を発する。

驚いたように目を丸めた勇者に溜飲を下げると、首を撫でて宥めた。アースが落ち着いたのを確認すると、改めて勇者は言葉を発した。

「歴代勇者の『手記』には、初代のものから含めて必ず登場する人物が三人居る。『魔王』、『梅香』、そして『伽羅』、あんただ。登場人物の性格や行動が『手記』には記されているんだが、中でも女性で唯一の側近であるあんたに関する項目は多い。物珍しさもあつたんだろうが、悪魔の中でも異端と言われるあんたに勇者は興味を持っていた。だから、あんたに対して俺の情報量は他よりも多いんだ」

「・・・それで？」

「だから、俺の前で猫を被るな。昨日、あんたの笑顔を見るまでは騙されたけど、本物を見れば贋物は褪せる。それなら、作り物ではない方が俺はいい」

くしゃり、と年相応の青年の笑みを浮かべた勇者に、私は大きく息を吐き出す。

腐っても勇者は勇者らしい。

「私は魔王様に勇者様のお世話を仰せついております」

「その俺が良いと言っている。気持ちが悪い態度は止せ」

「・・・私は本来人付き合いは得意としておりませぬ。不愉快に思われるかもしれませんが」

「今が不愉快だ。俺は本当のあんたと話がしたい。本物のあんたを見せろよ」

まるで口説き文句のようだ。

顎に手を置くと、じとりと眉を寄せる。

不快だと態度で表してやったのに、してやったりとばかりに勇者の笑みは深まった。

「しかしながら、私は」

「いいから。俺が頼んだと言えば、周りも納得するし、あんたの体面も傷つかない」

「私は別に自分の体面は気にしておりません。それに付随する

」

「魔王の体面が気になるって？・・・本当に書かれたまんま魔王至上主義なんだな。だが、俺がいいと言っているんだ。俺が魔王にも話を通す。これ以上続けるなら、融通が利かないと魔王に文句をつけるぞ」

わざとらしく声を低くして腰に手を当てた勇者は、三下の悪役のように腰に手を当てて意地の悪い笑みを見せた。

深く、深く息を吐き出す。

額に手を当てて首を振る私を、慰めるようにアースが舐めた。

「俺の名はレイノルド・フレドリック・ラツチェ。レイノルドではなく、フレドリックと呼べ」

何故か命令形で胸を張る勇者に、もう一度深々とため息をつく。  
遠回しな嫌味のつもりだが、全く気付かない勇者に、私は僅かに頭



痛を覚えた。

私のため息を敗北と受け止めたのか、レイノルド  
リックは嬉しさを隠さずに目を細めていた。

否、フレド

### 三日目【3】

「勇者はどこまで行っても勇者と言っわけね」

嫌味を箆めて鼻を鳴らしながら睨めば、負の感情を前面に出しているにも関わらず、それを向けられた勇者は笑みを深めた。

打っても響かない態度に、じとり、と眉根を寄せる。

取り繕うなというなら、それを糧に白檀様に文句を言うのなら、態度くらいは改めよう。

髪に手を入れてかき上げる。ふさりとした金色の髪が一瞬だけ視界を遮り、そのままの流れで髪は右上で纏めた。

早業に目を丸くする勇者　フレドリックを眺めると、うんざりと息を吐く。

「凄いな、それ。どうやったんだ」

「力の応用よ。どうせ人間には出来ないわ。追求するだけ無駄」

「・・・初日の初めの会話より素っ気無いな。そっちが素か？」

「そうね。戻して欲しければ戻すわ」

「いいや。そっちの方があんたに似合う。失礼で無遠慮で高慢ちきだけだな」

「・・・・・・・・」

どちらが無遠慮だと突っ込みたいが、言葉は喉奥で咬み殺す。

見た目と違い、この勇者は遠慮がない。もしかしたら想像するより若いのかもしれない。

ここ何代と続いた勇者がもう少し落ち着きがあったので、どう対応

していいか迷う。

考え込んでいる私に接近しようとしたフレドリックが、アースに威嚇されきゅっと眉根を寄せた。

何故か知らないが、どうやら私に近寄りたらしい。

「おい。こいつどうにかならないのか」

「この子は私の眷属だから、私に害意がある相手を近づけたくないのよ。    これでもマシな態度だわ」

「ふうん、随分と愛想がないんだな。見た目は格好いいのに」

「手は出さない方がいいわ。私が許可しない限り・・・」

「うをッ!？」

「喰いつかれるわよ」

「もつと早く忠告しろよ」

無造作に伸ばしていた腕を咬まれそうになり慌てて引つ込めた彼は、柳眉を吊り上げて怒鳴ってきた。

あと少しで利き腕が取れるとこだったのに、と考えながら、ひょいと肩を竦める。

口に出したとおり、アースにしては随分と甘い態度だ。

この獣は私に過度の独占欲を抱いており、私以外の命令は聞かない。本当なら触れようとしただけで、喉に喰らいついてもおかしくないほどの凶暴性を持っている。

壁のように私の前に立ちはだかる姿に、ひょいと眉を上げる。そして背中を撫でると一言命令を下した。

「少し大人しくしてなさい。勇者様は私に御用があるらしいわ」

「フレドリック」

「それで、私に何がしたいの勇者様」

「フレドリック。次は返事をしないぞ」

別に返事をしてもらえなくとも一向に構わないが、話が進まないの  
で頷いておく。

満足そうに笑う姿はやはり子供っぽく、表情が崩れるだけでこれほ  
ど年齢に対する考察が変わるのかと一種感心してしまった。

私の言葉に従ったアースは、フレドリックが近寄っても今度は唸り  
声も上げないし牙も剥かない。

若草色の瞳で私を見詰めると、静かに頭を垂れた。

無言の請求に応えるべく、手を伸ばして首をさする。彼が座ってい  
ても、小悪魔である私からしたら頭を撫でるより首の方が撫で易い。  
ぐるぐると喉を鳴らして目を細めたアースは、一応それで満足した  
らしい。

緋色の獣の喜びを没面で眺めていたフレドリックは、今度こそ手が  
届く範囲まで私に近づくと何かを差し出した。

「・・・何」

「花。歴代勇者はこの花畑に足を運んだと書いてあった。可  
愛い花だからあんなに花冠を作ったんだ。子供の頃も碌に経験がな  
いから不恰好だが、気持ちだけは籠っている」

言葉通りに、確かにそれは不恰好だった。

元々この緋色の花が冠を作るのに適していないのもあるだろうが、

それにしてもぴょんぴょんとはみ出ている花は、可愛らしいが何処か憐れだ。

そのまま咲いている方が明らかに美しいだろうに、無意味に人の手が入ったばかりに本来の美が損なわれてしまった。あまりの不恰好さに呆れ、彼の行動の意味を察するのが遅れた。

不恰好に作られた花冠を見た瞬間にアースが息を詰めぶわりと毛を逆立たせる。

まずい、と思った瞬間にはもう体は動いていた。

「・・・止めなさい、アース」

「ッ・・・るウ!!？」

右肩から胸の辺りまで走る激痛。

がっちりと埋まった牙は、どうやら背中まで突き抜けているらしい。傷の深さを判断すると、私の体に前足をかけて毛を逆立たせたままのアースの背を撫ぜる。

落ち着けと繰り返せば、徐々に呼吸を和らげた。

ゆっくりと牙を引き抜いたアースは、謝罪するように傷口を舐める。だが彼に癒しの力はなく、舐めるだけで傷口は塞がらない。

「大丈夫か!!？」

「大丈夫よ。・・・その花を私に寄越しなさい」

「ッ、そんなこと言ってる場合か！先に手当てを」

「寄越しなさいと言っているの。その花は、貴方が摘んでいいものじゃないわ」

繰り返し、傷がない方の手を持ち上げると花冠を奪った。

勇者は       フレドリックは、あまりに何も知らな過ぎる。

書面から読み取れるのは文章のみだ。そこに書かれた『想い』は、それだけで足りないのに。

見た目以上に中身が成長していならしい勇者に、一つため息を吐く。

彼は歴代の『勇者』に何か憧れでも抱いているのだろうか。

書面をなぞり行動することで、自分にそれを浸透させようとしているように見える。

眉根を寄せ私より余程痛そうな顔をするフレドリックを一瞥すると、耳を伏せ尻尾を丸めたアースに視線をやる。

全身で後悔していると訴える獣をもう一度撫でると、花冠を無造作に解いた。

「貴方は何も悪くないわ、アース」

「グルるウウ」

「これは事故よ。貴方は守ろうとしたただけだわ」

「うをーおん！おオーん！」

「これは私が招いた結果よ。黙りなさい」

悲しみを訴える獣の前で解いた赤い花を宙へ浮かす。

緋色の花弁を散らしつつ、風に溶かして私に纏わせた。

傷口を埋めるように花弁が触れると、小さく弾けて消えていく。

それと共に私の傷口から流れる血も、どんどん出血を押さえ消えていった。

最後に身を囲うように一陣の風を吹かせると、赤い花弁が花畑から

舞い上がる。

それら全てを風に溶かして、力に交えて纏って見せた。

「ほら、見なさい。貴方程度に傷つけられる存在じゃないのよ」

この緋色の花は体温が近づくと香りが強くなる。

それをふんだんに織り交ぜて作り出した緋色のドレスは、本来なら私の趣味ではない。

私が好きなのはあくまで『闇色』。白檀様が身に纏う、美しい黒。だがこの場合は仕方ないだろう。

肩から流れる血と傷を消し、鉄錆び臭い臭いも消し去る。

萎れかけた花を私が使ったことによりアースは満足し、傷がなくなつたことで安堵するだろう。

「ッ、大丈夫なのか!？」

「当然よ。眷属の力などでどうこうなるようなら、側近は名乗れないわ。それよりも、貴方はアースに謝りなさい」

「何?」

「アースが牙を剥いたのは、主として私が謝罪するわ。でも、貴方はアースへその浅慮な行動を謝罪なさい」

「・・・何故だ。俺は何も」

「箆められた想いを踏み躪るのが勇者の仕事なの?自我を通すのが勇者の使命なの?」

「!?!?」

「この場所の意味は『手記』に書かれていなかったようね。それなら貴方は足を踏み入れるべきじゃなかった」

「・・・どういうことだ」

「ここはアースの聖域よ」

苦々しい顔でこちらを睨むフレドリックに淡々と告げる。

悪いのはアースではない。意味を知らずに踏み荒らしたフレデリックだ。

そして、その想いを理解しながら見過ごした私にも罪はある。

「遙かな昔、この地で命を落とした愚かな男が一人居たわ。彼は自分の命を核として、この地に長き呪いを掛けた。陽の射さないこんな辺境で、鮮やかに花が咲いているのはおかしいと思わなかったの？」

「だが『手記』には何も      ツ」

「書く必要がない事柄よ。これは勇者の仕事に関連しないわ。けれど、意味を知らないなら、貴方は此处に来てはいけなかった。・・・始めはたった一輪だった。死に絶えた骸を苗床に、緋色の花は数を増やした。ここはね、昔はこんな空けた場所じゃなかったのよ」

昔はもつと、森と同じ陰気な植物が広がる場所だった。

この地で生き残る花など食虫植物や肉食植物だ。花や香を使い獲物をおびき寄せようなものばかりが集まる中、ここだけが異色だ。年を追うことに広がる花畑に、何も感じないわけじゃない。

伏せて忠誠を請うように動かないアースをもう一度撫でる。

私が安易な気持ちで居たから招いた結果だ。気にする必要は欠片もない。

だが気にせずに居られぬのだろう。それが眷属というものだ。



「筋道を辿つても、貴方は『勇者』と同じにはなりえない。上っ面だけの行動をする気であるなら、私もそれに合わせるわ。それが嫌なら、まず知ったかぶりを止めなさい。レイノルドではなく、フレドリックと呼べと、私に告げた理由を考えなさい」

「俺は」

「『彼』を理解したいなら、最初にすべきは先入観を捨てることよ」

フレドリックの存在は、私に違和感が覚えさせない。

確かに勇者の証を持っていてその魂にも覚えがあるのに、フレドリックには何かが足りない。

欠けたパーツがあるのか、それともどこかに押し込めているのか。平時であれば揺らがないのに、切欠があるとすぐに不安定になる。今までの勇者では一度も見たことがない現象だ。

考え、ゆるく首を振る。

どちらにせよ、これ以上は私の管轄ではない。

勇者の中身を知る必要も、理解する必要もないのだから。

私はただ、白檀様に害が及ばぬように護るだけ。

「帰るわ」

「え？」

「貴方も朝食はまだでしょう？ 思ったより時間をとってしまったわ。私の力で移動する。アースはどうしたい？」

「ぐるるルウ」

「判った。じゃあ、何かあれば呼ぶわ。それまで好きになさい。勇者に牙を剥いた罰と、私の命に背いた罰は後ほど与えるわ」

残りたいと望んだアースに頷くと、フレドリックに視線をやる。  
するとまるで迷子のように頼りない眼差しでこちらを見ていた彼は、  
どうすればいいか判らないとばかりに被りを振った。

すっと眉を上げると目を細める。

何を逡巡しているか知らないが、私には関係ない。

慰めて欲しいのなら私じゃなく、お優しい仲間に頼めばいい。

じっと眺めていると、何を考えたのかフレドリックは私へと手を伸ばしてきた。

帰る意思が通じたのを察すると、その手が届く前に私は移転の力を使った。

消える瞬間狼に似た悲痛な鳴き声が耳に響いた気がした。

### 三日目【4】

「『眷属の力などでどうこうなるようなら、側近は名乗れないわ』  
でしたか？よく言えたものだと感じますね」

勇者を仲間達の部屋まで運び、梅香に朝食の確認をしてから自室に  
戻るといきなり怒りをぶつけられた。

怒りを孕んだ声に視線を向ければ、部屋の扉に背を凭れ掛け眼鏡の  
奥からこちらを睨む銀色の瞳に射抜かれる。

普段からクール気取りの菊花らしからぬ感情の発露に、面倒だと眉  
を寄せれば、こちらの気持ちを見透かしたように器用に眉を持ち上  
げた彼は、ずかずかと大股で距離を詰めてきた。

どうやら私の行動を監視していたらしく、状況は筒抜けらしい。

「入室の許可を与えた記憶はないわ」

「頂いた記憶ありません。ですが、今の貴女には私が必要だ。違  
いますか？本当に貴女の愚かさ具合には呆れてものも言えません」

「なら黙」

「黙れと言ったら許しません」

「別に許しは請うていないわ」

「白檀様に報告しますよ」

「・・・・・・」

その一言で反論は喉奥で消える。

白檀様は私が怪我をしたと知ったらきつと顔を曇らせる。

黙り込んだ私に向けこれ見よがしにため息を吐くと、菊花はうんざ

りとした表情で距離を詰めた。  
そして表情とは裏腹の優しさで私を腕に抱くと、秀麗な顔を盛大に歪める。

「その忌々しいドレスを捨て、怪我を出しなさい。見た目しか誤魔化せない幻術でどこまで我慢する気だったか知りませんが、見栄を張るのもいい加減になさい。その体で残りの日数持つと思ったのですか？」

「いいえ。けれど私には菊花が居るわ。あなたが居れば、多少の無理も利く。違う？」

「確かに、私が居ればどんな傷でも跡形なく治して見せましょう。ですが体感した痛みや記憶は消せません。骨が露出するほどのダメージを受け、平然としている神経が理解できませんね」

銀髪を揺らして首を振った菊花だが、彼本人も同じだけのダメージを受けても平然としているだろう。

しかしながら私達に痛覚がないわけではない。むしろ有事の際には微かな皮膚感覚がシグナルになるので鋭い方だろう。

今も激痛が体を苛んでいる。だがこの程度の傷なら死ぬほどでもないし、菊花が居れば十分に治る範囲だ。だからこそ重きを置かず無視している。

自分が受けた傷なら彼とて同じ反応をするだろうに、菊花は怒り心頭に発している。

面倒だ、と首を振れば、眉間の皺を深めた菊花は実力行使に打って出た。

「・・・乱暴な殿方は嫌われるわよ」

「じゃじゃ馬はこれくらいの扱いが丁度いいんですよ」

態々怪我をしている方の腕を思い切り引いた菊花は、痛みに顔を歪ませた私に向け晒った。

傷口に爪を立てるなど天使の所業とは思えない。睨みつければ目を細め、そのまま私のドレスへと手を掛けた。

作ったドレスは紐を首に括るタイプのシンプルなものだったので、肩も露出している。別に解く必要はないと思うのだが、別段抵抗せずに行為を受け入れた。

解けて落ちていくドレスを胸元を隠すようにして手で止める。

緋色のドレスの下から現れたのは白い肌。鎖骨が見えるほど肌蹴ているが、傷などどこにも見受けられずドレスを作る時に混ぜた花の香りで血の臭いもない。

それでも迷いなく傷に触れていた菊花は、僅かに力を使い私の幻術を解除した。

「・・・あの獣が。殺してやりたい」

「やめなさい。あれは私のものよ」

「ですが貴女に牙を剥いた。この美しい柔肌に傷を作るなど赦し難い蛮行です」

「傷口に爪を立てるのは蛮行じゃないの？」

「これは可愛い嫉妬です。他の男の付けた痕など許し難いものでし  
よう」

「貴方本当に天使？」

「残念ですね。遙か昔にその種族から堕ちてます。今はただの恋する愚かな男ですよ」

飄々と涼しい顔をして告げた菊花は、私の傷から手を放すと検分するように覗き込む。

改めて私も見たが、思っていたよりはマシな傷口だった。

牙が埋もれたために白い骨が露出していたが、肩の肉が抉れた訳でもないので大穴が幾つか空いている状態だ。止血だけは済ましていたが、血だけ拭ってあるので肌を開いた穴は殊更強調されるようだった。

「・・・やはりあの獣殺しませんか？」

「殺さないわ。そんなにこの傷口が目障りなら、さっさと痕跡なく消して」

「言われなくともそうさせて頂きます」

目を細めて傷口を眺めていた菊花は、そっと顔を寄せると薄い唇を持ち上げた。

赤い舌が爬虫類のように蠢くと、そのまま傷口へ伸ばされる。

別に口を媒体にして力を使うわけでもなかるうに。近づく舌に抵抗せず身動き一つしないで居ると、肩に口付けるために屈んだ菊花は、上目遣いに私を見上げた。

銀色の瞳が僅かに潤み、肌が熱くなっている。白い肌が赤く染まり、私を抱きしめる腕が微かに震えた。

「・・・・・・・・ッ」

ぴちより、と生々しい音が静かな部屋に響く。

犬が水を舐めるよう私の肌に付いた血を舐め取る菊花は、恍惚とし

た表情で舌を動かした。

舌を尖らせ傷口の内部までしゃぶるようにして舐める彼は、何が嬉しいのか満足気に顔を綻ばせている。

確か、吸血嗜好はなかったはずだが、新たな嗜好に目覚めてしまったのだろうか。それならば出来れば私とは縁遠い部分で開花してもらいたかったものだ。

菊花の嗜好はどうあれ、舐められた部分から着実に傷は消えていく。天使族特有の癒しの力だが、何度目にしても感心する。

悪魔には癒しの力を持つものはほとんど居ないので、彼の能力は重宝した。

「いつまで舐めているつもり」

「もう少し・・・駄目ですか？」

「駄目よ。食事ならしたばかりでしょう。離れなさい」

「・・・」

いつの間にか傷口から首へと移動していた頭をがしりと片手で掴むと、菊花は不満げに柳眉を顰めてこちらを見詰めた。

無言で睨むとため息を吐き、傷のあった部分に音を立てて口付ける。吸い付かれて赤い花が咲き、それを満足気に眺め漸く顔を放した。

「回復を早める呪を掛けました。消さないで下さいね。傷は消しましたが失った血は戻りませんから」

ついた痕を指先で撫でて消し去ろうとしたら、それより先に釘を刺

された。

今着ている緋色のドレスの形ではこの場所は見えるか見えないかギリギリのラインだ。別に見えても構わないが、それに付随する面倒が嫌だ。

「あと一応血は洗い流しておきなさい。人間にその血は酷です」

私を抱く腕に力が籠められた。

菊花が全て舐め取ってしまったように見えるが、念には念を入れて血を流す方がいいかもしれない。

頷くと、私をベッドの上に下ろし、痛みを堪えるように顔を歪めた。

「貴方ほど悪魔らしくない悪魔、見たことありませんよ。その身に牙を受け入れなくとも、貴女であれば獣を切り裂く程度朝食前でしょうに」

「そうね」

「ならば自衛してください」

「そうね」

「厄介なものです。見た目だけでなく、中身まで異端とは」

「そうね」

「・・・・・・白檀様が目を覚ましそうですね」

「早く行きなさい。白檀様の寝室へ入る際は必ずノック四回の後、返事を頂いてからよ。今日は眠りが深いようだったから、まだ寝たいと仰ったら聞き遂げなさい。あと朝食にはパンとサラダの他にフルーツのジュースと、黒方手作りの野菜マフィンもお出しして。私の力で結界が張ってあるから、貴方以外は入れないわ。使用人を使う際には気をつけなさい。お風呂は少し温めで張っておいて頂戴。」



ああ、白檀様のお傍にあるぬいぐるみには触れないようにね。私と白檀様以外が触れれば呪われるわ」

「・・・・・・・・はい」

もの言いたげに唇を震わせ、結局一言だけ返した菊花は、一礼すると部屋から気配を消した。

恨めしそうに銀色の瞳を向けていたが、慣れているので無視するに限る。

瞳孔は開いてなかったので放っておいても大丈夫だろう。

『伽羅。勇者君たちの食事はもう始まってる。風呂に入るなら手早く済ますんだね』

脳裏に響いた幼馴染の声に、うんざりと息を吐き出す。

どうやら彼にも情報は筒抜けらしく、私のプライバシーの確保は難易度が高いらしい。

ゆるく首を振ると、リボンを解いて風呂場に向かう。

とりあえず、覗きを防止するために、風呂場に結界でも張ることにした。

## 三日月【4・5】（前書き）

梅香視点での話です。

残酷表現が強いのでお気をつけ下さい。

### 三日目【4・5】

常と変わらぬ笑顔で勇者達の相手をしながら庭園を案内していた梅香は、すこぶる不機嫌だった。

何故不機嫌かといえば、はつきり言つて『人間』が嫌いだからだ。本来なら好悪の感情を抱かぬはずの種族に好悪の基準を与えた存在は、何食わぬ顔で梅香の横に並んでいる。それがまた気に入らず、同時に酷く愉快だった。

ちらり、と隣に並ぶ勇者を観察すれば、今までの歴代の勇者達の面影を色濃く残している。

だが観察する限り今代の勇者は決定的に欠けている部分がある。欠けたものを理解できずに、どう探せばいいか判っていない。その無様な様子が酷く愉快で、唯一梅香の心を慰めた。

昨日一日伽羅に代わつて相手を務めたおかげで、勇者一行の人間関係は大体つかめた。

勇者の隣で嬉しそうに微笑む少女はほんのりと頬を淡く染め、その様を面白くなさそうに見詰める自称タラシの格闘家と、さらにその様子を眺める傍観者の魔法使い。

判り易い一方通行の図解だ。

勇者は少女に対しては庇護するような立場にあるが、そこに恋愛感情は混じってないように見える。

付け入る隙は溢れていて、梅香はくつりと喉を震わした。

「・・・どうかしたのか？」

「いいや？気にしないでくれ」

伽羅に対して打ち解けたように見えた勇者は、梅香に対しては相変わらずぶっきらぼうだ。

朝とは違いしかめっ面のままの青年は、警戒心を解く気はないらしい。

もともと友達になりたいわけでもないのに、それもまた結構なのだが。

蒼い目と蒼い髪。

世界でただ一人の異端であり、排斥されるべき魔王を打ち倒す力を持つ存在。

『人間』は愚かだ。

善のみで世界の均衡は成り立たないのに、悪を排斥したいと願う。

梅香にしてみれば自分たちの種族は別に悪でもなんでもないし、天使の方が博愛と称して空恐ろしい行動をしていると思う。

だが天使が執行するというだけで彼らの行為は天の裁きと成り代わり、自分たちが動けば悪の侵略へと挿げ替えられる。

価値観の違いと一言で纏められる話だが、その価値観の違いを彼らがどこまで理解できるかは興味があった。

「ああ、先客がいたようだ」

「え？」

予め伝心で頼まれていたことなど微塵も見せず、飄々とした顔で勇者達の視線を誘導するために手を向ける。

すると目的どおりに動いた彼らの視線は、ある一点で止まった。

そこには闇を溶かしたような漆黒のドレスを纏う伽羅がいて、その隣には緋色の毛並みの巨大な獣が一匹座っていた。

獣の存在を知っている勇者はもとより、強大な魔物の存在に一行の面々も息を呑む。

小さく華奢な伽羅が並ぶからこそ余計に存在が強調され、獣の異質さがよく目立つ。

恐怖に固まる『人間』の何と脆弱なことだろう。

自身の弱さを理解せず、この獣の何百倍も力を持つ梅香には対等とばかりな態度を取るくせに、判り易い異質には身動き取れない。

ならば今から見せる行為で彼らはどう動くのだろうか。

「おはようございます、皆様方」

ドレスの端を指先で持ち上げ、人形のように精巧な動きで礼を取る。見た目も相俟って儚げな美しさを出す伽羅は、それでも儚さとは無縁の存在だ。

唇が弧を描き、笑顔と取れる表情を作れば、『人間』たちはそれだけで緊張を解いた。

だが折角解けた緊張も、次の伽羅の行動で打ち消された。

礼を解いた彼女は、自らの指先を振るとその手に剣を出現された。梅香にはよく見覚えのあるそれは、伽羅が戦いの際好んで使っている切れ味を優先させた武器だ。

業ではなく技を必要とする剣の抜き身の刃は銀色に鈍く光り、冴え冴えとした美しさがある。

武では梅香に劣る伽羅だが、実戦経験は豊富だし決して弱いわけではない。

むしろ梅香ですら梃子摺る強さを持ち、内包する力を使えばどちらが勝つか判らないほどの戦闘力を有していた。

「・・・どうしたんだ、伽羅」

「先ほどの私との会話を覚えてますか？」

「先ほど？お前、キャラちゃんと何かしたのか？」

「聞いてないよ、レイノルド」

「・・・どういうこと？」

口唇を開いた伽羅は、外野を完璧に無視すると勇者のみを視界に入  
れて問いかける。

訝しげな表情をした勇者は、仲間の言葉に渋面しつつそれでも伽羅  
に首を振った。

嘆息すると剣を構えて獣に向き直った伽羅は、一瞬だけ梅香に視線  
を送る。

それに頷くと、もう視線は真っ直ぐに前を向いた。

無意識の内に梅香の唇が弧を描く。

今から起きる出来事がとても楽しみで、その結果が楽しみだった。

「よく見ているんだな、勇者君。伽羅の今からの行動は君のための  
もののだから」

「何を・・・？」

「あの子はね、本当に馬鹿で愚かなんだ。僕と同じ悪魔の癖に、悪  
魔らしさがほとんどない。唯一とっていいのは魔王様への執着と  
忠誠くらいで、自分には欠片も頓着しない」

「貴様・・・伽羅の仲間じゃないのか？良くそこまであしざまに言  
えるな」

「僕は伽羅の仲間だよ。だからここに居るんじゃないか」  
「意味が判らないな。貴様は伽羅が嫌いなのか？」

苛立ちを籠めた眼差しで睨んで来た勇者に、にっこりと微笑む。  
やはり『人間』とは会話は成り立ちそうにない。  
だがとても安心した。

勇者は、どこまで行っても勇者でしかない。  
梅香の嫌悪を煽り、人間への情を薄めてくれる存在だ。

「キャラちゃん!!?」

少女の悲鳴に近い声が上がった。  
見れば伽羅が剣を構えるところで、獣は抵抗もなく従順に首を下げた。

「この地において勇者の存在は絶対不可侵領域よ。それを理解し、  
尚且つ牙を剥いた獣。眷属と言えども赦せる所業ではないわ」

「何をする気なの!? やめてキャラちゃん!」

「勇者様に牙を剥いた罰と、私の命に背いた罰を」

見せ掛けだけではなく殺傷能力も十分に宿した剣は、躊躇なく獣を貫いた。

獣は右足に突き立てられた剣に堪えきれずに悲鳴を上げる。  
軟弱な存在に嘲笑が浮かび、少女の悲痛な叫びが響いた。

崩れ落ちる獣に対しさらに伽羅は剣を振り上げ、そのまま腹を突き

刺した。

二撃目も全く躊躇の欠片もない。

清々しいまでの早業に、落ちてた機嫌が上向きになる。

伽羅の技術は鬼神と呼ばれた男直伝だ。

迷いも躊躇いも欠片もない剣は、獣を瀕死に追いやった。

最早獣は叫ぶ力すら失くし、その体を横たえて痙攣し血を吐いている。

伽羅の一撃は内臓を傷つけたらしい。

あのまま置けば血が喉に詰まり窒息死か、それとも出血多量で失血死か。

どちらにせよ生き延びる可能性の方が低いに違いない。

瞳を潤ませ伽羅を見上げる獣は、ウルるうと弱々しい声を上げる。その姿を一瞥すると、興味を失ったとばかりにあっさりと獣に背を向けた。

「勇者様」

「.....」

「先ほどの無礼、どうぞこの程度でお許し頂けないでしょうか？」

「ッ・・・あんた、おかしいだろ！さっきはこの獣に謝れって言ったくせに、どうしてこいつを殺そうとするんだよ！？」

「勇者様に牙を剥いたからにございます。それは決して魔王様の本意にございません。お許しただけなのであれば、獣は処分いたしましょう。勿論、あれの主である私もそれなりの責め苦を負います」

「何でだよ！！あんた、さっきあれだけあの獣を庇ったろう！？俺を傷つけようとした獣を殺すんじゃなく、自分の体を盾にして守ったんだろっ！？どうしてそんなに簡単に殺すなんて言えるんだよ！



！」

「貴方様に無礼を働いたからです。勇者に向けて牙を剥いた瞬間から、この獣の末路は決まっております」

「・・・っ」

顔を歪ませた勇者は、信じられないとばかりに後ずさった。

信じていた何かを裏切られたとでも言いたげな表情に梅香の笑みは深くなる。

混乱した様子の勇者へ歩を進めると、ゆっくりと唇を開いた。

「どうする？勇者君。君が望むなら立会人を頼まれた僕が伽羅も処分しよう。そうしてこの城から追放し、君の目の届かない場所へ置こう。彼女の眷属が君に対してとった非礼は、主である彼女の責だ。我らの総意ではないとはいえ、君に対して獣が牙を剥いたのは事実。君の選択に委ねよう」

「・・・あんたは、伽羅は、それでいいのか？」

「勿論。そのために立会人として梅香を呼びました。これは魔王様の意思ではありません。それを証明するためなら、処分も喜んで受けましょう」

跪き頭を垂れた伽羅に向かい距離を縮める。

自分の手に慣れた武器である大刀を手にとると、いつでも攻撃できるように無造作に構えた。

笑顔で振り返れば勇者の顔は益々強張る。

「言っただろう、勇者君。この子は愚かで馬鹿なんだ。愚直なまで

に努力家で、真っ直ぐにしか進めない。唯一無二の相手のためなら、自分を愛する存在も躊躇なく切り捨てる。それが『伽羅』だ」

「・・・狂ってる」

「ははは、それは光栄。僕たちは君たちと種族が違うから価値観も違う。君は伽羅をどうしたい？流石に殺しはしないが、君の望みであればそれなりに考慮する」

「下種が」

「どうやら嫌われたみたいだな」

笑いながら大刀を振り上げれば、伽羅を斬り裂く前に静止の声が聞こえた。

十分手加減をしていたが、それでも勇者が止めなければ振り下ろすつもりだったそれに躊躇はない。

こちらを見上げる伽羅の瞳と一瞬だけ視線が絡み、ウィンクすると武器を消した。

「伽羅に対して処分は必要ないということか？」

「ああ。・・・その獣も助けてやってくれ」

「助ける、ね。困ったな、僕は癒しの力は持たないんだ」

「助ける必要はないわ。この程度でアースは死なない。余計なことはいらないで」

「何故!？」

「簡単だよ、勇者君。この獣を伽羅が助けようとするなら、僕が殺してしまうからさ」

「ッ!!!？」

耳元で囁けば、びっくりと体を震わせた勇者は目を見開いてこちらを

見た。

その表情にはありありとした恐怖が浮かんでおり、異質なものを見る目だった。

彼にしてみれば先ほどまで伽羅の横に居たはずの自分が、急に横に現れたように感じたのだろう。

別に力も何も使わず、単純に移動しただけだが、スピードに目がついてこれなかったらしい。

そこから計れる実力に、嘲りを鮮やかな笑みに隠す。

「言っただろ？ 僕は伽羅の仲間だ。そして、彼女の幼馴染でもある。長く付き合つと、情も沸くものだ」

「……………」

「僕はね、愚かで馬鹿でどうしようもなく悪魔らしくない彼女を、こう見えてそれなりに大事に思っているんだ。この僕が、『愛してる』と口に出るほど、十二分に特別に想ってる」

「『愛してる』と、口にするくせに、躊躇いなく斬れるのか」

「当然だ。僕の主は彼女じゃないし、何より伽羅自身がそれを望むからね。ああ、でも獣を殺したいのは僕個人の望みだ。獣の分際で伽羅を傷つけるなんて、死んで当然だと思わないか？」

「狂ってる」

「『人間』とは感情の表し方が違うだけだよ。伽羅は決して優しくない。自分を愛する存在ですら、当たり前前に殺してみせる。けれどあの獣に剣を向けたのは、伽羅なりの想いの返し方だ。誰だって自分を嫌っている相手より、愛した相手に殺されたいものだ。そして伽羅が処分した手前、僕もこれ以上手を出せない。獣の生命力が強ければ、彼はまだ伽羅のもので居られる。忌々しいが、伽羅

の言ったとおり獣は此処で死なないだろうな」

黙り込んだ勇者は、泣きそうに顔を歪めて獣を眺めた。  
どくどくと溢れる血を大地に吸わせながらも、獣の瞳が伽羅から逸  
らされる事はなかった。

**閑話【むかしむかしの魔法使い：後編】（前書き）**

残酷表現があります。ご注意ください。

## 閑話【むかしむかしの魔法使い：後編】

端的に言つて、その当時の私は力に驕っていたのだろう。

その氣になつて墮とせない存在はなく、どうすれば効率よく落ちるか、より力を磨くためにどうすればいいか、もしくはこれ以上高めなくとも誰にでも通用するのか、誰に試して良いか、誰に試していいかないか、その判断を誤った。

結論から言つと、アドニス是我の前に墮落した。

小悪魔では魂を掴みにくかろうと態々成体に戻ったのだが、その必要もなかったと感じるほどに呆気なく。

魔王の城に滞在する間アドニスは私の傍を離れようとせず、人間の国に帰る当日は狂つたように仲間を含め力を放った。

人にしておくには惜しいほどの力だと後に白檀様に言わせるほどの暴れっぷりだった。

自分を人間の国に連れ帰ろうとする勇者たち相手に暴れて暴れて暴れたところで、氣が緩んだ瞬間を白檀様により氣絶させられた。

氣を失つた瞬間に白檀様の力で私の記憶を捻じ伏せられ、その間に梅香により勇者たちは人間の国に強制転移させられた。

それは、白檀様が魔王と呼ばれて以来の、最大の不祥事だった。

「・・・私が、聖女？」

「どうやら、そうらしい。ほら、これ。勇者君の土産だが、どう見ても伽羅、君だろう？」

「・・・・・・・・」

反省と力の制御のためにそれから百年を費やし、気がつけばまた世界へ渡る周期になった

強固に反論を訴える梅香を白檀様が捻じ伏せ勇者を迎えて、愉快そうに顔を歪めた梅香からその情報をもたらされた。

苦虫を百匹噛み潰してもこんな嫌な気持ちにならないと思いつながら、土産とされた絵画を見る。

金色の波打つ髪に、碧の瞳。肌は抜けるように白く、ゆるく孤を描いた唇は赤く艶かしい。

身に纏う衣服はシンプルな黒のワンピース。髪にも同色のヴェールが被され、胸元には色取り取りの花を抱き僅かに顎が引かれていた。はにかみ目元を染めて笑うその顔は、確かに見覚えがある。

見覚えはあるが、そんな構図に覚えはない。

「何、これ？」

「だから『黒の聖女様』だ。前回君が堕とした魔法使いは深層心理に君を記憶していたみたいだな」

「・・・何ですって？私より遙かに強力な白檀様の力で押し伏せたのよ？ありえないわ」

「そう、本来ならありえない。だが実際に人間の世界で広まるこれを目にすれば、信じてないわけにいかないだろう？何とも凄まじい執念だな。彼の魂にはもう君の色が刷り込まれていたんだろう。君の記憶は消しても、刻まれた想いは消えなかった。彼はその後、君とよく似た色合いの嫁を貰って、画家になったそう。そうして描いた絵を教会などに無償で寄付し、気が付けば君は『聖女』様。どんな気持ちだい？」

「最悪よ」

「いいしつぺ返しだな、伽羅。あの人間は元々君に想いを寄せていた。表立っては抵抗していたが、心の内では伸ばされる腕を欲していた。魔族と拒絶しながらも、渴いた心は望んでいた。伽羅の力が効き過ぎたのもその所為だ。気付いているか？彼はな、抗うのではなく、その力を望んで魂奥まで引き込んだんだ」

吐き捨てるように告げれば、梅香は益々笑みを深めて告げた。

私が未だに前回の失敗を引き摺っているのを理解しての行動に、齒噛みするものの反論は出来ない。

違えようもない私の失敗は、梅香にとっても愉快なものではなかった。

彼にも迷惑を掛けているので、気分の逆なでをする気にもならない。笑顔の裏で勇者を忌み嫌う梅香が、態々情報を得てきてくれたのだ。捻くれ曲がっているが、これも一応気遣いの一端なのだろう。

しかしながらこれ以上彼の嫌味を交えた報告を聞くのは嫌で、踵を返そうとしたが肩を掴んで引き止められた。

「何？」

「面白いものを見つけた。君もおいで」

「・・・・・・・・」

ここで嫌だと言うのはとても簡単だが、そうすればいつまでも付きまとわれるだろう。

時間を無駄にするよりも一度で終わらせた方がましかと息を吐いて付き従う。

羽を出した梅香に驚きながら、促されるままに羽を出すと、彼は窓



から外に出た。

普段の梅香なら律儀に玄関を利用するのに、珍しいこともあるものだ。

目的地はどうやら城の敷地の外らしく、どこを目指しているのか判らないままに後をつける。

梅香の飛ぶ方向に何かあった記憶はないが、彼が案内するのだから何かがあるのだろう。

空を飛ぶのは陸を歩くより遙かに楽な交通手段だ。

暫く空を飛んでいると、森の一部に空けた場所を見つけた。

以前来たときにはなかった空間に眉根を寄せると、私の疑問に気付いたように空を飛んだまま梅香が振り向いた。

「ここだよ」

「何、ここは」

「僕が見つけた面白い場所。気付かないか？この気配。意識を研ぎ澄ますと気付く微かな気配」

「・・・・・・」

「覚えているだろう、伽羅。君が忘れるはずがない。君の最大の醜態で、汚点である存在を」

息を呑み、視線を下へ向ける。

意識を研ぎ澄ませれば、確かに覚えのある気配があった。

まさか、と瞳を丸くする私に笑顔を向ける梅香は、見てご覧とある箇所を指差す。

そこには成体になった私が両手を広げた程度の範囲で、赤い何かを広がっていた。

「花？まさか、この地に？」

「そう、そのまさかだ。陽も射さないこの場所で、何かを核にして花が咲いてる。さあ、見ておいで。そこに君の行動の結果がある」

促されるままに地面に向かうと、梅香の気配が瞬時に消えた。

顔を上げればそこに彼の姿はもうなく、態々私を一人にしたのだと気付く。

その行動に違和感を覚えながら花に近づくと、そこで見たものに目を丸くした。

「・・・これは」

確かに覚えている気配。

空からでは僅かにしか感じ取れなかったが、手が届く距離になれば流石に気付く。

当時の強大なものとは比べ物にならない、残滓と表現した方がいいだろう力の名残。

これは、この力の持ち主は。

「アドニス。アドニス・ファン・デル・サール」

見る影もないほどに腐り果てていたが、間違えるはずもない。

美しい容姿も頑強な体軀も燃えるような髪も澄んだ瞳もそこにな

が、力の名残ではつきり判った。

百年前の面影すらない形で、彼はそこに存在していた。それもそうだろう。

私達の世界で百年前でも時間の経過が違ふこちらでは大体四百年は昔だ。

それなのにまだ残骸が残っている方が余程可笑しいのだが、この力の名残を感じると遺体が腐るまで時間が掛かったのだと気付いた。

「・・・何故、貴方はここに居るの？」

物言わぬ骸に問いかける。

先ほど梅香に聞いたばかりだ。

彼は国に帰った後画家として暮らしたと。

国で嫁を貰い、過ごしたと。

それなら何故、この地に彼の遺体がある。

どうして彼の力の名残が此処にある。

訳がわからず緩く首を振ると、どこからか獣の鳴き声が聞こえた。

瞬時に武器である剣を出すと、片手に持ち周りを見渡す。

すると森の中から現れた巨体が距離を空けて留まった。

その獣はこの場に咲く花と同じ緋色の毛並みをしていた。

瞳の色は鮮やかな若草色で、立ち上がれば成体の私よりも大きいだろう。

狼に似た姿をしているが、この地にそんな獣は居ない。

魔物の一種だが、何度か来たこの世界で、目の前の魔物のは見たことがなかった。

見たことはないが、私は彼が『何者』が良く知っている。  
そして、この魔物がなんと呼ばれるかも。

「ルー・ガル。・・・この地に呪いを掛け、尚且つ獣に身をやつ  
したのね」

「うるうるう」

甘く喉を震わせた『アドニス』に、私はずっと目を細める。  
梅香が見せたかったものが何か私は漸く気付いた。

「人語も操れなくなったの？」

「ぐるう、ううおーん！」

遠吠えをし、ふさりと尻尾を振った『アドニス』は、私を見つめ嬉  
しげに目を細める。

これが私が魂を掴んだ魔法使いの末路だった。

忠誠を誓つように頭を下げる獣は、知性を感じさせる瞳で私を見る。  
彼は私を忘れたはずだった。  
だが実際は忘れていなかった。  
どうやっていつこの地に来たのか知らないが、己の体を媒体に呪い  
を発動し、この地に赤い花を咲かせた。

この花がこれだけ群生するのに、少なくとも数百年単位で時間が掛  
かったのだ。

己の骸の傍で、彼は、『アドニス』と嘗て呼ばれていた男は、一人

で私を待っていた。  
あれほど厭んでいた魔物に身をやつしてまで、彼は永き時間を過ごしていたのだ。

『人間』が魔に染まる方法はそれほど多くない。  
彼は己の魂を喰らわせた獣の体に乗っ取ったのだろう。

それだけ強く意識を持ちながら、それでも『人間』の虚弱な魂ゆえに中途半端な魔物になった。

この様子だと人型にもなれないに違いない。

そうでなければ、私を目にした瞬間に、人の姿になっているだろうから。

「貴方、馬鹿ね」

「うおーン！」

呆れを含んだ声なのに、嬉しくてたまらないとばかりに獣は幾度も尻尾を振った。

会えて嬉しいと、幸せだと、言葉に出来ないからこそ体を使って訴える。

魔物であるくせに力の使い方すら理解してないので、意思の疎通すら出来ないらしい。

一つ、ため息を吐き出す。

これが私の行動の結果。

「私は生涯貴方を愛さないわ。この先白檀様の邪魔になるようなら容赦なく殺すし、時には利用すると思うわ。楽な死に方も出来ない

でしょうし、楽な生き方も出来ないわ。全てを捨てなければいけないし、簡単に死ねなくなるわ」

「ぐるう」

「それでも構わないというなら、それでもまだ望むなら　貴方、私と共に来る？」

問い掛ければ、『アドニス』は嬉しげに遠吠えした。

暗い闇に包まれた森のどこまでもその声は浪々と響いていく。

後に力の使い方を教え、彼がどうやってこの地に足を踏み入れたか、人間としてどんな生活を送っていたか、どうやって花を咲かせたか、どうやって魔物を喰らったかを知る事になるが、それはとても些細なことだ。

居場所も力も姿も捨てたその獣は、新たな名を得て今でも私の傍にいる。

### 三日目【5】

庭が一望できるバルコニーの手摺りに座り、階下で蹲る物体に目を留める。

緋色の毛皮を更に別の赤で彩った獣の周りには私が作った結界が張ってあった。

あの獣は半端ものだが一応魔に属する生き物だ。

人間に与える影響を考えれば念を入れておくに損はない。

一人で風に吹かれながら、少しだけ得た平穩に息を吐く。

勇者の面倒を見るように白檀様から仰せつかっているが、勇者本人から『こちらから声をかけるまでは一人にして欲しい』と望まれた。彼の目の前でアースを断罪して見せたのが余程堪えたらしい。

梅香が傍で囁いていたから何か意地の悪いことでも言われたのかもしれない。

一見穏やかな好青年に見えるが、彼の性格は穏やかとは無縁の場所にある。

人間との価値観の相異を理解しながら踏み躪る幼馴染の性格はとても天晴れなものだ。

今までの勇者なら真っ向から対立できていたが、精神年齢が低い子供のような彼では些か荷が重かるう。

だからと言って全く助け舟を出す気はないので泣きつかれても一笑に付して終わりだが。

風に乗って鉄錆び臭い香りがこの場まで臭う。

どうやら庭先で立ち上がろうとアースが足掻いているらしく、体が動くたびに新たな血が溢れて地面を汚しているようだった。

臭いまで遮断していなかったが、これも閉じ込めるべきかもしれない。

い。

力を使おうと指先を持ち上げると、不意に背後から声が掛かった。

「っ、何する気だ!？」

咎めるような強さを持った問いかけに、首だけ動かし後ろを振り向く。

先ほどから人の背後をうるちよろしていたが漸く声を掛ける気になつたらしい。

緩やかな結界で彼以外の人間は拒絶していたので、行儀悪い格好を客人に見られる心配もない。

本来なら勇者である彼に一番見られるとまずいのだが、本人が素のままで居ると言ったのだから構わないだろう。

やや青褪めた顔でにじり寄る勇者      フレドリックの姿に目を細めれば、くつと息を呑みその場で足を止めた。

別に威嚇したわけでもないが、アースに対する容赦ない対応を思い出したのだろう。

拳は白くなるまで握られ、体は僅かに震えている。

無理してまで声を掛けなくともいいのに、と思いながら私は新たに外部との遮断をするための結界をバルコニーに張りなおす。

朝の様子だと今回も菊花と梅香の監視の目がついているに違いない。毎回小言を言われるのは御免だし、フレドリックとの遣り取りを見られたいとも思えなかった。

手摺りに座ったまま動かない私に意を決したのか、今度は大股で近づいてくる。

バルコニーの手摺りから脚を投げ出したまま動かずにいると、手が



届きそうな距離で漸く足を止めた。

「あれ以上やる気か？」

「・・・貴方がお望みならば」

「望んではない！だから、頼むからもう止めてくれ」

別にアースに対して攻撃態勢でいた訳じゃないのだが、何を勘違いしたのか唇を振るえてフレドリックは訴えた。

自分に牙を剥こうとした獣でも、殺されるのは忍びないらしい。

ならば始めから余計なことをしなければいいのと思うが、それも無理な話かと否定する。

知識だけ無駄に偏って持っている彼は、見た目よりも好奇心旺盛のようだから。

「あいつ、あのままじゃ死ぬんじゃないのか？梅香は、俺のためにあんたがやったって言ってた。俺があんたの手を血に染めたのか？」

「・・・」

一つため息を吐き、視線をフレドリックから逸らす。

何を面倒な展開に持っていつているのだろうか。

勇者嫌いの幼馴染の凶行にうんざりしながら、落ち込むように顔を俯かせるフレドリックに視線をやる。

何故ここまで勘違いできるのか。

どうして私が本心から彼のために動くと思うのか。

確かに私はフレドリックに牙を剥いた罪も含めてアースに剣を向け

た。

しかしその心に勇者への気遣いは欠片も持ち合わせていない。私はあくまで『白檀様の意思ではないのを証明するため』に動いたに過ぎない。

この地で勇者に手を上げるのは、基本的には禁止されている。

赦されるのは自衛のみ。やられてから初めてやり返す権利を得る。

そうでなければあまりに実力差が激しすぎ、彼が勇者としての権利を執行する前に世界は終わるだろう。

アース如きの半端ものですら人間を殺すには十分の戦力だ。

もしアースが牙を剥いたあの場で、自分の体が先に割り込めないと判断していたら、私はその場でアースを粛清していた。

そしてその上で自分の処分を迫ったに違いない。

アースがしでかした行為は勇者が無傷だからこそあの程度で済んだが、それでも白檀様の無実の証明は必須だった。

この世界を平定する役目を持つもう一つの種族、『天使族』に知らしめるために。

現在のこの世界は魔が支配する世界だ。

しかし私達が消えればこの地は天使へと権利が委譲する。

香には教えなかったが、正確に言えばこの世界に『王』はもう一人存在するのだ。

そしてこの世界の理は、彼女に説明したよりももう少しだけ入り組んでいる。

魔王である白檀様に対し『勇者』が存在するように、対になる存在の彼にも『愛し子』と呼ばれ神殿で住まう執行者がいる。

役割は勇者と変わらないのに対応が変わるのは、人間が魔族に対してどんな感情を抱いているか判り易く表していた。

もつとも、『勇者』と『愛し子』が同じ役割を担う存在と知るものはほとんど居ない。

この地に派遣される魔族と天使族くらいのものだろう。

どうせ同時に存在することもないのだから、知る必要もない事実だ。

ここで重要なのは、この両者が不可侵であるという部分。

もし魔族、もしくは天使族の一員が『勇者』、または『愛し子』に安易な理由で手を上げれば、その瞬間に敵対する種族の手出しが許される。

そうすることとはかなり厄介になり、場合によってはこの地を平定する『天使族』の貴族の相手をせねばならない。

それこそが私が一番恐れる事態だ。

だがそんなこちらの事情を目の前の男が知るはずもなく、ただ自分のために私が手を汚したのかと問うてくる。

必死な眼差しをこちらに向けて、真実なのか問うてくる。

全くもって面倒な展開だ。

もう一度深く息を吐き出し、億劫な気持ちを堪えながら彼の問いから僅かに外れた答えを告げた。

「言っただけよ。アースはあの程度では死なないわ」

「・・・だが、体は痙攣し血は止まらない。シエリルが治療で回復させようとしたが、近寄るなとばかりに威嚇された。手負いの状態であってもあいつは俺たちより強い。どうすればいいか判らない内に結界が成形され、近寄ることすら出来なくなった。その癖見せしめとばかりにもがく様を晒し、憐れでならない」

「あれは自業自得よ。アースもこの地で勇者に牙を向ける重さを理解しているわ。だから万が一の場合も悔いが残らぬように花畑に一人が残ったのよ。あの地は想いの因よすがに溢れているもの」

「想いの因<sup>よすが</sup>？」

「・・・どちらにせよ、貴方には関係ないことだわ」

一言で切り捨てると、傷ついたように顔を歪めたフレドリックは、私から一歩距離を置いた。

怯えが体から伝わってくる。

恐怖を隠せもしないくせに、それでも彼はまだ離れない。

「・・・どうして」

「何？」

「どうして、あいつが死なないと断言できるんだ？」

ぼつり、と呟かれた言葉に、私はアースを瞳に映す。

何度かもがいた末にどうにか顔を上げた獣は、相変わらず私だけを一心に見詰めていた。

何故あの体で動き回るのかと思ったが、どうやら私の気配に気付いていたらしい。

結界に遮られながらも私の位置を探れたというなら、少しは力が強くなったのだろうか。

若草色の瞳を見詰めてやれば、ゆっくりとまた尻尾を振った。

一回、二回、と無駄に体力を使つてまで、私の意志を引き寄せようと必死に尻尾を揺らしている。

彼の瞳には隣の勇者など映っていない。

先ほどの怒りの片鱗も見えず、最早彼に興味すら抱いていないのだろつ。

いつもどおりに、私だけを見詰めて、少しでも長く傍に置いてと、言葉ではなく態度で示す。

瞬きせずにその光景を眺めながら、緋色の花を空から取り出した。一輪だけの小さな花。

それは野に咲く雑草で、華やかさの欠片もない。

突然現れた花に目を見開いたフレドリックは、けれど今度はそれに触れようとしなかった。

「断言くらい出来るわ」

「何故だ」

「断言できるくらいに、彼の執着の強さを理解しているのよ」

弄んでいた花をドレスの胸元に差し込む。

一輪だけなのに存在を主張するように香る花は、そんなに嫌いではなかった。

### 三日目【6】

胸元につけた花を指先で弄っていると、不意にフレドリックが顔を上げた。

先ほどから黙ってアースを観察していたのだが、また何か突拍子でもないことを思いついたのだろうか。

人間の考えは本当に判らない。

博愛を謳う天使のようなものもいれば、ただ一人を恋い慕う悪魔のようなものもある。かと思えば愛していない相手とでも結婚し、さらに子供までなすものもあるし不思議で面妖でならない。

人間といえば屋敷にハークとアークを置きっぱなしにしているが、黒方と香は大丈夫だろうか。

一行の世話を香に頼もうとしていたのに、結局あの二人の面倒を任せてしまったために梅香に借りが出来てしまった。

むしろこの世界に来るたびに借りが増えている気がしてとても気が重い。

向こうの世界に戻った時にまた色々と借りを返せと迫られるかと思うと、今からうんざりしてしまう。

顔を俯け重々しいため息を吐くと、意を決したようにフレドリックが口を開いた。

「おい」

「・・・何？」

「あのさ、もし、俺が望んだら、お前はあいつを助けるか？」

「・・・まだ言ってたの？」

「だってさ、目の前でもがいてたら誰だって気になるだろ。それに

お前だって今、辛そうな顔してたため息吐いてたし・・・やっぱ、自分の眷属が死に掛けてたら、きついよな」

「・・・・・・・・」

別にアースが死に掛けているから重々しいため息を吐いたわけじゃない。

それに先ほどから何度も言っているが、彼は絶対に死なない。

あの程度で死ぬような執着であれば、もっと早く昇天しているだろう。

信用も信頼もしていないが、眷属にした程度はその執念を認めている。

だから傍に置いているのだ。

だがそんな私達の関係など知る由もないフレドリックは、何かを納得したように頷くとこちらを笑顔で振り返った。

立ち直りの速さは歴代勇者に引けを取らないかもしれない。

全く面倒な部分だけ受け継いでいるものだともう一度ため息を吐き出すと、大丈夫だ、と頷いた。

「梅香は、伽羅があいつを助けようとしたら殺すといった。けど、逆に言えばあんた以外なら手を出しても放っておくってことだよな？」

「それで？」

「俺、知ってるんだ。あんたはこの城の中に不可侵領域を有してるって」

「・・・それは」

「『手記』に書いてあった。あんたの部屋から通じる異空間。常夜の魔の世界にあって、唯一太陽が射す穏やかで優しい場所」

彼が何を言いたいか判ると、私は思い切り眉根を寄せる。

だがこんなにもあからさまに迷惑だと訴えているのに、彼は全く気付かない。

図太い。フレドリックはもしかすると梅香並に図太いかもしれない。

「歴代の勇者はこぞって『手記』に記している  
通称、『伽羅の屋敷』」

拾い物が抜けてる。だが訂正する気力もない。大部分は間違っていないので、別に構わない。

しかし何故勇者は態々『手記』に私の『拾い物屋敷』を記録しているのか。

考え、その原因にすぐに思い至る。

思えばあの空間は勇者にとって知らぬ力で作られた珍しいものだと言っていた。

興味深く、そこに住む生き物にも関心があると。

毎度対面することに足を運んでいたが、確かにあれは魔王である白檀様の城にある別空間。

ならあの花畑と違い、『手記』に残されていても不思議じゃないかもしれない。

「側近も魔王ですら手を入れない、そこはあんたの絶対領域だ」

「そこに連れて行ったとしても、私はアースの助命には関与しないわよ」

「・・・それでも、少なくともあんな姿をここで晒させるよりマシ



だろう？あんだ以外の誰かが手を施すかもしれない」

それはない。

あそこに居るのは私が許可を与えた数人と、あとは文字通りの『拾い物』だけ。

私があその主な以上、私に逆らってまで意思を押し通す輩は居ない。

そう説明しようとし、きらきらしい目で見ているフレドリックに面倒になった。

あれこれ言うより、行動した方が早い。

香に伝心を繋げ状況を伝えたと、真っ直ぐに勇者を見据えた。

「判ったわ。でもそれ以上口出しは無用よ。貴方の一言で彼の生殺与奪が決まると覚えておいて」

「・・・っ」

「それとあの場に貴方は連れて行かないわ。貴方も言うとおりにあそこは私の領域。貴方が足を踏み入れる場所ではないわ」

「だが他の勇者達は」

「関係ないわ。それを飲まないなら、アースはあのままよ」

何処に居たって回復力は関係ないだろうが、あそこから離れれば彼の気が治まるなら易いものだ。

確かに人間の目から見れば血塗れの獣は耐え難いかもしれない。

あれこれ言われる原因を退かせば少しは大人しくなってくれるだろう。

何処に居ても傷つき苦しんでいるならば、私の姿があるこの場所の方が、アースは幸せであつたろうに。

目に見えなくなつたとしても何も状況は変わらない。それを、フレドリックは理解しない。

渋々ながらに頷いたのを確認すると、指先を振り力を使う。倒れたまま目を丸くしたアースが、信じられないとばかりに私を見上げた。

「暫く向こうに行つていなさい。香たちには伝えておいたわ」

血を吐きながら震えるアースは、鳴き声か呻き声か判断しかねる声を漏らした。

瞬きする間に姿は消え、ついでに庭先の血も処分する。

隣で吐息を漏らしたフレドリックは、安堵したように頬を緩めていた。

## 三日月【7】（前書き）

35話目更新です。読んでくださる皆様、本当にありがとうございます！

### 三日目【7】

アースを送った後、私はそのまま勇者と昼食へと向かった。

血塗れのアースを見て顔を青褪めさせていた割りに彼の立ち直りは早かった。

性格的なものかそれとも経験値によるものか。判断し難いがとりあえず置いておく。

長い廊下を歩きながら、取り留めなく話し続けるフレドリックの言葉が右から左に流しつつ窓から外の景色を眺めた。

小悪魔の身長で辛うじて外が窺える高さの窓から見える景色は相変わらず薄暗い。

所々で雷が煌いているのが見えるので、白檀様は起床されたのだろう。

そう言えば今日は挨拶のキスをまだしていない。

先ほどは眠そうだったから遠慮してしまったが、次に顔を合わせた時にはさせていたどころ。

咄嗟にぬいぐるみを転移させたが、腕の中の存在が入れ替わっていたら不機嫌に違いない。

拗ねたように眉を寄せるお方をどう宥めようか。考えるだけで心が躍る。

「なあ、伽羅」

「何？」

「アースはさ、死なないんだよな？」

「・・・ええ、死なないわ」

いい加減しつこい問いかけに、僅かに苛立つ。

何度も何度も繰り返したはずだ、あの獣は死なないと。

私への執着心こそが生への執着心。生半可なものでは彼の心を折ることは出来ない。

白檀様のことを考えていたのに水を差され窓の外から視線を戻すと、人間にしては美形と称されるだろう顔を情けなく歪めたフレドリックがこちらを見ていた。

態々目の前からアースを消し、心に翳を落とす存在を見えなくしてあげたのに、まだ何か気になるのだろうか。

ひっそりと眉根を寄せると、慌てたように口を開いた。

「いや、疑ってるわけじゃないんだ」

「なら、何？まだ何か気になるの？そんなに気になるなら殺してきましようか？」

「だからそれは止めるって言っているだろう！そうじゃなくあいつが死なないのは判ったけど、あいつが五体満足で癒えなかったら、やっぱり殺すか捨てるかするのか？」

一瞬、問われた意味が判らなかった。

表情を消し瞬きを繰り返す。

今、彼は何を言ったのだろうか。

アースが五体満足で癒えなかった場合、私が彼を殺すと言ったのか。捨てるか、そう言ったのか。

「貴方、何を言っているの？」

「あんたの行動見てたらさ、不安になったんだ。あんたの中であいつの命の価値って凄く軽いだろ？」

「それで？」

「五体満足の状態でもあそこまで軽んじているんだ。なら一部が欠損したら」

「したら何？私が、私のものを捨てると？そう問うているの？」

「・・・ああ。前足が無くなれば機動力は落ちる。弱くなるだろう？見た目だつて、・・・」

確認するために聞けば、彼は渋々頷いた。

不貞腐れた子供のような表情だが、白檀様の拗ねた顔に比べると格段と可愛らしさが落ちる。

やはり所詮は勇者だ。子供であつてもこちらの神経を逆撫でにする能力は大したものだ。

しかし怒りは沸かない。この程度の輩に怒りを沸かせるのも面倒だ。

フレドリックの目を見て、ゆっくりと口角を持ち上げる。

嘲りを瞳に含ませ、それでも笑顔と呼ばれる表情を作る。

立場も価値観も違う。そして理解も求めていない。

「たかだか足が一本？げたところで、アースを手放したりしないわ。あれは私の眷属よ。私のために生き、そして死に絶える生き物。足が無くなるうと、首がなくなるうと、何を失ったとしても、生きている限り傍に置くわ。アースは何を失つても私の傍を離れない。目が見えなくなつても、耳が聞こえなくなつても、鼻が使えなくなつても、動く手足が無くなつても、あれは私を探し求め続けるわ。それが眷属というもののよ」

「・・・あんた」

「それに、足一本無くなるうが、腹に穴が開いたままだろうがアースは弱いはずが無いわ。事実あの状態でも貴方達は近寄ることすら

出来なかったでしょう？たかが足一本、たかが腹に風穴が開いた。それだけで強弱が決まるものではないわ。腕が無くとも足が無くとも、強者は強者よ。同様に五体満足であつたとしても弱い者は弱い。強さの基準はね、体の欠損とは関係ないわ」

そんな程度を教えねば理解出来ないのだろうか。私は先ほど自分から進んでアースを手にした。後悔してないし当然だと思っている。

迷いも躊躇も欠片も無かつた。これで死ぬならそれまでだとも思っている。

だが、だからと言って、アースへの侮辱を受ける気はない。あれはただの獣ではなく、私の眷属なのだから。

「見た目が何？部位が欠けたら何かあるの？例え欠けて現在の強さが維持出来なくとも、別の手段を探して這い上がるわ。魂も心も強さも忠誠も変わらないのに、私が彼を捨てる理由は何？」

「それは、」

「貴方が言うように私にとってアースの命の価値は軽いわ。それに関して否定する気も反論する気もない。けれど何も意味のないところで命を奪おうと思つてないわ」

元は人間だつたあの獣、私の理解する範疇外に存在するアースを、それでも根っから否定する気はない。

人であつた人生も、結婚した伴侶も、生まれた子供も、華やかな生活も、何もかも捨てて来た獣。

人間の国で魔術が魔法と呼ばれていた頃に、人間の割には天才的な才能があつた魔法も、優れた力を持つ格闘術も本来は彼の好むところ

ろではなかった。

端正な顔立ちながらも常に仏頂面だった彼は見た目より芸術肌で、絵画を描き、楽器を奏で、歌を歌うのが好きだった。

不条理に私に墮とされた後、私に向かって日夜楽器を奏でていた。緩やかに微笑み、今が一番幸せと笑っていた、どうしようもなく愚かな男。

今の彼は筆を取る手が無い。楽器を奏でる腕もない。甘く響いた声もない。

好んでいた何もかもを捨てて、愛していたか知らない家族を捨てて、永遠を誓った妻を捨てて、彼はこの地に存在する。

「これが最後よ、勇者様。理解しろとは言わないわ。でも、いい加減納得なさい。アースは絶対死なないわ。そして、何処が欠けてもアースがアースである限り、あれは私の眷属よ」

結婚し永遠を誓った相手を捨てる精神は理解できない。

それでもその執念は私にも理解できる強さで、だからこそそれだけは否定する気はない。

あの獣は私にとって特別な相手ではないが、私への想いこそが彼の誇りだと知っている。

それを誰にも否定させる気はない。

咬んで含むように伝えれば、戸惑いも露にフレドリックは頷いた。きっと彼にしてみれば矛盾だらけの言葉の中で混乱の渦にあるのだろう。

だが私は言った。『理解はしなくていい』と。



「　　昼食は皆様とご一緒なさいますが、勇者様？」

「・・・フレドリックと呼べと言っている」

いい加減無益な会話を終わりにしたく、態々丁寧に問いかければ、あつさりと勇者は乗ってきた。

むすり、と唇を尖らせた訴えは、やはり白檀様の百万分の一も可愛らしさが無かった。

### 三日目【8】

「昼食は仲間ととる」

不機嫌そうな顔で言ったフレドリックに頷くと、何故か彼は眉間の皺を増やした。

今度は何だと観察すれば、そっぽを向いて短く刈られた髪に手を差し込んでがりがりと掻きだす。

さらに無言で観察を続けると、ため息を漏らした彼はまたこちらに視線を戻した。

「異論は、ないのか？」

「ないわ。基本的に貴方のやりたいことは妨げる気はないもの」

「その割りには伽羅の屋敷には踏み込むと言われたが？」

「当たり前よ。あそこは私の領域。貴方が足を踏み入れる必要はないでしょう。それより、昼食には私も同伴した方がいいのかしら？」

「当然だ。・・・何だ？自分だけ別の場所で昼を取るつもりだったのか？」

「そうね」

「何でだ？」

初めの頃より大分崩れた調子で声を掛ける勇者の本心が何処にあるか、見定めようとこちらを見詰める蒼い瞳をじつと見返す。

僅かに目元を染めた彼の発言にはどうやら言葉以上の意味がないらしく、彼の仲間になんて同情した。

彼は忘れていたようだが、私は先ほど勇者一行の前でアースを処断したのだ。

切れ味がいい剣を体に突き刺し、浴びるほどの血を流させた。

地面で悶える獣の姿は彼らの目に焼きついてるだろうし、何よりその行動をとった私への恐怖も見て取れた。

誰もが自分ほど切り替えが早くないと気づかないのは見た目以上に性格が大雑把だからだろう。

眉間に皺を寄せて渋い顔をしていた初日の雰囲気では、一々細かいことに気がつきそうに見えたが、この半日ばかりでそんな印象は崩れ去っている。

彼がいくつかわからないが、外見だけが成長した子供、というのが私の結論だ。

子供は自分を中心に物事を考える。

良くも悪くも興味があること以外に関心が薄く、彼の好奇心は今専ら私に傾いているようだった。

だから仲間とは言え、彼らの些細な表情や栗立った恐怖にも気づかなかった。

否、気付いていても自分の欲求を優先させるために無視をした、が正しいかもしれない。

「・・・一応言っておくけれど、私が同席するのに貴方の仲間はいい顔はしないわ」

「どうして？」

「私が自分たちと違う生き物だと意識したからよ」

少しはその首の上に乗せているものを働かせてみてはどうかと思いつつも、瞳を細めて教えてやる。

人間は 否、人間だけに言えるものでもないが、自分と違うものに拒否感を覚えるものだ。  
それは常識が合わなかったり、好悪が違ったり、見た目が異質だからと色々理由があるだろうが、今回の場合は、『一見すると幼い子供が、自分たちよりも数十倍は強い獣を迷いなく串刺しにした』部分にあるだろう。

私たちの見た目は基本的にそれほど人間と変わらない。比べれば彼らよりもやや耳が尖り、羽があるところくらいしか外見的な違いはないだろう。

しかし耳は髪で隠せるし、羽は必要時以外は基本的に仕舞っている。そうすると私の姿など人間からすれば『単なる子供』にしか見えず、自分たちよりも弱い存在だと先入観で決め付けやすい。だが実際は違う。

彼らが視覚的情報でどんな判断を下したか大体判るが、実際には彼らより遥かに年を経ているし、自分よりも強いと認識したであろうアースよりも私の方が遥かに強い。  
見た目で侮った彼らは、自分たちとは明らかに『異質』であると理解し、そうして恐怖しているのだ。

「それは初めから知ってる。あんたは『悪魔』で『魔王の側近』だ」  
「知識と理解は別物よ」

首を振り否定すれば、ぐうっと喉を鳴らして黙り込んだ。

さすがに幾度も似たようなことを言われれば少しは学習するらしい。

勇者の仲間である彼らは気づいてしまった。

人間である己とそれほど差異が認められない、その上子供に見える

相手が、自分たちを殺す力を十分に持っているのだと。

アースの処断をした私の行動を見て、私が躊躇いなく剣を振るえる存在だと、自分たちを殺せると気づいてしまった。

聊か認識が遅すぎるのではないかと思うが、彼らの出身国はここ数百年と戦乱から遠ざかっている。

平和ボケしていても仕方ないのかもしれない。

私たちからしてみれば重要なのは『勇者』だけだ。

一行の面々は居ても居なくてもいい、言わばどうでもいい存在。

何故毎回ついてくるのかと言えば、代々の勇者を輩出する国の王が回りの国への牽制を兼ねて諸国から仲間を募るらしい。

私たちからすれば人間の価値などないに等しいのに、彼らの権勢に遠まわしに助力していると考えると嫌な気分になるが、白檀様が受け入れるので一応のもてなしはする。

だが彼らの意識が変わったのなら、これからの対応は多少は変化するだろう。

何しろ彼らは認識の中にある『魔物』のよりも、更に上位にいる『悪魔』に囲まれて生活せねばならないのだ。

残りの日数ではいつ殺されるかと恐怖と戦う羽目になる。

ここ二日ばかりは勇者は一人部屋で過ごしていたが、そうするとフレドリックのベッドも彼らの部屋へ運んでおいた方がいいかもしれない。

何しろ彼らの中で『魔王』に対抗する力を持つのは勇者だけで、彼らも嫌と言うほどそれを理解しているだろうから、きっと極力勇者と離れたがらないだろう。

そこをどうするかは梅香の腕の見せ所だ。

彼のことだからそつなくフレドリックと一行に距離を取らせる術を用意するだろう。

「ともかく、貴方は仲間のところに行くといいわ」

「・・・伽羅も行くぞ」

「私の言葉を聞いていた？」

「聞いたが納得できない。それに、あんたは俺の世話係を言い渡されてただろう？俺から離れるのは変だ」

「変・・・」

「そうだ。だから、あんたも一緒に昼をとる。行くぞ」

「・・・・・・・・」

あくまで我を通すつもりらしいフレドリックを目を眇めて眺める。確かに白檀様から申し付けられた内容なので異論はない。異論はないが、面倒だ。

恐怖に強張る顔で窺われつつ食事を取るのは不快だし、その様子を楽しそうに観察する梅香の前に行くのも気が進まない。

言いたいことを言って満足したのか、背中を向けて歩き出したフレドリックに呆れてしまう。

私が背後から襲い掛かるとか微塵も考えていないのか、それとも警戒心の欠片も持たぬ生物としての本能が欠落しているのか。

これを信頼の証としているつもりなら、先ほどまでの会話の答えとしているなら馬鹿以外の何者でもないだろう。

『失礼だな、伽羅。僕がいつ君を面白半分で観察したと言っただ？』

『説明しなくとも判ってるでしょう？いつから聞いてたの？』

『君が昼食をどうするか尋ねるところからだ。誰かさんが態々結果を強化してくれたおかげで、アースを移動させたことは判っても理由まで判らない』

『そう。それは上々ね。怪我が癒えるまであればここには戻さないわ。使いたかった？』

『いいや。僕は別に君の獣に頼らなくてはいけないほど落ちぶれてないからね。ああ、だが少し君の協力は欲しい』

うんざりしている時に、さらにうんざりさせるような伝心に、それでも『是』と返事をする。

幼馴染としては色々思う部分があるが、魔王側近としての梅香は信頼が置ける相手だ。

生まれながらに白檀様に仕えることが約束されていた彼は、私を利用してでも白檀様に尽くす。

その彼の判断に異論があろうはずがない。

『では、勇者君と一緒に昨日と同じ部屋へ来てくれ。先ほどの伝言、香へきちゃんと伝えるように』

『判ったわ』

指示通りに香に伝心を繋ぎ、梅香からの伝言をそのまま伝える。

僅かに憤る彼女を宥めるといつの間にか勇者がこちらを振り返りじつと見詰めていた。

「何？」

「・・・その、遅いからだな、手を」

「馬鹿？」

続く言葉を想像し即座に切り捨てる。

初日に年を考えると仲間に苦言していたはずの今代の勇者が幼女趣味とは知らなかった。

それとも一応私のことを知っているなら、幼女趣味とは言い難いのだろうか。

どちらにせよ私は不必要な場面で人間に触れる趣味はないので、冷め切った眼差しで睥睨して話しは終わった。



### 三日目【9】

昼食を取るために合流した部屋の居心地は、予想通りに悪いものだった。

食事を口に入れるたびに視線が集まり、顔を上げればあからさまに逸らされる。

彼らに手出しをする気は今のところ全くないのだが、こつもあからさまだと流石に鬱陶しい。

梅香の話題には相槌を打つ勇者一行と、それとは逆に私に話しかけ続ける勇者。

席順の所為かもしれないが、きつぱりと分かれた境界線は判り易すぎるだけに下手に手を打てない。

私から声を掛けても萎縮するだけだろうし、逆に梅香がフレドリックに声を掛けても同じだろう。

隣でぺらぺら喋る勇者に適当に相槌を打っていると、漸く香からの伝心が入った。

『お姉さま、こちらの準備は整いました』

『そう、ありがとう』

『そんなお礼なんて恐縮です！むしろ遅くなったのを謝らなければならぬくらいなのにな』

『いいえ、十分よ。梅香、聞いてるわよね』

『勿論。少し時間が掛かったが、十分許容の範囲内だよ香。ありがとう』

『梅香様からの礼など望んでません。あたしはお姉さまのためにのみ動いてます』

『本当に僕は嫌われてるな。僕は君が嫌いではないのに片想いか』

『気持ち悪いです。気色悪いです。冗談でも止めてください、虫唾が走ります』

『ある意味君には感心する。この僕に向かってそこまで堂々と言い返せるのだから』

『あたしが恐れるのはお姉さまに拒絶されることだけです。それ以外の何を恐れると言うのですか』

『そうだな。極めて悪魔らしい思考だ』

『当然です。私も悪魔の端くれですからね』

香の答えに笑った梅香に、人間達の視線が集中した。

彼らには私達の会話は聞こえないし気取られもしないので、唐突な行為に驚いたのかもしれない。

自分に視線が向いたのを丁度良いと梅香は利用した。

彼らの意識が十分に自分に向いているのを自覚しつつ、食事が始まって以来初めて私に話しかける。

「そう言えば、伽羅。君が拾ってきた人間の様子はどうだ？」

「そうね、大分調子を取り戻したわ」

「・・・拾った人間？」

食いついたのは予想通り、好奇心旺盛な勇者だった。

ちらり、と視線を向ければ、彼以外の人間もこちらを見ている。

先ほどまでは私と目が合っても逸らしていたのに、僅かに怯むが話は聞いているようだった。

梅香も同じように判断したらしく、殊更愛想良くフレドリックに笑顔を向ける。

「そう。伽羅は拾い癖があつてね。先日も、怪我をした人間を拾つて介抱していたんだ。あれは、どれくらい前だった？」

「一月ほど前ね。散歩中に魔物に襲われているのを見つけたから助けたの。今では起き上がって歩くことも出来るわ」

色々割愛しているが嘘ではない。

一応拾つた時は人間だったし、魔物にも襲われていた。

怪我をするどころか本来なら死んでいて当然の彼らだったが、今はぴんぴんしている。

ぴんぴんすぎて香に扱かれまくるほどに元気になっていた。

昨日と話す内容は同じだが、言葉尻を少し変えるだけで受け取る側の印象は随分と変化する。

事実、私と梅香の会話に、人達達の警戒が緩んだ。

先ほど私が剣を振り上げていたのを見ていたが、彼らの同族を助けたと聞いて油断が生まれ始めたのだ。

「キャラちゃんが人間を助けたの？」

「結果的にはそうなりますわ。・・・もし宜しければお会いになれますか？」

「そうだな。差支えがなければ紹介してもらえるかい？俺たちも知ってる人かも知れないし」

「・・・・・・」

驚きながらも僅かな笑みを向けてきたシェリルと、彼女ほど警戒は

解いていないらしいアイル。そして無言を通すウェイに向かって小さく微笑むと、指を振り力を使った。

次の瞬間、目の前に現れた人間に勇者一行の瞳が丸くなる。それはそうだろう。

昨日の会話を覚えている私達は、勇者一行の警戒心を緩めるために彼らを利用すると決めていた。

ハークとアーク。双子の元・人間を。

香に扱かれた傷を隠すのにきっちりと首まで隠す黒の上下を纏った彼らは、優雅に一礼して見せた。

瞳の色は黒に近い藍色。冷静でいるのを確認し、私はそつと視線を外す。

椅子から降りると彼らまで近づき、私は勇者一行に笑顔を見せた。

「彼らの名前はハークとアーク。皆様ご存知の方かしら？」

微笑みながら小首を傾げる。

息を飲み込んだ勇者一行は、驚きに見開かれた眼で彼らを一瞥し、そして私へと視線を戻した。

驚きゆえに瞳から払拭された警戒心に、彼らの死角で梅香が一つ頷いた。

「ハーク様、アーク様！」

一番最初に行動したのはアイルだ。  
昨日も思ったが、彼はもしかしたらこの二人と知り合いなのかもしれない。

呆然とする仲間を余所に、アイルは彼らの前に駆け寄りすぐさま跪き礼を取った。

「存命だと信じておりました・・・！」

その瞳に涙すら浮かべ深々と頭を垂れる様は、その仕草に慣れたものの行動だった。

もしかしたら、思うより身分が高いのかもしれない。

しかし頭を下げるアイルを見るハークとアークの瞳は至って冷たい。昨日の私への言葉を覚えていたからに他ならないが、勇者一行は忘れていたのでその態度は不自然だ。

無言で睨むと何気ない仕草で彼らは態度を改めた。

「心配を掛けたか」

「すまないな、アイル。だが俺もハークも伽羅様のおかげで五体満足で生きている」

「怪我をしたところを、こちらの伽羅様に助けていただいてな」

「ああ。随分と良くしていただいた。衣食住どれも無償で提供してもらい、怪我をしている間は看病もてづから致してくださった。おかげで体も回復し、ここまで動けるようになった」

淡々とした口調で話す双子は、表情の変化に乏しい。

私の前ではもう少し変化があった気がするが、アイルの態度を見る  
とこちらが素なのだろう。

一人称も『俺』になっているし、それに違和感も感じない。

ハークとアークの言葉に、人間達の私を見る目が完全に変わった。

先ほどもまでの懐疑的な眼差しから、尊敬の眼差しへと。

私からすれば捨てられたものを拾っただけなのだが、彼らにとって  
その行動は私が予想する以上に意味があるものなのだろう。

容赦なく殺されかけたアースを見ていたくせに、随分と簡単に感謝  
の念を向けられ、むしろ拍子抜けしてしまう。

双子が悪魔である私を様付けて呼んでいるのも気にならないらしい。

しかしそれだけで今後の行動が取り易くなるなら、利用しない手は  
ない。

双子に視線をやれば、心得たように会話を続けた。

「弟達もさぞかし心配しているだろう」

「はい・・・ッ、特に王女の錯乱振りは酷く、弟君がお慰めして漸  
く正気を保っていられる有様です。早急に国へお戻りください」

「いや、それには及ばぬ。もしかして、まだ話を聞いていないのか  
？」

「・・・何を、でございましょうか？」

「数日後この城に各国の王族が集められることをだ」

「え？」

「そうか。まだ聞いていなかったか。それなら丁度いいから話を聞  
いたらどうだ？梅香様、彼らにも説明をお願いします」

「そうだな。彼らにも話をしようと思っていたんだ。君たちも同席  
するといい。昼食は摂ったのか？」

「はい。伽羅様の屋敷で頂きました」

「ならいい。伽羅、椅子の用意を」

「判ったわ」

指を振り力を紡ぐと二つ椅子を作り上げる。

空いている私の隣にそれを並べると、彼らは上品な仕草で一礼し椅子に腰掛けた。

『上出来よ』

彼らに向け伝心で告げると、喜びに震えた感情が伝わってきた。

まだ力は使いこなせていないが、感情を伝えるだけでも上達は早い。一方通行であるが使えないのと使えるのでは大分違う。

この短期間に伝心の初歩を元・人間である彼らに叩き込んだ香には、後ほど何か礼をしなくてはいけないだろう。

腰掛けた彼らの前にお茶を用意すると、タイミングを見計らい梅香が口を開いた。

### 三回目【10】（前書き）

今回は長々と説明が続いています。  
いつも以上に会話が少ないですが、どうぞお付き合いくださいませ。



### 三目【10】

ハークとアークの二人が居るだけで昼食の席は随分と和やかに済んだ。

おかげで梅香の機嫌もいい。

彼からしたら凡そ予定通りの行動なのだろう。

勇者を人間代表と呼ぶなら、王族は国代表と呼べる。

勇者を観察し人間を判断し、王族を観察し国を判断する。

勿論それ以外の部分からもこの二十年で色々と白檀様は観察されているのだが、人間と話すのも国の代表者と話すのも滞在時には一度だけだ。

先ほど、勇者一行に説明した各国の王族が集まる食事は、国の代表を見て白檀様が各国に与える力の配分を決める場だった。

この世界は『悪魔』と『天使』が交互に力を送り平定する世界だ。

『人間』を愛でる天使は自分が『守護』する世界を見守ろうと、私達魔族が居ない間の『世界』に居座る。

そうして自分たちが持つ『光の力』を存分に与え、この世界を保っていた。

しかし光があれば対になる闇も必要になる。

配分が上手く均整が取れない限り世界は歪みやがて崩れる。

その歪みを直すために一時的に自分たちの世界に戻った天使に代わり、現れるのが『魔王』と呼ばれる悪魔だ。

『天使』と違い、『悪魔』は人間と寄り添う気はない。

たった一度の会合で全てを決めるなど『天使族』なら言うだろうが、今現在はこの地は魔族が支配する世界。そして現在の世界の『王』は白檀様一人なので文句も言えない。

魔王が扱うのは『闇の力』。

私たちより長期に渡り滞在する天使とは違い、白檀様は短期集中で力を与える。

鮮烈な光で影を消すのではなく、安息の闇で包み込むのが役目だが、私はその力をどのように使うかもわからない。

そもそも世界の維持をどのようにするか、魔王の位を持つ悪魔以外は理解しようがないと以前白檀様が仰っていた。

世界の平定に使う闇の力も悪魔が本来持っている力とは少し異質なもののらしい。

そして世界を平定するこの仕組みを作ったのは、私達『悪魔』と敵対する『天使』が共通で『神』と崇める存在だが、長命な私たちからしても遙か昔からの慣わしなのでその理由は判らない。

『神』の存在が疑われないのは『悪魔』と『天使』に与えられる力を証拠としているからで、その力も魔王の称号を頂くときに得るものだ。

そして本来ならここまで深い知識を得る立場じゃない私がそれを知っているのは、私が魔王側近の立場を得ている悪魔だからで、その程度の価値しかない私には『神』の存在は生涯縁がないだろう。

しかし詳しい原理が判らなくとも、私がすべきことは理解している。魔王の側近である私は、白檀様が世界に対してどう動くかを判断する手助けをすればいい。

国の均衡や勇者の存在がどれだけ重要なものか知れないが、白檀様がそれを必要としているのだけを判って居ればいいのだ。

白檀様が後々が面倒だから勇者とその一行を手を掛けるな、と命じられればそれに従う。

勇者以外に価値がなくとも、基本は許可が下りない限りは命は奪わない。

それもこれも今のところはと注釈がつくが。

ちなみに軽く説明を終えた頃には、勇者一行はすっかりと警戒を解いた様子でハークとアークと会話していたし、私へも笑顔を向けてきた。

こんなことのために双子を拾ったのではないが、白檀様の役に立つなら彼らに協力してもらうのもいい。

ハークとアークの生存に浮き立つ彼らに、折角だから話をしてきてはどうかと梅香が差し水を向ければ、彼らは一・二もなく頷いた。席を外すと告げた梅香の言葉に喜んだ彼らは、そのまま食事を摂った部屋に残っている。

ちなみに席は外しても梅香の監視は外れない。

一応ハークとアークに後で状況を説明するように伝えてあるが、彼らを信用していない梅香の行動は当然とも言える。

勿論私も意識の欠片は彼らの元に残したままで、双子を中心に盛り上がる人間達の様子は絶えず脳裏に流れていた。

しかしながら私の仕事はそれとは別にあるので、平行して勇者を伴い白檀様の執務室へ向かっている。

勇者との対談も白檀様の務めの一つなので、その案内の最中だった。

「なあ、伽羅」

「何？」

「これから昨日みたいに俺は魔王と話をするのか？」

「ええ、そうよ」

「あんたも同席しろ」

「・・・私も？」

唐突な言葉につい顔を上げてしまう。

蒼い瞳でこちらを見ていたフレドリックは、こくりと頷くと話を続けた。

「そう。二人きりだと気詰まりだろ？あんたが居れば少しは話しがしやすくなる」

彼は一体私を何だと思っているのだろうか。

私は彼とは違う存在だ。『人間』ではなく『悪魔』だ。

それなのに、その私の前で何を馬鹿なことを言っているのだろう。こういう部分は昔の『勇者』と変わらない気がして、肩を竦めてため息を落とす。

「魔王様に伺わないと私では判断できないわ」

「なら考えてくれるか？」

「私の意志は関係ないわ。魔王様の意思に従うだけだもの」  
「・・・」

実際白檀様が同席しろというなら異論はない。

フレドリック以外にも、過去に私の同席を求めた『勇者』は存在したし、経験がないわけじゃない。

白檀様は『勇者』との会話も自分の力を振るうための基準に取り入れている。

私からすれば『勇者』との会話のどの部分に重要な要素が入っているか全く判らないが、それでもそういうものらしい。

「なら、魔王が『是』と答えれば伽羅には異論がないということだな」

「その通りよ」

私の返答に頷いたフレドリックは、やや早足になる。

どうやら白檀様を説得する気らしい。

そんなに気合を入れなくとも、白檀様の性格からして『否』と答えるのはまずないだろう。

私を交えると『勇者』の雰囲気が変わるということで、私を交えての対談と、私を交えない対談をするのは恒例になっている。

しかしそれにしても勇者とはつくづく変わっている。

私達の存在の意味を知らぬ『人間』からすれば、勇者の使命は闇の恐怖を広める魔王を含めた私達をなるべく早く異世界へと戻すことのはずだ。

別に恐怖を広めに来たわけではないが、彼らは固く信じているし、人間は闇雲に魔族を恐れる。

それなのにその交渉をしている様子はなく、むしろ好奇心のままに動いている。

どうせフレドリックが急かしても、白檀様の決めた期間はきっちりそこちらの世界に在住するのだから彼らの意思など関係ないが、それでも普通は早く帰って欲しいと望むものじゃないのだろうか。

魔王が異世界にいる期間は、基本的に勇者が現れてから決められる。現れると言つのは生まれるという意味ではなく、勇者が勇者の役目

を人間の国で正式に背負ってから、という意味だ。

この世界に滞在する二十年近くは勇者が生まれて育つのを待っているに過ぎない。

今までの勇者の滞在期間は大体三日から、長くても五日が普通だった。

それが今回は異例の一週間。

勇者が国を出立する前に滞在期間を相手に通達するのが通例だが、今までの勇者とは違っても、過去の『手記』を確認するならそれが今までで最大のものとフレドリックは判っているはずだ。

それでも望まれない魔族が長期滞在しているのに、彼の顔に不安は見受けられない。

「変わってるわ」

呟けば、早足になったため、僅かに先を歩いていた彼は態々振り返って首を傾げた。

フレドリックが『勇者』である限り好意は抱きようがないが、不思議な生き物だとは思う。

その瞳に浮かぶ疑問を無視すると、白檀様へと伝心を繋げた。

## 閑話【香】

香は今日も忙しく仕事をしていた。

この屋敷は『伽羅の拾い物屋敷』と呼ばれるだけあり、伽羅が拾ってきた生き物が何匹も居る。

薄汚い狐だったり、手が？げた下級の魔物だったり、あるいは翼の折れた鳥だったり、矢が刺さった犬だったり、その種類も大きさも体調も様々だ。

共通するのは『捨てられた』という事実のみ。

彼らが捨てられた相手は実に様々だし、伽羅が拾う基準も香は知らない。

そうして拾われた彼らは基本的に伽羅が面倒を見て、彼女が居ない間だけ香が面倒を任された。

伽羅がいない間彼らの様子を見て管理するのも香の役目で、放って置けば捨てられた生き物を延々と拾い続ける主に苦言を呈するのも香の役目だ。

怪我を負う生き物の傷の様子を一通り見て、今度は部屋の掃除をする。

不思議なことにこの屋敷の中に共存する『拾い物』は、互いを仲間とでも思っているのか争いや争いを起こさない。

怪我をしている生物としての本能を疑うところだが、十分な餌をやっているため食事を理由に相手を殺す必要がないのかもしれない。

動けるものは皆一階の開け放してあるドアから外に出るため、室内の汚れもそこまで酷くない。

香は箒片手に、愛する伽羅に留守の間の屋敷の管理を任されている部屋の隅々まで綺麗に磨く。

そしてどれだけ仕事が忙しくとも、一日に一度は必ず訪れてくれる主が安らげるよう彼女の好みの花を生けるのだ。

香がこちらの『世界』に足を踏み入れたのは今回が初めてだ。

話には聞いていたが、やはり本来住んでいる世界とはところどころ違っている。

中でも驚いたのは『人間』の存在だ。

先月伽羅が拾ってきた人間は、正確には人間と言えなかったが、それでも酷く脆く脆弱だった。

伽羅に与えられた血は一滴だと言っていたのに、血に馴染むのに三週間も掛かった上、その間伽羅直々に看病されていた。

本来ならそんな僥倖を得る立場の相手は限られているのに、それだけで香の『人間』への評価は下がる。

伽羅が仕事の間は香も彼らの面倒を見たが、苛立ちは常に共にあった。

香を一番苛立たせたのは、彼らが伽羅に向けた視線だ。

憧れ、尊敬、敬慕、思慕、そんなのは慣れているから我慢できる。

そんなものは向こうの世界でも伽羅には溺れんばかりに浴びせられるものであり、傳くためなら何を投げ打っても良いと言う輩で溢れていたから。

美しく気高い主は香の誇りであり、永遠の憧れだ。

他人への関心がない故の冷淡な態度とは違い、香には柔らかな笑みも向けてくれる。

堪らない優越感と共に与えられる至福。

相手が伽羅の視線に映っていないのを理解しているからこそ、彼らが伽羅にすぎなくされる瞬間を見るのがとても好きだ。



そうではなく、彼らの視線に僅かに含まれた『憐憫』の色。  
それが香の気に酷く障った。

伽羅から予め『人間』は自分たちと違う生き物だと教えられている。  
あちらの世界で師匠にもそう言われていたし、知っているつもりで  
いた。

それなのにこちらが当たり前のつもりで行動しても、彼らは時とし  
て憐れみに満ちた眼差しを向けてきた。  
それが苛立たしく、憎々しい。

「・・・香」

「黒方様」

声を掛けてきたのは伽羅の弟分である黒方だった。

白檀とよく似た漆黒の髪を持つ男は、瞳すら伺えない分厚いレンズ  
の底から視線を向ける。

不思議な意匠の服の上に医者でもないのに白衣を着た彼の手には、  
湯気を立てた何かが乗る皿があった。

「伽羅はまだ来ないのか？」

「ええ。お姉さまはあちらで勇者達と昼を摂る事になったそうです」

「そうか。・・・折角、伽羅の好きな『マフィン』を焼いたのにな」

物静かな様子で、それでも眉を下げて悲しみを表した黒方に、香も  
釣られて眉を寄せた。

朝から厨房に籠って何をしていたかと思えば、彼の世界のお菓子を

作っていたらしい。

焼きたてのそれを皿に乗せたまま俯く彼の気持ちがよく判る。

香も昼の時間を伽羅と一緒に摂れるものと思っていた。

伽羅の好物であるスープも昨日の晩から仕込んでいたのに、勇者の言葉で伽羅はあちらで昼食を摂る事になってしまいとても残念だったのだ。

先ほど伝心を繋げられた時にさりげなくどうするか聞けば、夜に一度こちらに来てくれると言っていたのでその時にお腹が空いてらしたら出そうと思っている。

師匠直伝のこのスープは、伽羅がとても好んだものだから。

「そう言えば、あの二人はどうした？さっきまで庭で片手間に扱いてなかったか？」

「・・・あちらに送りました。梅香様からお姉さまに要請があったらしく、訓練は中止です」

「訓練、か。随分と激しいものだったな」

「どこがですか。加減しすぎて訓練にもなっていないくらいですよ。内蔵も潰してないですし、体も欠損していません。ちょっと強めればすぐに意識を失うし、お姉さまの盾に相応しくなるのはいつのころか判らないですね」

「盾になる素養はないか？」

「・・・どうでしょう。人間を鍛えるのは初めてですから。ですが、普通とは違いお姉さまの血を飲んでいます。素養は出来ているはずですよ」

そう。元がどれだけ情弱でも伽羅の血を飲んでいるから素養がないとは言わせない。

香が人間を見たのは彼らが初めてで、相手をして更にその弱さに驚

いたが、何をされても文句一つ言わずに喰らい付いて来る根性だけは認められるだろう。

だが香に言わせればそれ位は当たり前だ。

何故なら彼らは伽羅の眷属なのだ。

根性の一つも示せないで、彼女への忠誠心は謳わせない。

「憐れだな。折角選択肢を示してやったのに、脆弱な身でありながら進んで堕ちて来るとは」

「僥倖ですよ。捨てられた身でありながら、お姉さまに拾っていたのだいからです」

嘲りと自嘲を含んだ笑みを見せた黒方に、つんと顎を逸らして宣言する。

「お姉さまの行動に意味はありませんが、彼らはお姉さまに尽くします」

「言い切れるのか」

「当然です。私達はそういう生き物なんですよ」

黒方は自分と違う。正確に言えば自分や伽羅、そして新たに眷属に加わったあの二人とも違う。

同じ立場でありながら、その在り方が根本から違う彼は、きっと生涯理解できない。

それでもその心は想像できる。

複雑な想いを抱きながらも、結局彼も伽羅が心配なのだ。

黙り込んだ黒方を眺め、近くの窓を覗くと視線を庭先に落とす。そこには血を撒き散らしながら回復しようと力を溜める獣が居て、その獣の『元』を知っているだけに香は少し不思議だった。

『彼らは『人間』。私たちとは種族が違うわ。想いの表し方も、感情の起伏も、恐怖する対象も愛情の示し方も』

不意に脳裏に伽羅の言葉が蘇る。

口で教えられても、実際に目にしても、まだまだ香には人間は理解できそうになかった。

「お姉さまが」

「え？」

「夜にはお姉さまは一度こちらに来ると仰ってました。食べてもらいたければ、それは夜まで置いとくと宜しいかと」

「・・・そうだな」

教えてやると、嬉しそうに黒方は口元を綻ばせた。

そこから感じる愛情は香ととてもよく似ているのに、やはりどこか違うもので、やっぱり香は不思議だった。

### 三日目【11】

「伽羅をこの場に同席させてくれ」

「ああ、別に構わぬぞ」

勢い込んで白檀様に訴えたフレドリックは、あまりにあっさりと許可を与えた彼に目を丸めた。

先に私から伝心で報告していたのだが、それを彼は知らない。

そして別に報告せずにその場で勇者が提案していても今と同じ気軽さで許可を出していただろうことを知っているのも、私も別に驚かない。

肩透かしを食らって目を瞬かせるフレドリックに席を指差すと、私にはこちらに來いと手招く。

招かれるままに近寄れば、ひょいと片手で抱き上げられた。

膝の上に乗せられると、そのまま腰に腕が巻きつき抱え込まれる。

わずかばかり力が籠められた抱き方に顔を上げれば、少しだけ責めるような視線が注がれて思わず破顔してしまう。

どうやら朝先にベッドから抜け出たので不機嫌らしい。

「・・・何で伽羅がその位置なんだ？」

「この子が俺のものだからに決まっているだろう」

「止める。勇者を前にしてする態度ではない」

「ほう？ならどのような態度が魔王らしいのか教えてもらおうか」

「少なくとも、幼女を膝の上に抱きだらしく表情を崩すのではないな」

フレドリックの言い分に瞳を細める。

白檀様を前にしてあまりな言い分に苛立つが、白檀様自らに宥められ心を落ち着かせる。

そのまま緩やかに髪を指先で弄ぶと、余裕たつぷりな態度で嗤う。

「そうか。だがこれが俺だ。些細なことを気にするな勇者殿。度量がしれるぞ」

「ッ」

「それ以上は止めなさい、フレドリック。魔王様に無礼を働くなら、私はこの場から消えるわ」

「伽羅」

「勘違いしないで。私は貴方が望んだからこの場に居るけれど、そもそもそれ自体が勇者の面倒を見るように仰った魔王様のお言葉に従った結果よ。私の前でこれ以上魔王様を侮辱するのであれば、私が貴方の相手をするわ。・・・度量が知れてよ、勇者様」

「・・・・・・・・」

私の言葉で黙り込んだ勇者に鼻を鳴らす。

悔しげに唇を噛みこちらを睨んでいるが、別に怖くも何ともない。彼の視線を真っ向から受けていると、それを遮るように後ろから伸びてきた掌に視界を塞がれた。

小悪魔姿の時であれば片手で顔を覆うのは容易だ。

そうして私の視界を塞ぎながら顔を近づけた白檀様は、耳元でそつと囁きを零す。

「俺の可愛い養い子。どうして朝は俺をきちんと起こさなかった」

「ぐっすりとお休みになられていらしたので。僭越かとは存じましたが、昨日はあまり眠っていらっしやらないでしょう？眠れるときに体を休めるのが一番かと」

「・・・それで俺の腕から抜け出し別の男と逢引か？」

「まさか。私が逢引などありえません」

「ふん。どうだな。挨拶もせずに消えたくせに」

「眠りを妨げぬよう、一度だけ額にさせていただきました」

「目が覚めていなければ挨拶とは言えぬだろう」

視界を覆う掌を両手を使いそつとどけ、拗ねた口調の彼を見上げる。柳眉を寄せて不機嫌そうな様子で私を見る白檀様に、不謹慎だが笑ってしまった。

「では、この場で挨拶をさせて頂いても宜しいですか？」

「・・・ふん。構わん」

つん、と僅かに視線を逸らし許可を与えて下さったので、遠慮なくと体を伸ばす。

膝の上に座っている状態から彼の肩に手を置き、伸び上がるようにして頬に口付けた。

「一度だけか？」

促され、さらに反対の頬、額、唇すれすれの場所に口付ける。すると漸く機嫌を直してくれたのか、私の髪を耳にかけると白檀様

も頬に口付けを与えて下さった。

嬉しくて笑みを零すと、瞳を細めてその様子を眺めた白檀様は頭をゆるりと撫ぜる。

そのまま前髪をどけ、額にも口付けると満足気に笑った。

「・・・何やってるんだ、あんたたち」

白檀様との今日二度目の触れ合いに喜びを噛み締めていると、冷め切った声に水を差される。

この場に居るもう一人の存在を邪魔に思いながら笑顔を消して振り返った。

「挨拶よ」

「何が」

「見ていて判らなかったの？」

「ああ、判らないな」

「なら説明しても判らないでしょう。黙っていなさい」

「こらこら。そんなことを言っては俺の仕事が捗らん」

「申し訳ございません」

「レイノルド。お前も焼き餅ばかり妬いていないで少しは会話をする努力をしろ。お前に与えられた使命は何だ」

「・・・・・・・・」

再び黙り込んだフレドリックは、悔しげな眼差しで白檀様を睨み付けた。

その態度に苛立ちつつも、行動には移らない。



幾度も止められているのに先走っては白檀様の意思に背いてしまう。人間如きに白檀様を貶されるなど容赦できる内容ではないが、私を抱く腕が体を緩く拘束している。

そして何より勇者を相手にして白檀様が愉しげに笑っているのではない。

「さあ、勇者殿。俺にお前たちの世界の話を聞かせてくれ。それこそが勇者の務めで、お前がここに存在する意義。伽羅に興味を持つのは構わぬが、最低限の仕事はせねばな。伽羅も一々突つかかるな話が進まぬ」

「・・・はい」

「判ればレイノルドに謝罪を。お前の態度も悪い」

「はい、魔王様。出過ぎた真似を致して申し訳ございません、勇者様。ご無礼をお赦し下さい」

白檀様に促されるままにフレドリックに向かって頭を下げる。

そんな私に、今日の中で一番苦しい視線を向けたフレドリックは、それでも吐き捨てるように『赦す』とただ一言返事をした。

その瞳に宿る色は、過去に見た『勇者』のそれと酷似したものだった。

## 三日目【12】

私は根本的に言うと『人間』どころか以前に『勇者』が嫌いだ。感情の好悪をあからさまに態度に表していないだけで、手出しが赦されているなら自分の存在と引き換えにしていいくらいに勇者を憎んでいる。

今までの勇者はそれを理解した上で私に接してきたが、今回のフレドリックは違うらしい。

どうも、初代勇者と初めて会った頃のような態度に酷似している。白檀様もそう思ったのか、緩く口角を上げて見せ付けるよう私の頬に唇を寄せる。

すると目つきを鋭くさせた勇者は、ぎろりと憤怒を混めてこちらを睨んで来た。

「ふむ。やはり、勇者は勇者だな」

確認するよう観察していた白檀様は、フレドリックには聞こえない大きさで囁いた。

その言葉に、彼に知れないよう私も僅かに顎を引き同意する。

白檀様の観察対象として存在する勇者は私にとっても因縁の相手だ。

フレドリックが勇者として欠けているから今は上辺だけでも普通に会話できるが、これが先代までの勇者ならこうは行かなかった。

白檀様に対しても不敬の数々どころか、あからさまに嘲笑を含んだ態度をとることも多かった。

まあ、それも全て過去になっているので、今更どうこう言っても仕

方がないが。

「そう言えば、勇者殿。梅香から明後日の話を聞いたか？」

「ああ。各国の王族を集めてのパーティだろう。魔族が人間を心からもてなすと思えないがな」

「そうだな。別にもてなすのが仕事ではない。だが無駄にことを荒立てる気もない。俺はいたって平和主義だからな」

「魔族が平和主義だと？この荒れた地を前によく言えるな」

「くくくつ・・・レイノルド、俺相手にそこまであからさまな口を利くのはお前くらいだぞ？」

「だからなんだ？魔王だからと平伏す相手ばかりではない」

「そうだな。だから、面白い」

「別に面白がられたくない。そのパーティには他に誰が参加するんだ？」

「他、と言うと？」

「伽羅や、梅香、他の配下も出るのか？」

「ああ。伽羅のエスコートでもしたいのか？」

「俺は、別にっ」

「だが残念だな。この子は俺の側近故エスコートは不要だ。お前の仲間の少女でもエスコートするといい。似合うドレスを用意させよう」

「どうして俺がシェリルをエスコートしなくちゃならないんだ？」

「男としての甲斐性だろう」

何故か理由が全く判らない、と苛立ちを含んだまま首を振るフレドリックに白檀様は笑った。

どうやら白檀様も彼らの関係に気付いているらしく、その表情は心底愉快だと言わんばかりだ。

悪魔は他人の感情の機微に聡い。

それはどうすれば彼らが自分の手の内に落ちてくるかを常に考える本能から来ているもので、だからこそ少しか顔を合わせていない彼らの感情の矢印も見破ったのだろう。

正直に言えばそこに巻き込まれるのは御免だが、そうも言っていないらしい。

つくづく面倒だとうんざりしていると大きな掌が頭を撫で、一瞬で心は解れた。

「まあ、強制するようなものでもないな。この城からは俺の側近と後は料理の上げ下げを行う侍女たち、後は伽羅が拾った人間くらいか。下手に配置すると怯える者も居るのでな。我らは少数での参加だ」

「っ！」

白檀様の言葉に弾かれたように顔を上げる。

拾った人間を眷族にしたのを伝え忘れていたのを思い出し、今更ながら慌てて報告すると知っているとあっさりと返された。

知られているのも知っていたが、それ以前に自分から報告すべきであつたのに、自分の行動の遅さが悔やまれてならない。

私が眷属を増やそうと口を出すようなお方ではないが、だからこそ私は自分から伝えたかったのに。

『申し訳ございません。ご報告遅れましたことお許してください』

『何、構わぬ。お前を護る盾は多ければ多いほど俺も安心だ。だが

お前が人間を眷属にするとは思っていなかった。心境の変化か？」

『黒方が、私が心配だと。どうも未だに私達と人間の差を理解していないようです』

『黒方か。それなら納得だ。俺の可愛い養い子は弟分に甘いからなあいつもお前の実力は十分知っているが、見た目が華奢だから心配でならぬのだろう。確かに、お前の戦い方は危うい部分があるからな』

『申し訳ございません』

『謝る必要はない。』

役に立ちそうか？

『多少は』

『なら、いい。そやつらがお前の役に立つよう、十分に叩き上げる』

『はい』

遅いとは思ったが、今更でも報告すれば、少し笑い混じりの声で白檀様は許可を下さった。

私は別に白檀様の眷属ではないので報告の義務はないが、それ以上の存在だ。

隠し事は基本的にしたくない。

私との会話を続けながらも、白檀様はフレドリックへ同時進行で説明を続けていた。

「対して人間は物々しいな。各国、と言ってもこの世界には10しかない国の王族と、それぞれが連れてくる護衛。国から選出される代表者は一人ないし二人だが、彼らに対し大体百人単位の護衛が付いて来る。流石に室内に伴うのは制限させるが、配置は別に好きにさせている。見られて困るものもないしな」

「好きにさせていいのか？俺たち人間が何をするかも判らぬのに？」

「ああ、構わぬな。どれだけの手練であろうとも、百人単位で掛かつてこようとも、この子一人落とせぬだろうよ」

「言い切れるのか？」

「当然だ。俺たちは人の姿と酷似しているから勘違いされがちだが、そこらにうろつく魔物ですら俺たちには小指一つで十分だ。お前たちが大勢で迎え撃たねばならん魔物でも、俺たちにとっては雑魚でしかない」

「本当か？」

「ああ。勘違いしてくれるなよ、勇者殿。お前は確かに俺を殺す力を有する。しかしながらそれは伽羅たちには通用せん。あくまで、俺専用だ。俺一人殺したところで、他の面々相手に万に一つも勝ち目はない。その状況で挑むなど、それこそ世界を道連れにする想いがなければ無駄であろうよ」

昔を思い出すよう目を細めた白檀様は、今ではない過去を見ていた。私達にとっても僅かに古い記憶。

確かにそんな愚かな男存在した。

世界も国も家族でもなく、自らの想いを胸に抱き、白檀様へと剣を向けた唯一の存在が。

無意識の内に手が伸びて左胸の上を指先で辿る。

普段は絶対に露出しないその場所に、永久に消えない傷痕がある。

魔王である白檀様に剣を向けた相手は初代勇者の『レイノルド・ラツチエ』その人だ。

白檀様を庇い、彼の剣を受けた瞬間、何とも言えない顔で微笑んだその男は、私が憎んだ『勇者』だった。

### 三回目【13】

何だかんだで白檀様と勇者に混ざった会談は夕食の少し前まで続いた。

腹を鳴らせたフレドリックに白檀様が笑い、梅香に今後の予定を確かめたところ、『勇者のみこちらに寄越して欲しい』とのことだったのでそのまま告げると、不服そうな顔で彼は私を睨んだ。

しかし『私が拾った二人も交えての夕食を仲間が望んでいる』と告げれば、不承不承ながら了承はした。

迎えに来た梅香に伴われて勇者が姿を消すと、息を吐き出し体の力を抜く。

やはりどうしても無意識に入る体の力は刻み込まれた苦手意識の所為だろう。

力の抜けた私を片手で抱えなおした白檀様はそのまま椅子から立ち上がる。

いきなり高くなった視界に瞬きを繰り返すと、悪戯が成功した子供のような顔で笑った。

「夕食はあちらで摂るのだろうか？」

あちら、とは勿論私が与えられている屋敷のことだろう。

先ほど梅香から伝心で言外に来るなど言われた時に、香との約束を確認されたからそのことを言っているに違いない。

領けは猫のように目を細めた白檀様は、私を片方の腕に座らせると顔の位置まで持ち上げた。

闇よりも尚濃い黒い瞳が私を覗き、どくり、と鼓動が脈打つ。

核は違うが悪魔にも心臓はある。

早くなる脈に頬が赤らみ、そわそわと落ち着かない気持ちになった。そんな私を見透かすように笑みを深めると、空いた手で私の髪を梳く。

「俺もあちらで夕食を摂ろう」

「白檀様も　ですか？」

「ああ。香のことだ。夕食の準備などすぐに整えるに違いない。そろそろお前の好物のスープを作る頃合だろう」

「ああ、そうですね。そう言えば、口調が心持ち楽しそうでしたから、そうかもしれません。驚かせたい時はすぐに嬉しそうな声になりますから」

「それに黒方の御菓子もあるだろう。あれの作る料理は美味しいし、顔も見ておきたい。こちらからしたら久しぶりだしな」

くしゃり、と身内にしか見せない笑顔を浮かべた白檀様に私も頷いた。

確かに時間の枠が違うとはいえ、こちらの世界で換算すれば黒方と顔を合わせたのは大体20年前だ。

あちらで言っても数年の期間で顔を合わせていないため、顔くらい見たいだろう。

何しろ黒方は白檀様が保護している立場にある。

『養い子』との言葉どおりに彼の子供は私だけが、保護者として見れば黒方も同じような立場だ。

小さかった黒方は身長が随分伸びたが、白檀様からしたらまだまだ子供だろう。

彼を可愛がっている白檀様を知っているので、至急香に連絡を取る。



少しばかり焦っていたが『是』と返事が返ったので伝えたと、ならばすぐに行こうと移動した。

「・・・！？白檀！」

唐突に目の前に現れた私と白檀様に、畳の上で寝転がっていた黒方はがばりと上体を起こした。

湯のみと呼ばれるコップと、急須と呼ばれるポットを傍に置き、行儀悪くも寝転んだまま本を読んでいたらしい。

絵と文字が乱れる童話のような本と、文字ばかりの専門書。

言語も何種類か分かれているそれを無造作に積んでいた黒方は、物によつては相当な希少価値があるそれらを片手で退けると私と白檀様の前に座布団と呼ぶクッションを置いた。

並べられたそれに足を乗せようとし、中途半端な位置で白檀様が止まる。

黒方が言っていた、『畳の上は靴で昇らない』を思い出したのだから。

靴を履いて家の中を歩かないのは元の世界の東の国とよく似ているが、あそこの床はフローリングだった。

この畳に未だに慣れない白檀様の靴を力を使って消すと、礼の代わりに私の頭を撫でた彼はそのまま座布団へと足を置く。

「久しいな、黒方。元気だったか？」

「ああ・・・こんなに長くなるなんて、聞いてなかった。前はもっと定期的に帰って来たくせに」

「もう子供じゃないと俺たちを送り出したのはお前だろう？」

「それでも、だ。二人とも全然帰ってこないから、こちらから来てしまった」

ふいつと顔を逸らした黒方は、どうやら拗ねているらしい。

私には態度を誤魔化したくせに白檀様の前では素直なものだ。

確かに、黒方が私達のところに来てからこれほど長期に渡り顔を合わせなかったのは初めてなので、色々と不安が過ぎったのだろう。

彼一人でこちらの世界に来れるはずがないから、協力者がいるはずだ。

該当するのは白檀様に仕える執事と、私達と面識がある白檀様の兄貴分。

執事の方は手を貸すと思えないので、きつと後者の彼が面白半分で力を貸したのだろう。

それであれば白檀様が黒方の存在を知っていた理由も納得できる。

予め知っていれば干渉のこの屋敷内部にいても黒方の存在を認知していたのは不思議じゃない。

身長ばかりが大きくなった黒方は、分厚いレンズの下で瞳を輝かせているだろう。

彼は実の父親に対するように白檀様を慕っている。

そして白檀様も名前を呼び捨てにするほどには黒方を可愛がっていた。

久しぶりの顔合わせに私の心も少しずつ解れる。

ノック4つが室内に響き、返事をするとお茶の用意をした香も現れた。

ゆったりとした空間に、胸の奥深くにある心の中心が揺れた気がした。

### 三日目【14】

夜の帳に包まれた空間。私のために白檀様が用意してくださったこの箱庭は、すこぶるよく出来ている。

昼には太陽の光が射し、夜には月光に照らされる。四季もあれば天気の変動もある。

屋敷の屋根に腰掛けて風に流れる雲を見詰める。

雲は空気中に固まって飛ぶ水滴、あるいは氷粒が固まり出来たものだと言ての家庭教師に教えてもらった。

しかしそれは空にある雲だけで、もっと上には別の形の雲と呼ばれる存在もあるらしい。

私は見たことがないが、星で出来た雲もあると家庭教師は教えてくれた。

いつか私に見せたいと笑った彼は、あちらの世界で元気にしているのだろう。

「お姉さま」

「・・・香」

懐かしい相手を思い出していると、不意に後ろから声を掛けられる。気配に気付いていたので驚きはない。

瞼を閉じたまま、それでも危うげない状態で屋根を歩いた彼女は、私の隣へと腰掛けた。

「下に行かなくて宜しいんですか？」

「ええ。黒方も白檀様と話したいでしょう」

「でもお姉さまが遠慮される必要はありません」

「遠慮なんてしてないわ。ただ、白檀様も黒方との時間が望んでいらした。私だけでよければあちらの屋敷で食事を召されたと思うもの。だから、少しだけ二人の時間を差し上げたいの」

「・・・お姉さまが宜しければ、あたしもいいですけど」

唇を尖らせた香は、拗ねたように俯く。

その心遣いは素直に嬉しく、柔らかな髪に手を通した。

今は小悪魔でいるため彼女の方が少し高い位置にある。

耳元を撫るように手を動かせば、猫のように掌に顔を押し付けてきた。

目を細め構っていると、階下からぐるると喉を鳴らした声が聞こえる。

それに素早く反応したのは香で、嫌そうに眉間に皺を寄せて舌打した。

「あの獣、いつまでこちらに置いておくのですか？」

「怪我が癒えるまでよ。勇者は彼が目に見えない場所にある方が安心できるみたいだから」

「・・・状況は何も変わらないのに？」

「目に映らないものはないのと同じ、ということでしょうね」

声に引かれ視線を下げると、そこにはこちらを見上げる獣がいる。朝より随分と楽になったようで、庭に染み出る血は止まっていた。それでも貫かれた腹と足の傷はまだ癒えておらず、立ち上がるのは無理なようだった。

必死に首だけ上げ、その視線を私へと固定している。

「早く癒せばいいのに。予めお姉さまから血を摂取していたのですよ?」

「そうね。別に予定していたわけじゃないけれど偶然に」

「ならば活性化しているはずなのに、何故あそこまで治りが遅いのですか?」

「彼は半端者だもの。元は人間。魔物に堕ちたものの、その能力は完璧ではない。歪みがどこにあるのだと思うわ」

本来、眷属の傷を癒すには主の血肉や体液が一番適している。

眷属の血肉で主は回復しなくとも、主の血肉を分け与えれば、それが眷属にとって何よりの薬となり、体の活性化を促す。

しかしながらアースは無理やりの形で自身で魔物へと成り下がった挙句、その力も未だに安定していない。

私が滅多にそれらを与えないのも原因の一つだろうが、何より魂が歪んでいるのが最大の原因だろう。

魔物の体に人間の魂。本来ならありえない強制的な環境だ。

「あたし、あの獣嫌いです」

「どうして?」

「お姉さまに傷を与えたから。眷属でありながら身の程知らずに主に牙を剥く駄犬です」

「そうね。それでもあれは事故でしょう」

「事故?主に怪我を負わせたのがですか?」

「ええ。アースが怒るのを知っていて油断した私も悪いわ。あの場所はお姉が私のために作った場所。眷属が主を慕うのは当然。それな

ら眷属の想いを理解するのは主の義務。怠った私が罰を受けるのは当然でしょう」

「それでもっ……それでも、お姉さまに傷を負わせたなど赦せません」

瞼を閉じたまま必死に私を見つめる香は、一心に私に訴えた。

その気持ちは理解できる。

彼女も私の眷属の一人。

『眷属』は『主』を愛するものだ。

傷つけられるなど赦せるはずもない。

怒り狂いながらも手を出さないのは、偏に私が許可しないからだろ  
う。

許可した瞬間にアースは香の力で欠片も残さず粉碎される。

魂すら握り潰し、世界に一片も存在の証を残さない状態まで蹴り尽  
くす。

「赦す必要はないわ」

「お姉さま」

「けれど処断はさせないわ。私の眷属への処断は私にのみ赦される  
権利よ」

喉を震わせ声を上げるアースを見下ろし諭すように呟く。

アースの傷は相当な深手だ。

私は手加減はしなかった。

生き残る確信はあるが、もしかしたら体のどこかに欠陥が残るかも  
しれない。

「お姉さま」

「何？」

「あれは、元は人間だったのですよね？」

「ええ、そうよ」

「・・・人間の気持ちは移ろい易いものだ。私は聞きました。それなのに彼は魔物として生きています。存在する子孫へは欠片も興味を抱かず、お姉さまだけをその瞳に映し、死に掛けてもまだ意識を引こうと媚びています」

「そうね」

「私には人間が理解できません。代わりがあればそれで満足するのではないのですか？想いはすり替わるのではないのですか？忘れていくものではなかったのですか？天使と悪魔の中間が人間の特色であるなら、何故彼は獣へと堕ちたのでしょうか」

「・・・どうしてなのかしらね」

淡々と問うてきた香に、私は答えを持っていなかった。

長く見てきたが人間は理解できない。

理解しようとしていないからかもしれないが、理解しようとしても理解できないのだろう。

相容れない存在、それは私達だ。

例えば今日の前でアースが死んだとしても私の感情はぶれない。

しかし、彼とほとんど関わりのない勇者一行は酷く動揺するのだろう。

自身と関係がない存在が死ぬ。

それだけで怯むのが人間だ。

そして。

「時として天使よりも博愛主義で、時として悪魔同様一途になる。それが人間なのでしょうね」

我を通すために形振り構わず振舞われた結果が現状にあると、少なくとも知っていた。

静かに輝く月は美しい。

『悪魔は、どんな生き物なのかな？』

不意に響いた声に身を震わせ辺りを見渡す。  
驚いたように香が私を伺い、それが空耳だと知った。

忘れられない面影がある。

魂を削られた痛みがある。

何を失くしても惜しくない恨みがある。

月明かりのように静かな微笑みを浮かべた『彼』を、私は絶対に赦しはしない。



## 四日目【1】

「・・・どうして私が貴方の食事の席に同席しなければならないの」  
「それは俺があんたに居て欲しいからだな」

「貴方にはお仲間が居るでしょう？彼らに同席してもらえばいいじゃない。特にあのお嬢さんなら快く付き合ってくれるはずよ」

「あいつらなら、ハーク様とアーク様に案内されて屋敷のどこかに行った。俺は一人だけ寝過ごしたんだ」

「寝過ごす？貴方、起こしてもらえなかったの？」

「ああ。朝食もないしどうしたもんかと思ってたら、あんたがタイミングよく部屋をノックしたってわけだ」

話しながら結構な勢いで食事を摂る勇者に呆れる。

私はちなみに白檀様たちと一緒したのもう食事は終わっているので見ているだけなのだが、こちらが気持ち悪くなるくらいの食欲だった。

そう言えば他の『勇者』の面々も食欲は旺盛だったのを思い出す。  
涼やかな顔で何処に消えるのか問い詰めたいくらい食べていたので、これも血統なのかもしれない。

呆れを含んだ眼差しで見物していると、不意に視線が絡む。

蒼い瞳は勇者しか持たないのだが、この世界以外の勇者も同じような色合いなのだろうか。

別の世界の『魔王』をしている知人に帰ったら聞いてみようと考えながら、薰り高いお茶を口に含む。

香が向こうから持ってきたブレンドだが、私好みの味をしているそれは今日も美味しい。

「あんたって、そうしてると本当に綺麗だな」

「・・・そう」

「動じないのか？」

「言われ慣れてるわ」

「はぁ、凄いな。その年で言われ慣れているのか」

「私は見た目どおりの年齢じゃないわ」

「だが見た目は子供だ」

「・・・子供の姿を装っているだけよ」

そう。

ずっと子供でいられるなら、これほど楽なことはなかっただろう。

白檀様が転化した私の姿に動揺することもなかったし、私も分に合わぬ力を求めなかった。

この姿が仮初でしかないのを誰より理解していながら、それでも執着する自分を愚かだと思う。

他に手段はなかった。後悔していないし何度でも選択を迫られれば同じ道を選ぶ。

けれど幾度も愚かだと思うのだろう。

「梅香と伽羅は幼馴染だよな？ならどうして伽羅だけ子供のままなんだ？魔族は子供の姿と大人の姿を好きに変えられるのか？性別も好きに出来るのか？」

「そんなわけがないでしょう。転化すれば成体が変わるし、そこから子供に戻るなど聞いたこともないわ。性別も変えられないわ。見た目を誤魔化す程度なら出来ても、根本を捻じ曲げる事になるもの」

「ならどうして伽羅は子供の姿なんだ？」

いつの間にか食事の手を休めたフレドリックは、不思議そうに私を見詰めた。

好奇心の宿る瞳は鬱陶しいまでに輝いている。

彼は私が子供の姿のままでいる理由を聞きたいのだろうか。

それともどのようにして子供の姿を維持しているかを知りたいのだろうか。

つい先ほど答えに近い言葉を発したのだが、あれだけでは彼には通じないのだろうか。

「それが貴方の役割と何か関係あるのかしら？」

「ないな。単なる好奇心だ。俺はあんたを知りたい。『伽羅』を知りたいんだ」

彼は見ているのは私なのだろうか。

それとも勇者の『手記』に登場した『伽羅』という魔王側近を知りたいのだろうか。

ため息を吐き出し、軽く頭を振る。

違う。彼が知りたがっているのは私ではない。

「貴方が知りたいのは『勇者』のことでしょう」

「伽羅」

「私の口から『手記』に書かれた情報を擬え、『彼』に近づきたがつている。違うかしら？」

「・・・・・・・・」

問えばフレドリックは口籠り俯いた。  
惑うように視線を彷徨わせる態度に、それも正確ではないかと気付く。

彼は『勇者』を理解したかった。

そのために私に近づき『彼』が過去を記した情報を元に行動を擬えた。

今までの勇者ではありえない行動だが、歪なフレドリックの行動としてなら理解できる。

欠けた何かを埋める為、無意識に何かを求めて動いている。

根本は懂れかと思ったがどうやら違うらしい。

彼の瞳に浮かぶのは焦燥。懂れなんて生易しいものではなく、飢え渴き何かを求め焦っている。

しかし何を求めているか判らないから惑い、そして私へたどり着く勇者の手記に何と書かれていたか知らないし、知りたいとも思えないが、反応から察するに細かく色々と書いてあったのかもしれない。

「伽羅は」

「何？」

「伽羅は口説かれ慣れてるな。誉めても近寄っても全然動揺しない」

「当然ね。貴方程度の語彙ならば日常茶飯事にもならないわ」

「そうか」

唐突に話を摩り替えたフレドリックは、困ったように眉を下げて笑った。

「だから伽羅は鈍いんだな。慣れ過ぎていて流すのが上手い」

「・・・貴方は私と違う意味で鈍そうね。全く慣れていないのか、周りを見てもいないわ」

「手厳しいな、伽羅は」

苦笑するとフレドリックは食事を再開させた。

「俺は食事が終わったら行きたい場所があるんだが」

「私たちの個人的な領域以外なら考えるわ」

「・・・本当に、伽羅は手厳しいな」

聞こえよがしのため息を無視するのも、私は全く慣れていた。

## 四日目【2】

フレドリックが連れて行って欲しいと頼んできたのは、屋敷の中にある一室だった。

僅かに迷ったが断る理由もなく結局承諾し二人並んで廊下を歩く。

窓の外から覗く空は相変わらずの暗雲で、雷が轟いていないので白檀様は仕事中だろう。

気配が幾つか庭にある。

覚えのあるもので、どうやら勇者一行は懲りもせずにまた庭を散策中らしい。

あの庭に見るほどのものは特になかったと思うが、ハークとアークの気配しか感じられず梅香は居ないようなので、何か話でもしているのかもしれない。

昨日と同じように監視しようか僅かに迷うが、どうせ大した情報も得られぬかと止めた。

彼らの相手は梅香の役目。交代したならあまりでしゃばると梅香の不興を買っだろう。

「伽羅？聞いているのか？」

「いいえ」

「・・・あつさりと言ったな。少しは悪びれたらどうなんだ」

「悪びれる？悪いと思ってないのに？」

「きつい女」

「そう」

眉根を寄せて聞こえよがしにため息を吐いたフレドリックは、私に向かい手を伸ばす。

髪に触れそうだった手を避け距離を開けると、じとりと眉根を寄せた。

「何で避けるんだ？」

「触られたくないからよ」

「魔王には赦していたじゃないか。梅香や、もう一人にも」

「貴方は私の同胞か何かになったつもり？魔王様と同列に扱えと？」

「いや、別にそうは言ってないが。・・・いいじゃないか、少し触れるくらいは」

「貴方は親しくもない相手に髪を触れさせるの？無言で伸びてきた手を拒絶しないと？だとしたら随分と寛容なのね」

「伽羅は狭量だな」

「そうね」

むつと唇を尖らせたフレドリックの子供っぽい発言を流すと、益々不機嫌そうに渋い顔になった。

蒼い瞳に陰が宿り苛立ちを混めてこちらを見ている。

しかし私の言葉に反論できる要素を見つけられず、それ故に黙り込んでいるのだろう。

下らない、と右の高い位置で結い上げている髪に触れる。

今日は白檀様がてづから髪を結って下さった。

元々人間に触れられるなど我慢ならないが、それ以上の意味でこの髪型を崩されたくない。

僅かに残された髪が頬を擦る。

癖の強い私の髪は櫛通りはいいのだが自然とくるくると巻いてしまう。

金色の波みたいだと誉めていただいたばかりのこの髪に、勇者が触

れるなど赦せない。

「綺麗だっと思ってただけだ」

「・・・何が」

「髪。金の奔流。光を紡いだみたいな色だ」

不貞腐れ、視線を逸らしたままフレドリックが告げる。

『伽羅は綺麗だね。髪は月光・・・よりも色が強いから、太陽の光を紡いだ色かな』

フレドリックの声に、忘れ難い声が重なる。

『瞳は緑がかった青？うん・・・ずっと昔に見た、南の国の海の色だ』

臓腑の底から苛立ちを掻き立てる、忘れたくとも忘れぬ声。

ぎりりと歯を咬むと、今はない面影を見つけた気がして自然と力の制御が緩む。

「伽羅！？どうした？」

「っ・・・どうもしてないわ」



フレドリックの声に正気に返ると、慌てて漏れた力を押し込める。気が付けば窓にひびが入り今にも割れそうに撓んでいた。

私は再生は出来ないの、菊花に伝心を繋ぎ修復を頼んでおく。

深呼吸を繰り返し返り漸く昂ぶる精神を治めたが、やはりこの世界は私には合わないらしい。

慌てた様子でこちらを伺う蒼い瞳に何でもないと言っていると訝しげな表情ながら彼は引く。

そう。大した理由などないのだ。

何故自分がここまで乱れるか、平時と同じように冷静でいられないか、その理由と原因はわかっている。

私は欠けた存在だ。

悪魔として存在するための『核』が損なわれている。

そしてその損なわれた『核』がこの地にあるから、私の心は安定しない。

『浮っている』との梅香の言葉は、比喻でも何でもなく私の正確な状態を指していた。

欠けた状態のままフレドリックの傍に居るから、より不安定になるのだろう。

時間が経つになれ徐々に酷くなっている症状は嫌でも自覚を促す。

「伽羅」

先ほどまでの怒りはなりを隠し、心配そうな表情でこちらを覗き込むフレドリックから距離を取る。

傷ついたように情けなく眉を下げた『勇者』に、気をつけなければ

力をぶつけてしまいそうだった。

「……目的地はもうすぐよ」

「伽羅」

「貴方はそこに行つて何を見たいの？」

「心配も、させてくれないのか」

自嘲して俯いたフレドリックは、首を振ると気を取り直すように笑った。

その笑顔はいかにも作つたものだとなる表情だったがあえて何も言ない。

どうしようもない嫌悪感を宥めるだけで精一杯だ。

「今までの勇者が案内された部屋は、今俺が居る部屋じゃない」

「そうね」

「だから、そこからの景色を見てみたかった。記された場所は最上階にある一室。この城の何処よりも高い場所に眺えた部屋だな？」

「ええ」

その一室を与えたのは白檀様で、数百年の時を跨いでその部屋を自室へと変えたのは『勇者』だ。

フレドリックとは違い、正しく『勇者』と表現する相手だった。

「俺はその部屋で見たいものがあるんだ」

「その部屋で？」

見たいもの、と言われ首を傾げる。

何かあっただろうかと思案するが、あの部屋に見るものはなかったような気がした。

勇者が居る数日の間に1、2度足を踏み入れる程度なので記憶にないだけなのかもしれないが、それ以前に興味を持っていないので覚えていないのかもしれない。

基本的にあの部屋に足を踏み入れるのは勇者だけだったし、私達に興味も持っていなかった。

否、現在進行で興味はない。

「俺は見つけなきゃいけない」

「何を？」

思わず口を突いて出た疑問は、曖昧な笑顔で誤魔化された。

自分に違和感を感じているフレドリック。

もしかしたら、あの部屋に欠片を見つける手がかりでも置いているのだろうか。

欠けた何かを見つければ、彼は勇者として満たされるのだろうか。

蒼い瞳を見詰め返し、視線を廊下の先へ移す。

どちらにせよ、答えはこの先にしかないのだろうか。

## 四日目【3】

久しぶりに足を踏み入れた部屋は、覚えている頃と変わっていないようだった。

流石に百年単位で間を置いているため詳細までははっきりと記憶していないが、雰囲気は何も変わらない。

部屋に明かりをつけて見渡せば、十二分の広さを持つ室内の全域が露になった。

備え付けの本棚に飾ってある絵画。

白檀様のよりは一回り小さいベッドがあり、備え付けのサイドボードの上には一輪挿しが乗っている。

本棚の隣には執務机があり、その横のベッドとの間にベランダへ抜ける窓がある。

埃一つない部屋は白檀様の力で時を歪めているからだ。

床に敷かれた毛足の長い絨毯と、夜になれば月光すら透かす薄い色のカーテン。

白檀様の城の一室でありながら、『勇者』が持ち込んだ私物で埋まった部屋はどこか違和感を感じた。

「これが・・・勇者の部屋」

入り口付近で足を止めていたフレドリックが、引き寄せられるよう室内へと踏み入る。

きよろきよろと辺りを見渡し、まるで記憶と重なるようにぶつぶつと何事か口ずさみながら一つ一つを確認していった。

ドアにもたれてそれを眺めていると、不意にフレドリックが顔を上げる。

真っ直ぐな瞳でこちらを見ると、操られたように緩慢な動きで手招いた。

首を傾げるが訝しげにしている私の様子も気付かぬように彼は同じ動作を繰り返す。

違和感を感じながらもとりあえず従うと、近くまで来た私にフレドリックは満足気に頷いた。

「伽羅」

「・・・え？」

呼び声に混じった『何か』に首を傾げる。

感覚に触れたのは微小なものだが、波紋を広げるように変だと直感が訴えた。

しかし何が変わかは見分けられず瞳を眇める。

警戒する私に微笑みかけた彼は、本棚の奥を指差した。

「ここにある、伽羅」

「フレドリック？」

「ここを開けて欲しい。今の俺では開けない」

淡く苦笑したフレドリックは本棚を指差すと中心にある留め金の掛けられた箱を指差した。

見覚えがあるようなないようなそれに近寄ると、覚えのある力の波動が伝わってきた。

随分と弱くなっているが、間違えるはずがない。  
この力は、私のもの。

顔を上げて傍にいるフレドリックを見詰めると、期待を込めた眼差しを向けていた。

まるで子供のような無邪気な笑顔に益々違和感が深まるが、何が違うと断言出来ずに押し黙る。

「開けてくれないか、伽羅」

「これが貴方が求めていたもの？」

「そうだ。・・・いいや、違うな。そうであり、違う」

自分でも理解していないのか、否定と肯定を繰り返すフレドリックにどうしたものかと思案した。

これを開けるのは容易い。

鍵があるがこれの施錠は目で見える鍵ではなく、力で施してある。人間にしては強い力なので、場所も考えると『勇者』自らが封を施したもののだろう。

この箱自体もどこかで見たような気がするが、はっきりと思い出せない。

私の力を感じるのだから私に関連した何かが入っている可能性が高いが、私に関連する何かを勇者に渡した記憶もない。

黙っていると、もどかしげにフレドリックがまた声を掛けてきた。

「伽羅、開けないのか？」

「・・・開けないわけじゃないわ」

「なら、早く開けて欲しい」

「その前に一つ確認するわ。これは魔王様に害為すものではないのね？」

「ああ」

「万が一害を為すものであった場合、私は貴方を攻撃するわ。それでも敢えて受けると誓えるかしら？」

「・・・言質を取るつもりか？」

「ええ。私から一方的に貴方を攻撃することは赦されないけれど、貴方が誓いを破ったのなら別よ。意味のない攻撃に言質があれば防衛は赦される。この世界の規律の一つね。誓えるのかしら？」

淡々と問えば、きつと柳眉を逆立てたフレドリックは私に掴みかけらんとばかりに顔を寄せ、齒軋りしながら頷いた。

酷く立腹しているようだが、言質を取れたなら私も心置きなく箱の封印を解除できる。

箱から感じる力程度であれば、万が一白檀様に向かっても先に私が打ち消せるし、それを理由に勇者への攻撃も認められる。

理由なき力の放出に対する報復だ。殺せなくとも傷は負わせられる。それであるなら条件としては我慢できるので、私は箱に掌を翳した。私の力を僅かに流し、箱を戒めていた封を握り潰す。

ばきん、と甲高い音を立てて封は弾け、それをそのままフレドリックへ渡した。

頬を赤く染め興奮したように瞳を輝かせた彼は、恭しい手つきで掌ほどの箱を受け取る。

両手で持ち、徐に蓋へと手を伸ばした。

「・・・これが」

感動を堪えるように震えた声を出したフレドリックは、箱の中身へ釘付けになる。

視線より随分上にある上に、ちょうど蓋が邪魔をして私には中身が見えなかった。

しかし箱を開けたそこから感じる力は微弱で、警戒するにも当たらない物体だと推測はつく。

確認させると訴えるべきか、それとも後に勝手に確認するか。

どうしようかと考えていると、私の前にフレドリックは跪いた。

「伽羅」

「何？」

「これを、覚えているか？」

私の視線の下に移動した箱の中身を、よく見えるように傾ける。

そうして目にしたものに、私は僅かに驚いた。

私の力を纏った『何か』。

それは在りし日に私自身が作り上げた、薔薇の形をした力の結晶だった。



## 四日目【4】

一見するとクリスタルによく似た物質で出来ている薔薇。

今よりも尚未熟だった力の名残を感じさせるそれは、完全な黒一色ではなく所々赤い線が入った中途半端な物質だった。

黒は魔族の力の象徴。つまり、純然なる魔力で出来ている証明だ。

これが天使族の作ったものなら白。つまり同じ『力』と称されても天力てんりきと呼ばれるものの結晶になる。

赤い線は私の中で一番強い火が押し出てしまっている所為だ。

力の制御が仕切れない未熟者が力を結晶化させると単色の結晶化が行えない。

だが今の私は当然単色の結晶化は片手間で作れる作業だ。

それがここまで美しくない出来であるのなら、単純に数百年は昔の作品だということだろう。

黙り込んだ私にさらに見せ付けるように薔薇に触れようとしたフレドリックを制する。

確かに人から見れば美しいものだろうが、これは人の身には過ぎた力を持っている。

幾ら未熟であったとしても、私は昔から魔族だ。

その私が作った純粹な力の集まりに触れたら、勇者であろうと今の状態のフレドリックはただではすまない。

彼が触れる前に薔薇を自分の掌に移動させ、まじまじとその作りを覗き込む。

確かに私の力の結晶なので過去に私が作ったものはずだ。

しかし在りし日に作成されたそれを何処で見たか正確に思い出せない。

大した記憶ではないからだろうけれど、少しだけ頭に引っ掛かった。

「覚えてるか、伽羅」

「・・・いいえ」

「そうか。　　そうだろうな。君にはその程度のもんだろう」

続く言葉に、私は薔薇から顔を上げた。

おかしい。何がおかしいのか気付けない。

こちらを見るフレドリックの瞳は疑問符を浮かべていて、何も変わっていない。

気のせいだと、違和感を振り払うために緩く頭を振る。

「貴方はこれを知っているの？」

「俺か？ああ、勿論知っている。これは先代の『手記』に書かれていた。必ず見つけて、あんたに見せるようにと」

「・・・私に、これを？」

何の意味があるか全く判らない。

先代の勇者の滞在期間は四日だった。

その間にこの薔薇を見せられた覚えはないし、話題にすら上っていないはずだ。

この物体は私にとっては単なる未熟な力の証。不恰好で歪な物体以外の何ものでもない。

小さく鼻を鳴らし、再び手に取ろうとしたフレドリックの手を避ける。

不服そうに眉を寄せた彼に、仕方なく説明してやることにした。

「やめておきなさい」

「何でだ？」

「触れた瞬間、力の強さに押し負けて内部から破裂するわよ」

「破裂！？」

「ええ。・・・貴方、魔力の能力値はそれほど高くないわね」

「ああ、俺は魔法はからつきしだ」

「でしょうね。在りし日の力の片鱗も感じない。だから止めておきなさい。貴方では弾け飛ぶだけだわ」

「だが、俺は」

「・・・仕方ないわね」

それでも尚手を伸ばすフレドリックに、ため息を一つ吐くと視線に僅かに力を籠める。

「なっ！？」

息を詰めたフレドリックの前で掌から宙に放った薔薇に力を向ける。漸く形を維持していただけの物体は、ほんの僅かな力で甲高い音を立てて碎け散った。

舞い散る欠片すら残さず全てを消し去る。

残留しそつになる力も微量なものに変化させ塵となす。

目の前で壊された薔薇に口を開けて眺めていたフレドリックは、蒼い瞳に怒りを宿して鬼気迫る表情でにじり寄った。

私がこの姿でなければ胸倉を掴まれて持ち上げられていたかもしれ

ない。

それくらいの迫力を有し、鋭い怒りをぶつけて来る。

彼は怒りの奔流を納め切れないとばかりに、掠れた声を発した。

「何故」

「・・・」

「何故、破壊した！これは、この薔薇は、俺にとって特別な特別な、ものだっただ！」

「私に見せたことで役目は終えた物体でしょう。どちらにせよ『人間』が扱うには過ぎたものよ。それに嚴重な封を施さなければ維持も出来ぬほどに弱体化していたわ。付け加えるなら移動できたとしても、封を施した状態のあれを人間では解除できないわ。少なくとも、今現存する人間では、ね」

「それでも、俺は、俺は！！」

「何故、と貴方は聞いたわね。明確な理由を教えてあげるわ。貴方、あれが存在する限り絶対に触れようとするでしょう。それだと困るのよ。貴方の力ではあれは扱えない。それなのにあれがある限り諦めない。・・・万が一、私の力が元で貴方に傷をつけたなら、それが一方的なものであれば責任を取るのは誰だと思っ？」

「・・・それは」

その時責任を取るのは、フレドリックでなければ私でもない。

『魔王』である白檀様だ。

『魔王側近』の地位にある私の力で、白檀様に手を出されていない状態で彼を傷つければ、天使に付け込む隙を与える。

それは赦される所業ではない。

目の前にあったあの薔薇は、害をなしても特にはならない。

例えフレドリックが気にしていたとしても、私の所為で白檀様に火の粉が降りかかるのは防がねばならない。

ただでさえ自分を抑えるので精一杯の状態が続いている。

失態を重ねれば、梅香により白檀様の傍から排除されるはずだ。それだけは我慢ならない。

きつと目の前の彼は私に都合よく勘違いしてくれている。

責任を取るのは白檀様でなく『私』だと思っているだろう。

それ故に強く出れないのなら、彼の感情を利用させてもらうのに躊躇が生まれるはずがない。

「勇者の安全が私にとっての優先事項よ。貴方も見たでしょう？私  
は貴方のためになら自分の眷属を手には掛けるのも躊躇しないわ」

「伽羅」

「ここに滞在する限り、私は貴方を傷つけるものを排除するわ」

「・・・伽羅」

「理解しろとは言わないわ。それでも納得しなさい」

つい昨日口にしたばかりのものと同じ言葉を発する。

そう。彼に理解など出来るはずがない。

そもそも根本を理解していないのだから。

私は悪魔で彼は人間。

歩み寄れる距離になく、歩み寄りたくもない相手。

切なげに瞳を揺らし拳を握るフレドリックの感情など私には意味がない。

私の世界は白檀様で作られている。

あの日、誰からも蔑まれ疎まれた私を拾ってくださった彼こそが唯一で絶対。

だから私は決めたのだ。

彼の傍に居ると心に誓ったその瞬間に、何よりも強い覚悟をしたのだ。

彼のために死ぬのではなく、生きる覚悟を決めたのだ。

## 閑話【梅香】

どこかで砕けた力の余波に、梅香は顔を上げる。  
随分と微弱で未熟な力のようにだが、よく覚えがある身近な相手のものなので間違えない。

「伽羅の力の残滓か」  
「そのようです」

白檀の後ろに控えたまま首肯する。  
彼にとつても養女むすめの力を違えるはずがない。

「力の結晶を砕いたようだな。それにしても随分と微弱なものだ。あれは、今のものではなく昔の伽羅の力を使ったものだろう」  
「そうですね。今の伽羅であれば、もっとましなものを作ります」  
「砕いた、となれば動きがあったと判断して構わないな」  
「はい」

曖昧な言葉の羅列になるが、それは伽羅の動きを確認していないからだ。

その判断は白檀が下し、梅香も『是』とそれに倣った。  
理由は単純で目的を達成するために下手な介入はしない方がいいと判断したからだ。

白檀が、そして梅香が求めるものは、下手に伽羅に動かれるより自然体のままで勇者と接近してもらった必要があった。

腰掛けていた椅子から白檀が立ち上がり、慌てて一步下がる。  
生まれた瞬間から主と定められていた彼は、梅香にとって絶対の存在だ。

魂を尽くして全てを捧げると誓っている。

それは自分の願いであり、同時に梅香が愛する相手の望みだからだ。  
執務室にある窓に近寄ると、戯れに雷を落としながら白檀が笑った。  
笑顔はとても鮮やかで穏やかな、まるで伽羅を前にした時と同じようなものだった。

優しげに見える表情の薄皮一枚下にあるのは、<sup>とくろ</sup>垢を卷いた深く昏い闇。

狂気と狂喜の合間で揺れる感情を敏感に悟り梅香も微笑む。

「予定より、時間が掛かったな」

「ええ。ですが、もうすぐです。僕たちが欲したものはもうすぐ手に入ります」

「傷一つ与えてはいけない。欠片も損なわれてはいけない」

「御意に」

「ああ・・・本当に長かった」

吐息に近い囁きを漏らした主につられ、雷鳴轟く暗雲を眺める。

暗闇の中から枝分かれして煌く光は幼馴染の髪の色を髣髴とさせ、自然と口の端が持ち上がる。

失われてから自分たちの時でも軽く数百年が経った。

欠けたままの存在は全てを満たさぬ飢えにもがきながら、一切を感じさせぬ美しさを保ち続ける。



万全の形のものが欲しい。欠損なく傷も残さず、美しいまま手に入りたい。

それは、白檀だけでなく梅香の想いでもある。

「綺麗に壊せると思うか」

「当然です。白檀様の直々の指示により動きました。失敗などあり得ません」

「そうか」

頷いた白檀はもうこちらに興味は失ったとばかりに、幾つもの雷を同時に動かした。

兎戯に等しいそれを、幼馴染もどこからか見ているだろう。

知られていないと思ってるらしいが、伽羅が雷を好きなのは梅香も知っている。

伊達に何百年も傍にいたわけじゃないのだ。

稲光を上げて勢いをつけた稲妻が闇を裂いて大木へと降り注ぐ。

火の手が上がるのではなく消し炭とした威力に、主の機嫌の良さを感じて梅香は瞼を閉じた。

決行の時は、もう、すぐ目の前に。

## 四日目【5】

昼食は仲間と摂ると背を向けたフレドリックを部屋まで案内すると、開いた扉から室内を見る。

双子の眷属が目に入り彼らが頷いたのを確認してから部屋を辞した。

昼食はどうかと思案しながら適当に歩いていると、不意に伝心が入る。

『やあ、伽羅。勇者君の相手ご苦労様』

『何故かしら。貴方に言われると口先だけのねぎらいにしか感じないのは』

『それは君が捻くれているからだろ。僕に二心はないからね』

『よく言うものね。用件は？』

『昼食と一緒に摂らないかと思つてね』

『白檀様は？』

『白檀様はもう昼食は摂られたよ。僕は君を待っていたんだけど、駄目かな？』

『・・・・・・・・・・』

どうせ拒否権はないのに、態々伺う形を取った梅香に、聞こえるようにため息を吐く。

すると鮮やかな笑い声が伝わり、瞬間で景色が変わった。

ワインレッドの絨毯に黒の革張りのソファ。さらに応接用の机と、部屋の隅に本棚が一つ。

壁には絵画が一枚だけ飾っており、その絵に眉間に皺が寄る。

いつか勇者が持ってきた絵画を部屋に飾るなんて悪趣味な行為を平然とやってのけるこの部屋は、目の前の幼馴染がこの城で私室としている部屋だった。

「強制転移？フェミニストを気取る貴方らしくない荒業ね」

「こちらの方が早いだろう？」

「白檀様は屋敷内の移動手段に転移は多用するなと仰ったわ」

「この程度で嫌味を言われるような方ではないさ。僕より君の方が知っていると思ったけれど」

「無論よ。ただ注意されなくとも気にしろと促しただけ」

促されるままにソファに腰掛けれる。

応接用の机は食事を摂るためのものではないが、十分な広さがあるので気にはならない。

相手が梅香なら余計に気にする必要はないだろう。

それ以前に招いたのが梅香なのだから、本来ならあちらが気にしてもう少しましな場所に呼び出すべきだ。

無言のまま眼差しだけで訴えると、ひょいと優雅に肩を竦めた。

「君は食事の場など気にしないだろう？学生時代だってどんな場所でも一番漢らしく堂々としていたし。上位の魔物が住む森に放り込まれたって、男子生徒が怯んだ死体の前でも平然と肉を焼いて喰らっていたじゃないか」

「貴方だって人のことを言えないでしょう。隣でそれを見た生徒が吐瀉しても平然と私の焼いた肉を奪って食べていたじゃない」

「そう。僕たちは同じ境遇を過ごしてきた仲なのだから、今更取り繕う必要もない。互いの嫌な面もことん知り尽くしているしね」

「それもそうね」

一つため息を吐き同意すると、梅香は笑みを深めた。

何年経つても胡散臭い笑顔だと心の中で思いながら改めて料理に視線をやり目を丸くする。

そこに置いてあったのは『オムライス』と呼ばれる私の好物の一つだった。

「これ、どうしたの？」

「さつき黒方に会いに行ったら丁度いいからと渡されたんだ。君の昼食用らしい。確か、君の好物だっただろう？」

「ええ。黒方しか作れないからこちらに来てからはご無沙汰だったのだけれど」

ほかほかと湯気を立てる卵の黄色い表面には、赤いソースで文字が書かれている。

字体は見覚えがあるもので、多分香だろう。

『お姉さま、愛してます』と中々の長文を器用に二段に分けて書いている。

好奇心を刺激されて梅香のも見れば、そちらには普通にソースが掛けてあるだけだった。

「何、僕のものにも何か書いてあると思ったのかい？」

「別に」

「素直じゃないな。表情は嬉しそうにしているのに」

「・・・・・・・・」

「気付いてないかもしれないけど、ちょっと機嫌よさげに笑ってる」

突っ込まれてすつと表情を引き締める。

腐れ縁と称されるものだが、伊達に長い付き合いをしていない。

他人から判らぬ変化であつても長年の経験の差か、梅香は割りと私の表情を読むのが上手い。

必要がなければ基本的に表情を作らないため感情が判りにくいと言われる私だが、素のままの私を見続けているだけに梅香は感情を読み取るのが得意だった。

もつともそれはお互い様で、どれほど上手に機嫌を誤魔化そうとしても私には梅香の機嫌が読み取れる。

大して嬉しくない特技だが役に立つことはあるので重宝している。

実際今も胡散臭い笑顔でいるが、見た目以上に彼の機嫌がいいのは判っていた。

何かいいことがあったのか知らないが、必要があれば向こうから話してくるはずだから敢えて問わない。

黒方に教わった作法どおりに食事の前に手を合わせると祈りの言葉を呟く。

梅香もそれに倣って呟くと、スプーンを手に取りオムライスを掬い取った。

口内に入れてほろりと崩れる卵の柔らかさと、絶妙な組み合わせのソースとライス。

それ一品で他には何もないが、私にも梅香にも十分な食事だった。きっと別室で食事を摂っている勇者達がこの光景を見ると驚くに違いない。

何しろ昼とはいえ彼らには当たり前前にコース料理を出しているから。

暫く無言で咀嚼していると、不意に梅香が顔を上げる。

悪戯っぽく光る瞳に、これは来たなと身構えた。

私が嫌そうに顔を歪めているのに気付くと、梅香はにこりと楽しそうに笑った。

「ところで伽羅。午後には勇者君たちの衣装を決めたいんだけど」

さりげない調子で告げられ、私は思いため息を吐き出した。

## 四日目【6】

にこやかに笑いながら腕を組みゆったりとした体勢で立つ幼馴染を思い切り睨み付ける。

視線に軽蔑の色を籠めてみたが、さらりと受け流した彼はひらひらと手を振ってきた。

勇者一行の衣装を選ぶので付き合えと言われたのを了承した私は、何故か自分自身が幾度も衣装を取り替える羽目に陥っている。

先ほどから楽しげにこちらを見ている梅香は一切助けるつもりがないらしく、ドレスを選ぶはずのシェリル本人は、次から次へドレスの見本が描かれた本を指差しては私に見本を見せると願っていた。

実際どんな印象が判りにくいというので付き合ったが、気がつけばもう二十着は見本を見せている。

しかも彼女はどうか考えても自分の参考にする気がないのが感じ取れる上、調子に乗った他の面々までドレスを指定してきた。

いい加減邪魔をしると伝心で幾度か訴えているのに、何も聞こえないとばかりに返事一つしない幼馴染に腹を立てる。

ふつつとした怒りを溜めていく私は、ついに我慢の限界に達した。

指差されたのは真っ白なドレス。

小花のレースが幾重にも連なり下に行くほど色を濃くするそれは、ゆったりとしたドレープを描く独特な作りをしていた。

髪飾りも同色の白で出来たティアラ。

さらに柔らかな真珠のピンを、幾つも緩やかにアップにした髪に飾らねばならない。

着替え自体は簡単に出来るが、それ以前に嫌いな配色にきつく臉を閉じた。

「・・・」

「さあさあ、そろそろシェリルちゃんのドレスを決めようか。俺のお勧めはこのドレス。深い青色のグラデーションが綺麗だろう？スリットも浅めだし、体に沿ったデザインは華奢な体つきのシェリルちゃんに似合うと思う」

「え？でも、私よりキャラちゃんのドレスを」

「実は伽羅のドレスはもう決まってるんだ。魔王様直々に選ばれているから変更は出来ないし、彼女も力の使いすぎで疲れているから開放してやって欲しいな」

「あ・・・そうよね、もう何着もお願いしてるもんね。ごめんなさい、キャラちゃん」

「いいえ、お気になさらず。それより私も梅香の勧めたドレスに賛成ですわ。きっと青はお似合いです」

実際は絵すら確認していないが、笑顔を作り肯定しておく。

するとその気になったのか嬉しげに微笑んだシェリルは漸く私から興味を移すと、仲間達の意見を伺いながら見本誌を確認し始めた。面倒な時間からの開放に息を吐き出す。

私の我慢の限度を良く理解している梅香の絶妙なタイミングの良さに腹は立つが、一応助けてくれたのだから苛立ちを沈める。

どうせ怒りをぶつけたとしてもものりくらりと躲されるだけだ。

無駄な行為をすることはない。

それよりも私の意識を奪ったのは、彼の発した『魔王様を選んだドレス』に関してだ。

私のドレスを選んでいてくれたとは聞いてない。

視線で問いかけるが、笑みを深めるだけで疑問を解消しようと一切思っていないらしい梅香に一つため息を落とした。



そのまま僅かに顔を俯かせ嬉しさに口元を綻ばす。  
選んでくれた理由がなんであろうと、白檀様が直々に私のためにご用意くださるのなら、私に否があるはずがない。

白檀様がドレスを選んで下さるのはパーティが十回あれば一回くらいの頻度になる。

私は毎回でも選んでいただきたいが、毎回は白檀様に負担が掛かると元の世界に住む執事に窘められ、大抵は彼が選んでいた。

基本的に私は自分が身につけるものに頓着はないため、選ばれたドレスに文句はない。

文句はないが、白檀様が選んでくださったなら歓喜が沸く。

機嫌が良くなった私に気付いたのか、瞳の色とよく似た碧のドレスに身を包む私を梅香が抱き上げ腕に乗せた。

高くなる視界に瞬きをすると、ぐっと顔を近づけ瞳を覗きこんできた梅香は、吐息が掛かる距離まで来るとくすくすと笑う。

『嬉しいか、伽羅？』

『黙っていたのはこれ？』

『どう思う？』

『どうでもいいわ。ただ、そうね　　嬉しいわ』

想いを混めて呟くと、梅香の瞳が丸くなる。

そしてふわり、と珍しくも純粹に照れたようなはにかんだ笑みを浮かべた。

目尻を赤く染め僅かに視線を逸らした梅香に、私も驚きで目を丸くする。

子供時代ならともかく、年を経ることに私とは違った意味で感情を

隠すのが上手くなった梅香は、それでも今はきつと誰が見ても判るように照れている。

一年に一度あるかないかの表情の変化にまじまじと観察していると、彼は表情を隠すように片手で口を覆った。

ここから見える耳までも僅かに赤く染まっているため、あまりその効果はないがあえて口に出さずにいると、暫くして漸く落ち着いたらしい梅香は情けなく眉を下げて苦笑した。

「君は」

「？」

「君は、本当にあの方へのみ反応するんだな。昔と少しも変わらない」

あの方とは言わずもがな白檀様を指している。

私は別に白檀様に関してのみ反応する訳ではないが、感情のふり幅の大きさは比較できないもので、ある意味では彼の言葉は正しいのだろう。

しかしそれはそのまま梅香にも返る。

生まれながらに白檀様に絶対の忠誠を誓う彼は、白檀様を基準に生きていく。

忠誠は悪魔の本分だ。心の核を担う想いは、梅香とて持っている。

その部分では私と梅香はよく似ている。

表に出る性格は全く違うものだが、根本が酷似しているためにここまで付き合いが続いたのかもしれない。

そうでなければとうに互いに殺し合っている。

昔と比べれば随分と性格は丸くなったが、やはり梅香は梅香のままだ。

「急にどうしたの？」

しかし先ほどまで伝心で話をしていたのに、態々声に出して切り替える理由が判らない。

今更そんなことを確認せずとも、それこそお互いに誰より理解している。

梅香も私もずっと白檀様に仕えるために努力し続けて、その努力がいかほどのものか近くで見ていたのは互いなのだから。

今回の行為には意味があると直感が訴えているが、角度により僅かに色を変える藍色の瞳から情報は読み取れない。

ただ穏やかに微笑んだ表情だけは嘘がなく、それも話す気はないのかと首を振った。

ぱさりと音を立てて結っている髪が彼の胸に当たる。

金色のそれを一房掴むと恭しく唇を落とした。

「魔王様に関してでしか君は笑わないって話だよ」

「.....」

わざとらしい態度に瞳を眇めるが、先ほどまでと表情を一変させいつもどおりの胡散臭い笑顔に切り替わった梅香は掴んだ髪を放すと機嫌良さそうに頭を撫でる。

幾度も幾度も髪に触れる仕草は優しいものだったが、私は気が付いていた。

彼は私を見ているようで、見ていない。

藍色の瞳が映しているのは、私の後ろにいる人物。

痛いぐらいの視線をこちらに向けている、フレドリックその人であるということに。

## 四日目【7】

私を抱き上げて頬に手を滑らした梅香の瞳は、挑発的な色に輝いている。

緩く弧を描く唇、わざとらしく擦り寄る頬に嘆息して俯く。

フレドリックの怒りを煽って何がしたいのか目的は見えないが、彼の挑発行為のあたりを自分が全て喰うのだと知っているためにため息が喉までせり上がる。

それを辛うじて堪え近くにある自分よりも色が濃い肌に唇を落とせば、表情こそ変わらずとも明確な動揺が腕を通して伝わり少しだけ溜飲が下がった。

フェミニストを気取る女誑しのらしくない態度に、彼にだけ見えるように晒えば、その柳眉がきゅっと顰められた。

『私を利用するのだから、少しくらい動揺すればいいのだわ』

『　　っ、卑怯だぞ、伽羅』

ほんのりと目尻を赤く染め上げた幼馴染が、自分に向ける感情はきつちりと理解している。

あえてしようと思わないが、その気になれば梅香の感情を揺さぶるのは容易いことだ。

普段しないことをすればいい。

作ったものだとして理解していても、それだけで梅香は動揺する。

とても判りにくく湾曲だが、白檀様に忠誠を、そして私には別のものを彼はきつちり捧げてくれている。

彼の師匠と同じで女性に慣れている彼の反応とは思えない初心な反応だが、鼻で笑ってやれば悔しげに睨み付けて来た。  
余裕たっぷりの態度で彼の腕から降りると、じとりとした眼差しでこちらを見ている梅香から視線を逸らさぬまま首を傾げた。

『それで、私にどう動いて欲しいの？』

『君は何も知る必要はない』

『それが白檀様の判断？』

『そうだ』

『判ったわ』

白檀様の判断に否やはない。

瞬き一つを了承の返事とし、初咲きの薔薇のような色合いのドレスを翻す。

力を使いそれを下部から黒へと変色させながら向かう先は、一人仲間から外れた勇者の元だ。

何も知らされないなら、知っている任務を全うする。

白檀様が勇者の世話をしろというのなら、彼の望みを出来うる限り考慮するのが役目だろう。

「フレドリック。貴方はどれがいいか決まったの？」

「男が何を着ても大した違いはない。それとも、そちらはそんなに奇抜な格好で来るつもりか？」

「いいえ。では服の意匠がどれでも構わないなら、貴方がこの場に居る必要もないわね。どうしたい？」

「この場から離れたい。俺と、あんただけで」

「他のお仲間はどつするの？」

「ハーク様とアーク様が居れば今はいいだろう？あんたの力で移動させる」

「場所は？」

「・・・この城の裏手にある、湖のほとりに」

こちらを見るフレドリックの瞳に眉を寄せる。

覚えのある感覚に嫌な感じだと瞳を伏せた。

『行ってくるわ』

『ああ。楽しんでおいで』

『嫌味はよして』

後は頼むと言外に告げれば、からかうような調子で軽く返された。

私が楽しめるはずがないと知っているだろうに、意趣返しのもりだろうか。

室内に居るハークとアークに視線をやれば、他の一行に気付かれぬよう彼ら二人は頭を下げた。

「移動するわ」

「ああ」

本当なら歩いて行きたいところだが、どうやら機嫌が下降している彼の相手は面倒そうなので力を使うことにする。

梅香の言葉を否定しなかったが、あの程度で疲れを覚えるなら白檀様の傍に居る資格がない。  
離れた場所から私たちを見詰めるもう一つの視線に気付いたが、あえて反応せずにそのまま力を解放した。

「この場所が」

美しさの欠片もない、湖とは名ばかりの湿地のほとりで感極まっているフレドリックを眺める。  
一体この土地の何処に彼の心を震わせるものがあるのか、私にはさっぱり理解できない。

他の場所と変わらずこの湖も日が差さない。  
じめじめとした空気に、湿地だからこそ苔むした植物。  
力を使い一定以上は近づけないようにしているが、虫も多いし空気もよくない。

湖の反面以上は良く判らない植物で覆われ、今居る場所からは水面すら見えない。  
例え見えたとしても生態系が著しく崩れている湖で、美しい生き物は期待できないだろう。

七色に輝く鱗を持つ魚や、純白の羽を持つ鳥。  
そんなものの代わりに得体の知れない鳴き声の蛙や、闇のおかげで昼間でも飛ぶこうもりが居るくらいだ。



胸一杯に空気を吸い込み深呼吸を繰り返しているが、人体にいい影響を与えるとは思えない。

止めるべきか放っておくべきか。

彼の行動を静かに眺めて迷っていると、くるりと嬉しげにこちらを振り返った。

その顔に先ほどの不機嫌な影は見当たらず、機嫌が直ったのかと首を傾げる。

明らかに趣味が悪い湖なのに、こんな場所で機嫌を直すとは、人間の感性は理解できそうになかった。

腕を組んで立っていると、あっという間に駆け寄ってきたフレドリックが瞳を輝かせてきた。

また何か面倒ごとでも頼まれるのかと嘆息すると、一切を気にせず大げさな仕草で湖を指差す。

嬉しそうに瞳を輝かすフレドリックに、面倒だと思いながらも仕方なしに口を開いた。

## 四日目【8】

「・・・どうかしたのかしら？」

「この場所で、力の結晶化を見せてくれ」

無駄に瞳を輝かせて嬉しげに表情を崩したフレドリックに、軽く首を振り嘆息した。

指差された場所は湖の水面で、濁った水に瞳を眇める。

力の結晶化を見せろと言うのであれば、つい先ほど壊したあの花をこの場で咲かせろと言っているのと同じだろう。

何を拘っているのか知らないが、全く面倒なことだ。

「いいだろ！あんたの力なら結晶化くらい難しくないはずだ」

「そうね、簡単だわ」

「ならいいだろう？この湖の一面に、昔と同じように！」

「昔と、同じ？」

「そうだ。さっきあんたが壊した力の結晶は、初代が取っておいたものだ」

「初代・・・」

「魔王に命じられたあんたが、勇者に力を見せたとき。この湖一面に力の結晶の薔薇を咲かせた。薄暗い闇の中に咲く黒い薔薇。それはこの地の闇と違う黒曜石のような黒。花自体が薄く発光し、花弁の先に混じる赤い筋が美しかったという」

「・・・」

熱い光を瞳に宿したフレドリックの言葉に、私は漸く思い出す。

どこかで見た覚えがあると思ったのだが、あれは遙かな昔、初代の『勇者』に請われ白檀様に命じられて発現した力の名残。

暗雲に雷を轟かせた白檀様は、力を操りながら笑っていた。この湖にお前の美しいと思えるものを力で現せ、と。

私が選んだのは咲き誇る薔薇。

本来の世界で初咲きの薔薇を執事に贈られたばかりだった私は、美しいものと聞き薔薇を連想した。

そして未熟な力を操り、この湖の隅々までを薔薇で覆い尽くしたのだ。

黒く輝く薔薇に勇者は感嘆の声を上げ、何時間もこの湖の辺でじっとしていた。

蒼い瞳を興奮で輝かせ、静かな声で『美しい』と呟いて。

忘れていたのはその記憶を留めておく価値がなかったから。

『勇者』がああ光景にどんな意味を持ったのか知らないが、私にとつては何の意味もない行為でしかなかったからだ。

白檀様の命令により動いただけで、私の自発的な意思はそこにはない。振るった力に結果がついた。ただそれだけのこと。

あの時の薔薇を『勇者』はこっそりと持ち帰っていたらしい。

昔の『勇者』であればこそ出来た行動だが、フレドリックが何故あの力の結晶に拘るのかは判らない。

彼の目の前で碎いたからこそ余計に執着したのなら、そこには何らかの理由が存在する。

だが今の『勇者』にその理由を見出せない。

まだ何かが足りない。

私が知らない、あるいは私には知らされていない、何らかの情報があ

纏めてある髪の毛先を指で弄れば、癖は強いが櫛通りはいいそれはするりと指から解けて落ちた。

知る必要はないと梅香は告げた。そしてそれは白檀様の意思だと。

「判ったわ」

「伽羅！」

「ただし、触れるのは許さない。私の力はある時より遙かに強いものよ。近づくだけで貴方の体にはいい影響を与えない」

ぱちり、と指を鳴らすと視認出来る色で結界を張る。

私のすぐ目の前までを力で囲い、距離がある湖から僅かにも漏れないようにした。

「この結界は力の余波を防ぐものよ。あちらからの力の影響を受けないよう遮断した。けれど、この結界はこちらからは容易に超えられる」

「・・・・・・」

「この意味、判るかしら？」

「俺を試すと言うのか？」

「その通り。私は貴方がここから抜けないと信じるわ」

「俺は」

「約束はいらない。けれど一つだけ覚えておきなさい。この結界は一方通行よ。入るのは出来ても出ることは出来ない。花に魅せられて潜り込めば、生きて出れないと思いなさい」

じつとフレドリックをの瞳を見詰め、彼が頷いたのを確認して背を

向ける。

背中に羽を出現させ、一気に上空まで舞い上がった。  
風を支配し勢いをつけた先から湖を見下ろす。

フレドリックの姿は虫のように小さくなり、何故かこちらを見上げて両腕を振っていた。

その姿を軽く無視して、呼吸を整え力を満たす。

湖の広さは大体城の二つ分ほど。

昔はあの広さ一杯に力の結晶化を行うのはとても疲労したものだ。  
だが今の私の力は昔と比べ随分と研磨されている。

瞼を閉じてイメージを膨らませる。

湖一面を覆いつくす薔薇。

赤、黒、黄、緑、青。

全て単一色で混じり気ない力の結晶を。

「ふっ」

短い掛け声を発すると、湖の中心からぱきぱきと音が広がる。

薔、七分咲き、満開、赤、黒、黄、青。 蔦は緑で茨から薔薇を。

わけの判らない植物で覆われていた湖が、色鮮やかな薔薇に侵食される。

濁った水の中に存在していた生命を殺し、ただ魅せるために花を咲かす。

美しいだけの存在に意味はない。

強すぎる力の結晶は、この地の生き物を消しつくす。

影響を与えられるのは人体だけではない。

私の結界の中に存在した植物も全てが枯れ果て消えていく。  
そして命を持たぬ力の塊に飲み込まれていった。

腐れ落ちた何もかもを隠すように薔薇は咲く。

嘗て一度見た光景は、やはり後味のいいものとは思えなかった。

私達の力はこの世界で与える影響が大き過ぎる。

情弱で脆弱な生き物しか居ないここでは、僅かな力の解放でも存在を踏み躪る驚異と生り得た。

羽ばたきを緩め、ゆっくりと地上へ降りる。

興奮した眼差しで拳を握るフレドリックは、嬉しそうに目尻をほの赤く染めていた。

「綺麗だ、伽羅」

エサを喰らい終えた獣のように満足気に目を細めて笑う彼に、そつと瞳を伏せ頷く。

黒に赤を混じらすような未熟な結晶はこの場にはない。

あの日より遙かに色とりどりに咲き誇る薔薇は、それでも私には美しいとは思えない。

こんなに醜悪な光景も美しいと捕らえる存在は、あの日と同じように私に喜びを伝えた。

## 四日目【9】

午後から白檀様と対談が入っているフレドリックと別れ、私は一人与えられている領域へと帰った。

最近香に任せきりにしていたが、『拾い物屋敷』に拾ってきた生き物の面倒は基本は自分で見ると白檀様と約束している。

私の我儘を叶えてくださった白檀様に迷惑は掛けられないし、何より責任のないことは出来ない。

部屋に戻ると自室から出た。

この『拾い物屋敷』の構造は二階建ての木造建築だ。

中央に大きな階段があり、一階部分には部屋が6つとキッチンと風呂場がある。

二階は全てが私の私室一面となっていて、特に重傷な『拾い物』が居るときはこの部屋で看病した。

最近はそのまでの重傷な拾い物はしていないので、基本的にこの時間は一階の中央にいる。

階段を降りた後ろにある中央の部屋は私の部屋の次に広く、入り口のドアはいつでも開放されていた。

部屋の中には様々な種類の拾い者が居るが、彼らには生存本能がないのか、食物連鎖をそのまま入れておいても争いはない。

部屋からは中庭に続く窓も全開にされ、日光浴が好きなものは勝手に外に出て夕食時に帰ってくるのが常だった。

「お姉さま！？どうされたのですか？」

「時間が空いたから昼食はこちらで摂ろうかと思って。黒方は？」

「まだ眠っておいでです。昨晚白檀様とご一緒してから徹夜でお話されたのですよね？白檀様から自然と目が覚めるまで放っておけ

と命じられました」

「そう。なら、昼食は二人で摂りましょうか。用意してくれる？」

「はい！飛び切り美味しいお料理を準備いたします！」

そう言えば昨日は子供のように興奮していた黒方は、先に寝た私と違いずっと白檀様と話していたのだった。

目が覚めたとき二人とも眠っていたので気にしなかったが、黒方が眠いなら白檀様も眠たいだろう。

今日は早めに休んでいたただかなくてはと心に決めつつ、嬉しそうに頬を染めてこちらを見ていた香に笑いかける。

瞳を輝かせて立ち去った香を見送り、そのまま視線を室内に向けた。少し空気が悪い気がしたので力を使い入れ替えると、顔を伏せていた拾い物たちがこちらを見る。

一斉に何十もの瞳を向けられたが躊躇することなく中央まで進み出る。

そして床へと蹲る数匹に近寄り、触診を始めた。

室内に残っていたのは十匹近い数の獣だ。

彼らは四肢を失ったり怪我をしていたりで、満足に身動きは取れない。

ただの獣である彼らに菊花が癒しの力を与えるはずもなく、私自身が必要がないと断じているため彼らは基本的に自然回復を待つ事になる。

たまにハークやアークのように例外が生まれるが、この場に私の力を受け継いだ存在は香と、もう一人しか居なかった。

静かに触診を続け様子に変わりが無いのを確かめると、体を摺り寄せたり舌で舐めてこようとする彼らをいなしで立ち上がる。

室内の拾い物の確認をし終わったら、次は庭の拾い物の確認が残っ



ていた。

庭に出るとそこに居るのは動けるばかりなので、呼ばれもしないのに勝手に集まってくる。

大小併せて十を軽く超える彼らも、室内の拾い物と同じように触診し傷が悪化していないのを確認して立ち上がった。

ここでも擦り寄るものや、舐めてくるものが居たが好きにさせる。べた付いた手は洗えば落ちるし、毛だらけになった服も着替えればいいだけの話だ。

僅かに鬱陶しいと感じる思いもあるが、振り払うほどでもない。

従うように付いて来る彼らを余所に、私は庭の中央付近まで歩くと足を止めた。

「まだ生きてるかしら？」

「・・・・・・・・」

ひゅーひゅーと掠れた呼吸が漏れ、彼は瞬きのみで返事をした。どうやら予想よりも疲労が激しく出血が多かったらしい。

辛うじて胸は上下しているが、意識を留めておくのも難しそうだ。

それでも尻尾を振ろうと力を振り絞るアースの前で、芝が生えている地面へと膝をついた。

真っ赤な毛並みに手を伸ばし、耳元を軽く撫でる。

心地良さそうに瞳を細めたアースの瞳孔は縦に開き、焦点は定まっていないようだった。

この状態だと鼻も利かないだろうし、辛うじて音が拾えるくらいか。私が触れているのに腕一本動かせない彼は、ゆっくりと瞼を閉じる。胸に空いた穴も斬りつけた足も傷は塞がりきっていない。

空気に触れて固まった血が出血を留めているが、体温は下がり触れただけで危険な状態だと判った。

「死にたいかしら？」

「・・・・・・・・」

「殺してあげましょうか？」

「・・・・・・・・」

問いかけに、一回だけ尻尾が揺れる。

伝心と呼ぶにも未熟な意思疎通方法で流れた感情に、私は僅かに口端を持ち上げた。

『死にたくない』『まだ傍にいたい』

言葉にすらならない想いは、ずっと私の胸の奥に入り込む。  
人であることを捨てたアースの感情は、悪魔の私には判り易い。

『愛している』『傍において』

繰り返し繰り返し伝わるそれは、とても覚えがあり共感できる。  
点滅しては消えていく感情に、私はゆっくりと立ち上がった。

これで死にたいと僅かにも思えば、いつそ一息に殺してやるつもりだった。

アースは人間と同じ感情も知性も有するが、所詮は半端な生き物だ。  
この先どれだけ訓練しても昔のように人語を話すこともないし、人型へと変化することもない。

それは魂の許容量を遙かに超えた分を弁えぬ行為であり、同時に望

んだ瞬間がアースとしての存在の崩壊の始まりだ。

私の傍に居るためだけに魔物になったアースは、人であることは捨てている。

「貴方は人間だったけれど、思考が魔に近かったのかしら。それとも私が墮としたからそうなのかしら」

「・・・・・・・・」

「私は貴方の親友が嫌いよ。昔も、そして今も。貴方が生まれるずっと前からそうだったように」

立ち上がったおかげで近づいた背中に、そっと手を触れる。

執念で生にしがみつくアースに、私は見えないよう微笑んだ。

「死にたくなったら呼びなさい。優先事項がなければ、殺しに来て上げるわ」

「・・・・・・・・」

ぱたり、と尻尾を振り了承を示した彼は、そのまま意識を失った。

室内から香に呼びかけられ、アースに対して背を向ける。

それきりもう彼の存在は頭からすっかり消え去った。

## 閑話【フレドリック】

生まれた瞬間の記憶を有している人間は、果たしてこの世界に何人存在するのか。

フレドリックは生まれた瞬間から、今現在までの記憶を余すことなく覚えている。

母の胎内から生まれ、始めにしたのはむせ返るような呼吸。

喉に詰まる何かを鬱陶しく感じながら、背中を叩かれ叫び声を上げた。

泣き続けた自分に向かい誰かが何かを言ったが、聞き取れるほど明瞭に音は拾えない。

そのまま誰かに手を握られ、柔らかな何かに包まれると意識を失った。

それがフレドリックが覚えている一番初めの記憶。

「レイノルドは凄いね！またテスト満点だったんだ」

「・・・別に凄くない。ただ覚えている範囲が出たから」

「それが凄いつて言うんだよ。きっとレイノルドは天才なんだ！」

無邪気な笑みを浮かべて自分を誉める幼馴染に、フレドリックは瞳を伏せた。

まるで自分ごとみたいに胸を張っているが、自分にとってテストなど価値がない上に、神童の呼び名は重すぎた。

フレドリックは記憶力がいい。

否、正確に言うなら『何かを忘れない』。

例えば朝起きて瞬きを三回。それから口での呼吸に切り替え、右の拳を握って小指から開く。

小鳥の鳴き声が一度だけ響き、促されるよう左手を枕元について右肩を前にして上半身を起す。

普通なら意識一つしない行動でもフレドリックの脳裏には刻まれ、何年経っても忘れることはない。

例えば数年前の日にちを指定されても明確に答えることができるだろう。

テストの点数で頭角を露にしたことで神童と言われたが、こんなものは才能なんかではない。

才能などと生易しいものではなく、『呪い』と読んだ方がぴったりの能力だった。

狂わない為に他人との距離を測りなるべく接触を避けようとしているのに、この幼馴染はいつだって無遠慮に踏み込んでくる。

最近のフレドリックはそれが疎ましく、同時に疎ましいと感じている自分を心苦しく思っていた。

何しろこの幼馴染の好意はあからさまで、無視しようにも出来ない。名を呼ばれるたびに、微笑みかけられるたびに、発狂しそうになる自分を理解している。

それでも狂わないのは、最後の最後で何かが狂うのを拒否するよう自分の感情を押さえ込んでいたからだった。

何が自分を留めるのか判らないが、少なくとも目の前の幼馴染の好意ではないだろうと重いため息を吐き出す。

とにかく早く一人になりたいくて、自分を称賛し続ける幼馴染から相槌を打ちつつ瞳を逸らした。

家に帰ると、ある時期からフレドリックが直行する場所は決まっていた。

代々の勇者の『手記』がある封印の間。

そこに入れるのは勇者候補であるフレドリックのみで、閉鎖的な世界は心を和らげた。

子供のフレドリックが二十歩ほど歩けば壁にぶち当たるくらいの狭い部屋に用意されているのは、小さな窓と机と椅子。そして壁際に備え付けられている本棚だけ。

勇者の一族とありフレドリックの家は屋敷と呼べるほど豪勢なものだが、その中でもこの部屋だけは異質だった。

狭苦しい空間でありながら暑さも寒さも感じぬ不思議な部屋。

まるで時を止めたような場所は、昼も夜もほの明るい。

窓から外は見えるのに、外から中は覗けない。

特殊な力が使われているのかもしれないが、少なくとも現代では解析できないだろう。

常人であれば息苦しくなるかもしれない場所だが、これ以上安心できる空間はない。

本棚に足向け勇者の手記を一冊取り出す。

そしてじっくりと読み始めた。

汚れ一つないがぺらぺらの本は学校の教科書よりも遙かに薄い。

記憶力が優れるフレドリックは一回で内容は覚えていたが、それでも本を捲った。

視線を動かし、一言一句をしっかりと読む。

奇妙なまでに心惹かれる『手記』は、幾度読んでも心が躍った。

書かれる内容は淡白で観察日記のようだ。

登場人物は魔王とその側近。

僅か数日の会合でのやりとりと、彼らの取った行動。

繰り返し読む内に心はどんどん引き込まれ、まるで自分が実際にその世界に居る気になる。

感情豊かな文章ではない。表現が大げさなでもない。

ただ、何かが心の琴線に触れ、フレドリックを封印の部屋へと誘う。どの手記に書かれる内容も興味深く面白いが、フレドリックが特に気に入っているのは自分の先代のレイノルドが残した手記だ。

そこだけ異常に分厚い本は、他のものと明らかに一線を画していた。

先代レイノルドが残した手記は優に十冊を超え、一日の終わりにそれを読むのがフレドリックの日課だ。

そして数年後に会うべき相手を思い描き、ひっそりと希望に胸を膨らませる。

本をなぞり記憶した内容ではなく、新たに自分が感じるために。

呪われた記憶力ゆえに何かを楽しむにすら気持ちが少ないフレドリックにとって、この想いだけは例外だ。

早く会いたい。会って、全てを『記憶』したい。

焦がれるように頁を捲る。

一枚一枚読み進める内に、気持ちは募り想いは溜まる。

「早く会いたい。会って、呼んで欲しい。俺の、俺だけの名前を」

レイノルドと呼ばれるのは絶対に嫌だ。

『勇者』の名ではなくきちんと固有名を呼んで欲しいと思うのは、『先代』の気持ちを讀んだからだろう。

早く、早くと心は急く。

会いたい、逢いたいと希う。

金の髪に碧の瞳。

美しさと比例し気高い心を持つ異端の悪魔。

「伽羅。

あんたに、会いたい」

意識せず零れた声は、図らずも年に不相応な熱の籠ったものだった。



## 四日目【10】

城に戻ろうとしたが、白檀様とフレドリックの対談はまだ終わっていないと菊花から連絡を貰い、どうしたものと首を傾げる。城に戻ったは良いものの、予定外に時間が空いてしまった。どうしたものかと迷っていると、菊花から伝心が入る。

「聞こえますか、伽羅」

「ええ」

「今時間が空いているのでしょうか？明日の余興の下見をしませんか？」

「これから？でも白檀様と勇者の会談が終わるかもしれないわ」

「力を使って移動すれば良いでしょう。それに白檀様の勅命です」

「先に言いなさい」

一方的に伝心を切ると菊花の元へ移動する。

瞬く間に現れた私に驚きもせず迎えた菊花は、眼鏡を指の腹で押し上げると不満そうに鼻を鳴らす。

「本当に貴女は白檀様大事ですね」

「当たり前のことよ。それで目的地は？」

「・・・はあ、嫌味も通じませんか」

「嫌味にすらなっていないわ。さつさと目的地を言いなさい」

「判りました」

呆れを含んだ声で頷いた菊花は、宙から紙を取り出すとそのまま広げる。

見覚えのある地形が描かれたそれは、どうやらこの世界の地図だ。この世界の人間が中途半端に作成したのではなく、菊花自身が描いたそれは精巧で緻密なもので、局部を拡大し立体的に見ることも出来る。

彼の力を使っているからこそその代物は今の私にはとても真似できない技巧が凝らされていた。

菊花が指を振るうと五つの地形が浮かび上がり、映像として宙に射影される。

一つ目はごつごつとした岩肌の山が並ぶ地形。

二つ目は澄んだ水を湛える湖。

三つ目は色取り取りの花が咲き誇る草原。

四つ目は溶岩が煮えたぎる火山帯。

五つ目は木が生い茂る森。

地図を確認すれば、彼が選んだのは大国と呼ばれる国に所有される土地だった。

全く違う環境であるが菊花の選んだ場所には一つ共通点がある。それを余興とするのも通例で、問いかける必要もなかった。

「ここが貴方が選んだ余興場所？」

「ええ。下見に付き合ってもらった暁には、貴女に最初に何処にするか選ぶ権利を与えて差し上げますよ」

「何処でもいいわ」

「そう言うと思いました。ですが一応これも白檀様からの勅命です。つまり」

「選択しろ、と言うことね」

遠回しな命令に頷くと、菊花は目を細めた。

「この地域に何か思い入れが？」

「あるわけないでしょう。私はこの世界で仕事以外で外出することはないわ。白檀様のために動くのは苦にならないけれど、好ましいと思える場所はないもの。ああ、でも。敢えて言うなら白檀様が一緒にだされば何処でも好ましいけれど」

「惚気ろとは言ってませんよ。ですが、まあそうでしょうね。貴女は極端に世界が狭い。その貴女がこの世界で興味を引かれるものなど、『拾い物』と認識した何か以外はほぼないでしょう」

結構な言い草だが否定する要素もない。

右側の高い位置で一つに結い上げた髪を揺らしながら僅かに首を傾けると、一つ瞬きして菊花は肩を竦めた。

「とにかく、移動しましょう。貴女がどの地を選ぶか知りませんが候補は二つ上げてください。余興は私と貴女と梅香で行います。他の面々が居ない以上、二人が二箇所を担当することになるでしょう」  
「判ったわ」

「順番の希望はありますか？」

「いいえ」

「なら一番遠いところからにしましょうか」

菊花が指を鳴らすと同時に移動が開始された。

瞬き一つが終わる前に移動し、場所を確認する。

その作業を五回繰り返し、私は選択した。

「決めたわ」

「そうですか。何処にしますか？」

「第一候補は火山帯。第二候補は湖よ」

「判りました。その旨、お伝えしておきます」

胸に手を当て頭を下げた菊花に頷くと、梅香からの伝心が入る。

『勇者君が呼びだよ、伽羅』

『判ったわ』

梅香の言葉を同様に聞いていただろう菊花と一瞬だけ視線を絡め、力を解放すると勇者の下へと移動した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0001n/>

---

拝啓、魔王様

2010年12月5日14時02分発行